
夏空の下

遼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏空の下

【Nコード】

N9346E

【作者名】

遼

【あらすじ】

サイト掲載作品のリメイク二つ目。突然の事故で両親を亡くした二人が同居を始め、次第にその距離を縮めていく。従妹の笑に笑顔を、それから自分も孤独でいなければなおい。何よりも孤独を嫌う二人の、その家族になるまでの人生の軌跡。

prologue (前書き)

書きたいときに書くものなので、例のごとく更新は遅いです。よろしくどうぞ。

prologue

住み慣れた町の見慣れた風景——極彩色のネオンとビルや店舗の灯り、車道を埋める車のライト、人ごみと喧騒、アスファルトの焼け焦げる臭い——開けた窓の外を流れるように過ぎ去っていく。湿った空気は変わらず俺たちを包んだ。

今日も酷暑と言って差し支えないほどには暑かった。立ち昇る煙も少しばかり窮屈そうに見えたくらいだ。夜になっても熱は冷めず、車内をあすクーラーの冷風は流れた汗を心地よく拭き去っていく。俺たちの雰囲気を感じたか、あるいは俺の思考がこうして冷え切っているのを知ってか、いずれにしてもありがたいことだった。それも慣れたものか、運転手も何も言おうとはしなかった。

隣には黒い影。ひとつの大きな箱を抱えていた。

こないだ燃やしたばかりの、俺たちそれぞれの両親の、遺骨だった。

両親とその兄弟、つまりおじやおばが亡くなったのはつい先日のことだ。

仲は良かったが仕事の関係上スケジュールが合わず、四人は時折愚痴をこぼしていた。そんな折、偶然か運命か、たまたま休暇が三、四日ほど重なったのだ。いやこれこそが運命のいたずらとも言えるのか……まあ、悪運も運命のひとつではあるんだろう。

たまにそろったんだから、そりゃあ年齢如何に関わらずともはしやぎたくなる。俺も彼らの血を引いてるわけだ、その気持ちは痛いほどわかる。けれど子供の気持ちくらい察してほしいものだ、夏休みといえど友達と遊び呆けるほうが、家族旅行よりよっぽど大事に決まっていた。両親もおじ夫婦も好きだけれど、やはり気を遣うことに慣れていない俺には、気の知れた友人の隣のほうがずっと居心地はよかった。

後悔先に立たず、なんていったところで、予見することなんてできなかった。何も知らない、知ることのできない「不慮の事故」に対して、俺はどうしていれば正解だったろう？

当日、「擬似一人暮らし」に張り切っていた俺は、はやる気持ちを抑えながら五人を送り出そうとしていた。俺の家——武内家に集まった親戚一家と両親をだ。そんな時、わが従妹であるところの「笑」が、突然に「行きたくない」などとのたまったのだ。狼狽する各両親と、半ばあきらめ半分に呆れた俺に、彼女は理由も答えようとはしなかった。思えば鋭い彼女のことだ、俺にできなかった予見というものをしていたのかもしれない。

まあ文句もなかった。家事不能の俺にとって、家事万能たる彼女の存在はそう、言い方は悪いがすげえ都合が良かったのだ。ご飯を作ってもらえる。掃除だって率先してやるような子だ。洗濯物だって、そりゃあシャイな子だけど、文句ひとつこぼさずやってくれるに違いない。この世の天国だ、あとは任せたぞーと、俺は友達を誘

って街へ出た。

ああ、そうさ、楽しかった。腹がよじれるほど笑った。

彼らが——俺を産んだ、笑を産んだ彼らが死ぬほどの苦しみを味わっている時に、俺はのんきに笑っていたのだ。どうやって理解しろというんだ？ 俺はそんなこと知らないんだ。

そうさ、理解なんてできやしない。どうせ俺は能天気、年中頭ん中に花畑があるような高校生だ。死の概念どころか、自分が何で生きてるのかも考えたことはない。そんな俺が、どうして——どうして彼らが死んだということを、彼らともう二度と会えないということとを、どうして、どうして理解できるだろう。

家に帰った時、リビングのドアに背を向けソファに腰掛ける笑の背が、消えそうなほどに小さかったのは覚えてる。震えもせず、そう微動だにせず、俺の呼びかけにも答えなかった。少しずつ焦れてきて、いらいらして、大声で呼びかけたらそう、彼女は的確に教えてくれたのだ。蚊の鳴くような、いやもつと儚く小さく——

——「お母さんたち、死んじゃった」

そう、彼女は端的に、しかし的確に、正確に、確実にそう答えたのだった。

愕然とかそういうのを軽く通り越して、もう心を手放したような心地だった。それを心地と言うかは知らないけれど、とにかくもう何も感じる事ができなかった。

呼吸が止まったような静寂と、空気を燃やすような夕陽と、包み込む湿気と、笑の小さな背中。

外にはセミが鳴いていた。短い命を燃やしているようだった。

それから息つく暇もなかった。死亡届、葬儀、通夜、納骨その

他とまあ、「人の死」がこんなにもあわただしいものだとは思ってなかった。でもまあ、俺がこうしてせわしなく動いてるから両親はゆっくりしてるだろうとか、そんなことを思っていた。余裕がなかったんだろうと思う。

その為か、それを言い訳にするのも見苦しいが、笑とはほとんど話すこともなかった。弔問客に出すお茶とか料理とか、そういうものの一切を彼女が担当していたこともその一因だろう。その弔問客も俺たちとの繋がりには希薄で、彼女は一言も発せずただ呆然としていた。いや一人だけ、小さな女の子がしきりに話しかけてたっけ。まさか両親との最期が旅行に関しての口論だなんて、彼女も予想だにしていなかったらう。

両親はもう「モノ」だ。ただの白い灰になった。これがあの忙しい、けれど優しくかった彼らの残骸——何を思えばいいのかわからないのは俺だけじゃないらしく、笑もまた、その過程においてもずっと、ただ呆然としていたように思う。

このタクシーの車内でもまた同じだ。軽くうつむいて、焦点の合わない視線を虚空にさまよわせていた。

車内は変わらぬ静寂、街の灯りや喧騒なんてものはもはや外の世界だった。外の青年と目が合った気がしてすぐにそらしたけれど、そんな行動にも意味があるとは思えなかった。もしそうだったとしても、彼はたぶん車道を何気なく見たただけなのだ。

けれどそれだけで心がささくれ立った。見るなとか、笑ってんなとか、そういうのがうつとうしくて仕方なかった。

もう何も無い。そう錯覚しそうなほどの世界の中、ようやく暗闇と静寂が俺を苛んだ。

理解した。「死んだ」から「もう会えない」んだ。

理解すると余裕が生まれる。不思議なものだ、もう会えないとわかったとたんに思考が生まれた。現状、将来、不安を数えればきりがなく、思考はすぐにオーバーワークを示した。そうすると気遣う

余裕がなくなつて、気づけば俺は隣に座る笑に助けを求めている。
「どうしようか、これから」

けれど、案の定というとおかしいけど、返事はなかった。

寂しさ？ 不安？ よくはわからないけど、俺はそういうものを
紛らせようと試みてみただけだ。紛れたかどうかは知らないけど、
彼女はそれを感じてくれたかな？

三年前くらい前に会ったのが最後だろうか、彼女はえらく俺にな
ついてくれていた。たった一人のかわいい従妹だ、一人っ子なもの
あつて俺は本当の妹にするようにかわいがった。実際かわいいしな
おぼろげだけどそれは覚えてる。

虚空を映す瞳には、何も宿らない。

「とりあえず何か話さない？ 実にならなくてもいいからさ、でな
いと……」

情けないけどつぶれそうだった。心にかかった負担がようやく身
体に追いついた感覚だ。

寂しい。不安。それから恐怖と空虚も付け加えておこう。

感じてくれたかは知れないまま、けれど笑は答えてくれた。

「……ないの」

か細い声。耳をくすぐる澄んだソプラノ。けれど……

「わかんないの、何も」

そこにはやはり、何も宿ってはいなかった。

その後に続いた言葉もそう、何もかも宿らず、整理すらされず、
ただ口からこぼれた彼女の空虚だ。だから俺には何も言えず、返す
ことができたのは沈黙だけ。

「先のこと、なんて」

考えられない。そう続いた言葉。

ああ、そうか——なんとなくだけどわかった。それが正解かどう
かわからないし、今はわがらうとも思えないけれど、それは置いて
おいて、とにかく口について出た。

理由なんてない。ただ確かなのは、両親が死んでから彼女は一度

も泣いていないということ、働きづめだったこと、生来弱かったこと、だから……壊れそうだった。そう思うと焦燥感ばかりが募って、たぶんこの先のこともかも一切考えることもなく、ただ言葉だけが口について出た。

「あのさ、一緒に、……一緒に暮らさない？ いい歳の男女だし未成年だけど、まずいかもしれないけど、ほら、いろいろ協力できるだろ？」

そうしてしゃべっていると次第に思考がクリアになる。とめどなく流れ続ける音と対照的に、漣のように穏やかな心を取り戻してきた。湖面にたゆたう心地だった。

そりゃあ俺たちは未成年だ。精神的にもまだ不安定だ。確かに二人きりだけど、これからも問題は山積みだけれど、でも、気にしてなんていられないだろう？ 彼女の為か自分の為か、いずれにしたって、独りは怖いんだ。孤独は嫌いだ。何より残酷だ。けれどそれより、それに慣れてしまうことが怖かった。独りにはなれない性質なんだ、俺は。

「自慢じゃないけど俺家事とかだめでさ、でも力仕事くらいならできるし、お前家事すげえ得意じゃん。助け合って……っーには俺の比重足りないけど、……だめかな？」

もうわけわかんなかった。彼女が何も言ってくれないのもそうだけど、言葉だけで実が伴っていないことが不安だった。

顔が火照った。心悸がひどい。何かわからないものに押し潰されそうだった。

急かしても仕方ない。けれど口だけは回った。意外に落ち着いてるような気もしたけど、とりあえずのこと彼女の言葉がほしかったのは確かだ。彼女の心もまた冷え切ってるんだろう。

答えを出すのはそれでも簡単じゃない。そう思ったとたんに口が止まった。また静寂が世界を包んだ。それに焦ったわけじゃない、別に意識したわけでもないけど……不思議とその言葉が脳裏に浮かんだ。

「残った、たったふたりだけの、家族だしさ」

たぶん錯覚だろう。そう突然に変わるわけもない。けれど笑の瞳に光が灯った気がしたのだ。そしてそれを見て俺の目が輝いたのは、たぶん確かなのだ。

深い、深い黒。吸い込まれそうなほど、星のない宇宙のような深遠。身体がこわばった。

何を見ているのか——そう思って見惚れていたら、彼女は言った。そう、言ってくれたのだ。

「うん。暮らそう、一緒に」

言ってくれたのだ。家族になろうと。
これから一緒に歩むんだと。

第一章―二人の日常―1

町の名は御空、市の名は日向とされている。国のちょうど中部に位置し、人口は三万人足らずだが、その衛星都市というあり方からそれなりに栄えてはいるという町だ。取り立てて変わった名物もないが病院や学校といった設備は整っており、その要件はあらかた満たしているといえる。しいて言うなら、娯楽施設が足りない程度だろうか。まあ俺くらいの年齢から考えると一番の致命傷ではあるが、住み辛さを感じたことはない。

とはいえ、この町は少し変わったところがあるのだ。南北を隔てるように走る線路が本当に雰囲気をも隔ててしまっている。開発の時期とその当時の技術力からか、近代型の鉄筋コンクリート造りの建物を中心とする通称「北側」、それから木造住宅を中心とする「南側」とまあ、航空写真を見ると一目でわかるほどにそれが分かれていたのだ。繁華街のあるのが北側というのもあり、新居を構えようとする新しい住民はたいてい北側。古くからの地元民は大体南側に住み分かっている。

高校もそれぞれにひとつずつ。笑の住む南側には「私立結城学園高等部」、俺の住む北側には「市立御空高等学校」といった具合だ。古く伝統を重んじる南側通称「学園」は、勉学を重んじ、格式ある名前からいまだに新入生も多く、その強い支持から木造の旧校舎すら残る古めかしい学校だ。自由を校風とする北側通称「ミソガク」は、……いやまあ、自由っちゃあ自由だが、いささかルールが整っていない嫌いがあり、まだまだ途上といった風情がぬぐいきれていない。いやだからこそ張り切る生徒もいるにはいるが、まあやはりこれからといった新設校だ。

その高校の特徴が、まさしく俺たち従兄妹をあらわしていた。なんというかまあ、分かりやすい親族だとは思うよ。

夏空の下 ―第一章 二人の日常―

↓ 1 s t e p i s o d e ↓

つい先日両親を亡くした俺と笑は、言い方はおかしいが、空いた穴を埋め合わせるように共に暮らすことになった。敢えて言う必要もないが、そりゃあ年頃の女の子と一緒にだから戸惑うところもあるが、それ以上に笑がかわいくて仕方がなかった。ああかわいいさ、憎らしいほどに。

愛情がある――それが少しつらい。誰より俺をおもんばかってくれた、誰より愛情を注いでくれた両親の死を、俺はまだ受け入れ切れていない。そんな中で彼女に注いでやれる愛情というのは、やはり多少ゆがんだものをはらむと自覚してしまっている。それが「逃げ道」であることを、たぶん彼女もわかつてはいると思う。

私立は金がかかる。その上笑はまだ一年だ。そういうこともあって、笑は早急に編入試験の準備を進め、そしてすぐにそれを決めてみせた。驚くべきことに、その結果を現一年の一学期末テストと照らし合わせると、なんと学年で三位ということになるらしい。聞いた話ではあるがまあ、うちの従妹はどうやらとても高い学力を持っているらしかった。余談はおいておて、それにあわせて彼女は北側へと引っ越してきた。いや俺の家にだけど、これからは彼女の家でもあるのだ。子供だけでどうにかできない部分は、親切にも近所の人たちが請け負ってくれた。情けない話ではあるが、両親のいない

高校生二人でできることというのは本当に少ないのだ。

その上、それも両親のがんばりのおかげだった。ローンを完済し、忙しい中でも近所との交流を絶やすことなかった両親だからこそ、彼らの好意というものを享受することができた。ありがたい。

笑の家——牧野の家はすぐに引き払われた。もう彼女の家ではない。

それなのに、自分の手から離れていった思い出の地を見ても、彼女は表情ひとつ変えることはなかった。

容貌だけを見れば、おぼろげな記憶の中の彼女からは大きく成長していた。思わず見惚れそうなほどきれいだった。

白く緻密な肌に覆われた顔とそれをなすパーツのそれぞれがひどく整っていて、バランスも完璧に近い。少し下がった柳眉の下、大きな垂れ目が眠たげに輝いていて、小さな鼻はけれど筋の通った高いものだ。唇は薄く、しかしふつくらとやわらかそうで、つややかに光っていた。

何より髪が美しかった。墨汁が波ひとつ立てずにいるとこういう具合に光るだろうか、いやしかし吸い込まれそうなほどに深い黒なのだ。瞳の色と似たそれが、清流となつて腰まで落ちている。水も光も何も通さず、そのすべてを吸い取ってしまったような黒。陽光の中にあっても確かな存在感を示す黒。これがたぶん「本当の黒」なのだ。

けれど、変わらない表情がその魅力を確実に押し下げていた。いつもいつもぼうつと虚空を眺めて、俺の言葉にも空返事だ。この子が笑うとどんなふうなんだろう……それがやけに気になった。子供のころからそうだった。いつも親の陰に隠れて、それがいなければ俺の背だ。

無感情というわけじゃない。無表情でなく、それが変えられないだけだ。

だから俺が——せめて最後に残った家族だけでも、彼女を笑わせ

られないだろうか。

もうすぐ夏休みが終わる。終盤は葬儀に追われて休みとはいえなかったけど、まあ何もしていないよりはずっと気が紛れた。それがいいことかどうかは置いておいてだ。

今日も猛暑、冷房の効いたリビングの居心地は最高だった。雑誌を読んで——いや読んではいないだろうけど、それを見ている笑の額にも汗はない。まあ、汗が出るならそれはそれでかまわないけど。陽光と湿気に包まれてじわりと浮かぶ汗は、むしろ彼女の魅力を妖艶に彩った。

「……どう、したの？」

そういう俺の視線に気づいたのか、笑はいぶかしげに俺を見た。きょとん、とでも言いそうな目だ。いつもいつも眠たげで、その大きさとあいまって幼さを助長する。かわいい……いや、ほんとに見とれる俺に首をこくと傾げ、笑はまたその意味を問うた。

かわいい仕草に笑みがこぼれる。それが気に入らないか、笑の眉間にしわがよる。いかな、ちょっと調子に乗りすぎた。

「なんでもない、なんでも」

「……そう？」

言つと笑は雑誌を傍らに置き、窓の外の庭を見た。本当に申し訳程度、せいぜい六畳か八畳分くらいのスペースしかないそこには、両親が亡くなつてから少しずつ雑草が芽を吹き始めていた。けれど何も無い。けれど彼女にとっては珍しい光景に違いないのだろう、何分も飽きることなく見つめていた。

短く平坦な物言い。しかし彼女のそれに不思議と冷感はなく、その澄んだソプラノにはむしろ安堵すら感じるほどだった。親族のひいき目もあるう、そういう思考が恥ずかしくなつて立ち上がった俺に、笑はまたいぶかしげな視線をくれた。

「紅茶、飲むか？」

「うん……ストレート、で」

「りょーかい」

向かったキッチン是对面式だ。両親の多忙に見合うだけの経済力はあったから、結構豪華なシステムキッチン。笑もまだ使いこなせていない。そこから見える笑の背中。

何一つ変わっていない——事故を告げられたあの日から、彼女の背中には何も宿っていない。細く小さく、頼りないままだった。

パックを取り出し、スティックシュガーをソーサーに寄せ、両手にそれぞれ紅茶を持ってリビングへ戻った。彼女はストレートと言っていたから、この砂糖は俺の分だ。ストレートは確かに紅茶の香りがいいけど、あんまり香りばかりで味気ない。コーヒーも同じく俺はやっぱ砂糖か牛乳をどちらかでも入れないと飲めない。

それを大人と称するか——いやまあどうでもいいけどさ。ソファの前のテーブルにそれを置き、俺は笑の隣に腰掛ける。沈むソファに揺られる笑。

「いれてやったぞ」

「……ありがとう」

そこは文句くらい言うところだろうが、笑。えらそうだとか、そういうことをいえるような関係になろうじゃないか。

……とまあ、そんな贅沢は言わない。笑は昔からこんなふうだ。

ついと口に含み飲み込むと、笑の真っ白なのどがうごめいた。幼い割に少しつややかな仕草に、少しどきどきする。美人というのは厄介なものだ。

そういう事情もあって、ここしばらくまともな会話がない。それに気づくと早かった。

「なあ、友達とお別れ会とかしたか？」

「ん？ うん……して、ない」

両親の死からの転校でにぎやかにするのも不謹慎かもしれないけど、あながちばかにはできないものだ。人それぞれに傷の埋め方がある。俺にとっての理想が、そうして騒いでいることというだけの

こと。

だから笑の答えは少し意外だった。紅茶をすすり間をおいて、また言う。

「なんでかな？」

「いない、から……あの、ともだち」

多少言いつらそうに、けれどもつきりと答えてくれた。

友達がいない——それは俺にとって少しばかりこたえる事実だった。笑もまた孤独だったのに、俺はあの日——誰もいない中、どう過ごしていただろう？ あの日一緒にいて、一緒に訃報を聞いて慰めていれば、また違った結果が生まれただろうか？ わからない。

理由を問うて、すぐに撤回した。こんなことを弾みでも聞いた浅慮を謝ると、笑は少しうつむいてぼつぼつと話してくれた。話す必要もないけど、聞かせてくれるというのならおとなしく聞いていよう。何よりその声が心地よかった。

「その、しゃべらない、し、愛想も、悪くて」

たどたどしく、俺の目をうかがいながら、笑はそう言った。

「ちゃんとしゃべってるじゃん」

「でも、だめ」

「ふーん……まあ、いいけどさ」

その気弱な瞳を見るに、それ以上追求する気にはなれなかった。ひとつだけ気になることがあったから、それきりにしよう。

「葬式のときやたらとしゃべってたのは？ ほら、あの小さい女の子」

「……あの子は、よく、わかんない」

「あんなに気にかけてくれてたのに」

返ってきたのは、しかし沈黙。それも今に始まったことじゃない、無理に話させることもないだろうと、俺はその話を切り上げた。

陽光は変わらずリビングを駆け回る。冷房の送風と一緒にになると、すごく心地のいい光だ。

そうしていると、笑はいつの間にかうつらうつらと舟を漕ぎ出していた。こくりと頭が落ちるたび目を覚まし、あわてて頭を振る。そういうことを繰り返し繰り返し、まるで子供のようだ。美貌の上に背もあり、そりやあ俺以外から見れば「幼い」とは言いづらい容姿かもしれない。けれど彼女は妹なのだ。

かわいいかわいい、牧野の娘なのだ。

「ふえ……」

次に頭が落ちると、ようやく俺の視線に気づいた。はたと目が合以外すタイミングも逸し、俺たちはしばらく無言で見詰め合っていた。照れてはくれないだろうかと期待はあったが、まあそれでもいい。

「あの、兄、さん？」

返事はしない。ちよつとしたいたずら心だ。

「あ、あの、や……」

それにしてもきれいな黒だ。漆黒とも言えるし、あるいは奥深い宙のようでもある。ならば瞳が、清輝する星だろうか？ いやいやきざったらしい喩えだ。

そのうち笑のほうから目をそらしてしまい、俺もそうせざるを得なくなる。

心持頬が赤いだろうか？ 笑はそのまま立ち上がり、キッチンに小走りで向かってしまった。あんまり冗談の通用する子じゃなかったなあ、そういうええ。悪乗りが過ぎたと謝るが、笑はうつむいて何もこたえようとはしなかった。

あきらめ半分、俺はソファの背に身体を預けた。冷房の駆動音とそれから笑の足音、セミの声——音にあふれているのに、不思議な寂寥感だった。祭りのあと、こういう空気になるだろうか。喧騒が去り、楽しむものを楽しむだけ楽しんだあと、どうしてか寂しくなってしまう。結局なんだったんだろう——過ぎ去ったものがあまりにあわただしくて、たぶんそう感じるんだろうと思う。

笑がキッチンから顔をのぞかせる。いや笑、対面式だからな、顔

を覗かせても身体は丸見えだぞ？ それに気づくと笑は頬を紅潮させて姿勢を正した。

「あの、材料が」

「ああ、なくなってたか」

「そう、かな……えと、今日のぶんは、なんとか」

「まあ、でも、買いに行くか」

笑はしばし思案し、結局素直にうなずくのだった。

明日のものは明日買おうということで、笑は昼食作りに取り掛かった。今日のメニューはソーメンチャンプルーなるものらしい。チャンプルーって確かかなり南のほうの料理で、炒め物だったよな……焼きソーメン、といったところか？

まあ笑の料理に疑いなどないのだ。もともと好き嫌いはないし、笑の料理はたいいていおいしい。ソファの背もたれにあごを乗せ、料理に励む笑の背を眺める。

細いなあ、この子。ここまで行くと病弱に見えなくもない。その頼りない背中があつちらこつちら、広いキッチンを動き回る。背筋が伸びてて、彼女の高身長だとえらく様になった。これで友達できないとなると、やっぱりあのたどたどしいしゃべりなんだろうなあ……

俺の視線に気づいて、すぐに目をそらす。笑って子は、一見表情が見えないけど、よく見るとわかりやすい感情表現をしているのだ。「ふむ」とつぶやき、俺は立ち上がってリビングのドアへ向かう。

「どこ、行くの？」

「二階。できたら呼んで」

「……うん」

うつむ、やっぱりわかりやすい。

けれどもまあ、気に留めないふりをして、俺は二階に上がるのだった。

玄関からまっすぐ行ったところがリビングで、途中右手に三つ扉がある。玄関側から風呂場、書斎、両親の寝室となっている。玄関左手には階段があり、上りきるところで右に曲がる構造になっている。て、まっすぐ行くと俺の部屋とトイレ、右に現在笑が使っている客間がある。

自室に入ると、エアコンも点けずにベッドの上で横になった。コンポ、本棚、クローゼット、俺の私物にあふれたこの部屋の中に、俺が自費で買ったものはない。必要なものを買ってもらったのはもちろん、小遣いだって両親が稼いだ「両親の金」だ。

苦勞の成果。それがこの部屋——ひいては「俺」なのだ。けれど苦勞とも思わず……本当のところはどうか知れないけど、彼らはいつも笑いながら俺を育ててくれた。

心からの「親」だった。時には厳しいことも言うけど、口うるさいこともあつたけど、それも結局全部俺のため……そんな説教とかを、俺はどんな態度で聞いていた？ 両親の事故を予見できなかったのは、悔しいが「仕方ない」としか言いようがない。後悔のしよもない。けれど、俺が両親に対してとってきた態度というのは、すべて俺が選んできたものだ。後悔があるとしたら、まさしくそっちだった。

親孝行 したいときには 親はなし

だったか？ そんな標語があつたと思う。あんまりに耳が痛くて、それを思い出すと自分が情けなくなる。枕に顔をうずめて、低くうめいてみた。

笑はその点「いい子」だったなあ。手伝いもするし勉強も一生懸命、うちの両親もいつも「笑ちゃんを見習いなさい」って引き合いに出すほどだった。あの子はこんなふうに後悔していないのだろうか？

たぶん、あの子こそ後悔につぶされそうになっていると思うのだ。あまり表情に出ないけれど、なんとなくそう思う。

おじさんもおばさんも、果ては俺の両親まで一緒になって「笑ちゃんをよろしくね」と俺を頼ったくらいだから、彼女というのはそれほどまでにそう、こういうと失礼だが、弱かったのだ。いつもいつも張り詰めていて、あるいは溜め込んでいて、それを緩めたり発散させたりという術を知らない。

初めて会ったのは九年くらい前だ。眠そうな目をぶら下げて、おばさんに手を引かれて俺の家にやってきた。最初はそうさ、俺にもなついてくれなかった。でも従妹だろ？ 何度も何度も、会うたびに構った。いやとは言われなかったし、たぶんそう思ってもいなかったはずだ。そのうち笑は俺の背を追うようになり、いつか本当の妹になった。

彼女に笑顔を与えられるとしたら、もう家族しかないと思うのだ。友達、あるいは恋人がこの先できたとしても、彼女はそれだけでは足りないと思う。

もう遅いかも知れないけど、それがたぶん、俺にできる最後の親孝行なのだ。

思い出の中で、おばさんに頭をなでられて照れてしまう笑の姿が見えた。やっぱり淡い表情だけれど、それはものすごく可憐だと思っただのだ。

昼食を終え、再び自室でくつろいでいると、すぐに夕食の時間が来た。笑に呼ばれてリビングへ入ると、芳しい香りが鼻腔をくすぐった。匂いでその正体を確かめるより前にテーブルを見ると、そこにはグラタンと思しき料理が他のおかずと共に並べられていた。前に買ったくるみパンと、それからポテトサラダかな。

食卓につき、すぐにフォークを取った。笑もそれにならう。

「うまそう」

「そう？」

「昔からお前料理すげえうまかったもんなあ」

いただきますの前に少し雑談でもと、口を開けば、笑の反応はた

だの一言だった。けれどもそれが笑だ、決して邪険にされてるわけじゃないとは見ればわかる。

「笑さ、いくつくらいから勉強始めたんだ？」

「んと……たぶん、小学校、に、入った、ころ」

うわと驚くと、笑はまた首を傾げる。疑問を抱く理由がわからない、くらいだろうか？

まあいいや、俺の事情を話すと軽蔑されそうだ、すぐに食事を始めよう。

「じゃ、遠慮なくいただきます」

「うん。ぱん、まだある、からね」

返事もそこそこに、まずは一番「腕」の表れそうなグラタンから手をつけた。えびの尻尾が出てるから、たぶんシーフードグラタンなんだろう。伸びたチーズを苦心して引きちぎると、大口を開いて強引に突っ込む。

「あっふ！」

いかん熱い、やけどする。外気を取り入れながらなんとか咀嚼していくと、猫舌でもないからかすぐに落ち着いてきた。落ち着くと味が染み出てくる。

「うっめ……」

「？ 口に合わ、ない？」

俺の唸りをうめきととったか、笑が首を傾げる。今度のそれは不安そうだ。

けれど違うのだ。ここ数日で慣れたつもりだった彼女の腕に、感嘆の声が出てきただけ。それを素直に口に出すか迷ったが——彼女を見ていたら、不意に口に出ていた。

「おいしいよ、うん、最高だ」

たぶん、すげえ笑顔だったと思う。それくらいよかった。

そうすると笑が……笑……

「あり、がと」

笑が、笑ったのだ。

ただの照れ笑い、しかもほとんどわからないようなものではあった。けれど俺にははつきりわかったのだ。笑った。

うれしくて仕方なかった。彼女が笑うとこっちまで笑いたくなる。戸惑いもあったか、すぐに引っ込んでしまったけれど、それは脳裏に焼きついた。目を閉じて思い出す。――忙しい両親だった。おそらく家には独りでいることのほうが多かったはずだ。会えばやさしい夫婦だったけれど、果たして笑が望んでいたのはその楽な暮らしだったろうか？

こうして過ごす何気ない会話に、また笑みがこぼれた。

「んっ？」

くるみパンを両手に首を傾げる笑。俺の変化に、すぐに気づくんだな。

「そっぴやまだ言つてなかつた」

「……うん？」飲み込み、傾けた頭をさらに深くする。

「よろしくな、笑。これから」ずっとという言葉は、あえて口にはしなかった。

けれど笑は答えてくれる。淡い、少し戸惑った様子の照れ笑い、そう応えてくれた。

「よろしくね、兄さん」

いつしか彼女も何かに突き当たり、いつしかその答えにたどり着くだろう。

そういう転機、あるいは岐路といったものにつきあたったとき、彼女はどんな顔をしているだろう？ そのとき隣にいるのは誰だろう？

将来に不安は多いけど、今はこうして小さな笑顔を積み重ねていく。こう。

いずれくるそのときまで、俺はずっと、そうずっと、彼女のそば

に
い
る
の
だ。

第一章―二人の日常―2

「突然だが笑」

翌朝、目を覚ますとそこに笑の顔があった。近いな。

しかしそんな突然にも一切動じることなく、俺はこう言ってみせたのだ。

「きす……したくなっちゃった」

夏空の下 ―第一章 二人の日常―

↓2nd episode↓

そんな俺が頬を赤く腫らしている現在は午前七時、朝食の時間である。

いやはやちよつとした冗談も許されない性分らしい。そういえば昔から「そういうこと」に疎かったっけなあ、笑ちゃんってば。小学生のころから変わらずうぶだとはまあ、かわいいことだ。生温かい視線を送る俺である。

「……なあに？」

しかしうつむ、やはり美人だ。

従兄、あるいは兄としてのひいき目もあるだろうか？ 客観的に見てもかなり見られる容姿だとは思っただが、いかんせん彼女を知

る人間というのが少ないのが致命的だ。「信」とか「律」が見たらどう言うだろうか。……まあ、あいつらに期待なんぞしちゃいけないさ。

笑を見ているだけで意外に飽きない。かわいいというのはもちろん、なぜか顔を隠そうとする挙動が面白いというのもある。

「……み、見ないで」

「笑、見られるのは苦手か」

「う、うん……苦手というか」

歯切れの悪い返事だ。

こういうのが嫌いな俺だが、しかし笑が相手だとまったく腹立たしく思わないのもまた不思議だった。こうなってくると笑の言動行動すべてを許してしまいそうな自分が怖い。

ちりちりちりと上目遣いに俺の表情をうかがいつつ、笑はたどたどしくも話してくれた。

「あの、男の人が、苦手、で」

「ほほう。なんだ笑、苦手なものと一緒に暮らしてるのか」

「あ、ちが、ちがうの！」

珍しく声を荒げた笑が立ち上がると、その下でいすが暴れまわった。必死になつていたのを忘れたように落ち着き払ってそれを直し、また必死に言い募る。見ていて飽きない子だ。

「に、兄さんは、その、特別、だから」

「特別……」などと女の子に言われると、少々面映い。

勘違いは正さねば。俺にしてみたって笑は特別だが、それが恋心かと言われると首を横に振らざるを得ない。

「私の、だいじな、ひと」

「や、やだもう笑ちゃんったら」

「ちよつと、ふざけない、で、ほしいけど」

「ごめんなさい」

かく言う俺は、何かと冗談めかせないと気がすまない性質だ。どうして笑になつかれているのかもよくわかっていない。

「そつえばさ笑、お前、俺のこと兄さんって呼ぶよな」

「……覚えてた、んだ」

どうやらそう呼んでいたことを忘れたと思われていたようだ。学力は確かにないが、そういった思い出なんかは結構覚えてるタイプだぞ、お兄ちゃん。

理由を尋ねれば、俺と似たような答えが返ってきた。

「私一人っ子で、それで、ほんとの、お兄ちゃん、みたい、だったから」

「お兄ちゃんか……」

兄さんもいいが、お兄ちゃんはちよつと卑怯だな。

兄という響きの甘美にはもはや人類の業すら見え隠れする。こんなかわいい女の子に「お兄ちゃん（はあと）」とか言われたらどうだ、誰だって陥落する。いやしかし笑がそういうことを言うとは思えないし、その表情で言われても違和感ばかりが付きまとうような……まあ、よしとしておこう。

「今は惰性」

「台無しだな」

口角をひくつかせて、笑は不器用に笑った。声を上げてとまではいかないようで、「面白い」に対して素直な感情を表現できないらしい。

とはいえ、両親の死から一週間足らず、その暗く沈んでいた空気は形を潜めていた。笑がいるだけで視界が拓け、また明るくなった。笑顔を見た昨日なんかは、まるでこの世の春を体験したかのようだった。俺は笑に守られているんだ——そう思うと少し照れくさく、また思うのだ。この子のことを、俺は守らなくちゃいけない。

小さな口でトーストを頬張って、笑はまた小さく口を動かす。一口に食べる量は少なく、咀嚼も遅い。けれどじれったくはなかった。いつまでも眺めていたくらいだった。視線が苦手とは言ったけど、この子のことは見守っていたいと思う。

「兄さん、あの」

「ん？ どした、遠慮するな」

「あの、今日……」

はてと首を傾げる。笑はやはりうつむきながら上目遣いに俺の表情をうかがって、積極的には発言できないようだった。まあそれもいい、いずれ慣れてくれれば。

さてと、そうなると俺が思い出すしかないわけだ。今日の予定とは言っても日常の積み重ね、笑との会話の端々に彼女の願望が現れているはずなのだ。そんなに無茶を言う子じゃあないはずだから……
…というか、まあ、すぐに思い出したけどさ。

「デートの約束をしていたな」

「で……！ ち、ちが……」

狼狽する笑をニヤニヤと観察する俺って、客観的に見ると意地悪といった部類になるのだろうか。打てば響くというとおかしいが、思ったとおりの反応を返してくれる笑はすごく心地よかった。支配願望があるわけじゃない。笑のその小さなお尻に敷かれることもやぶさかではないのだ。が、あまり潔癖だと周りが受け付けない。

笑は人付き合いの基本として一歩引いて眺めるようなタイプだという印象があった。それ自体悪いことではないが、それであればせめてその話に合わせるだけの度胸がなければならぬのが事実だ。下世話な話になったとき、あんまり狼狽するばかりだと、いつか破綻する。そういうことが心配だった。

ひとしきり言い募ってから、笑は落ち着き払って言う。

「買い物、兄さんと、行く」

「ああ、わかってる。一緒に行こうな」

そうさ、ちゃんと言えたならそれなりの対応をしてやるとも。

テーブル越しに笑の髪をすいて、笑いながら言ってるのだった。

駅前の繁華街は、南側のそれと違い大きな建物が目立つ。南側のものはどう言い繕っても「商店街」がいいところだが、北側のそれはその両面を持っている。各専門店が軒を連ねるいかにもな商店街

を抜けると、次第にファミレスなどの中型店舗が目立つようになり、やがてビル街になる。こういった繁華街は便利ではあるが、しかし、あまり風情というものを見ることができなくなっていた。

そういうことが気になるのか、俺の横をちょこちょこついてくる笑は、辺りを見回してなにやら不安そうだ。人が苦手というものもあるだろうか、俺のシャツの袖を指先でつまんでいる。

「……お前さ、買い物はどうしてたわけ？」

「え？ ……えと、服は、お母さん、が」

で、食料品は南側の商店街で済ませていた、と。

「年頃の娘さんとは思えんなあ」

「だって、服なんて、何でも同じ、じゃない」

その発言、その感覚が「年頃の娘さんとは思えない」わけだが、どうやら彼女にそれを言っても無駄らしい。ファッションに気を遣わずともそれなりに映える容姿だからというのもあり、俺はそれ以上の言及は避けておいた。少しルーズな空色のチュニックと、藍色のデニムハーフパンツ。まあ無難といえば無難だが、果たしてそれが若者の感覚かはよくわからなかった。

笑はくいくいと俺の袖を引き、俺の視線を指で導いた。

「ああ、肉屋ね」

「うん。豚肉と、それからベーコン、を」

商店街を買い物がてらに歩く青年男女というのは、果たして周囲の目からどう映るのだろう。そういうことをふと思って、笑を引っ張って肉屋へ入る。

意外に清潔に保たれている店内には、ショーケースの中に並んだたくさん肉が俺の目を楽しませた。ううむ、ステーキ用のサーロインとかすき焼き用のばら肉とか、ようわからんがとてもうまい。でも笑ちゃん、高いものをご馳走してくれそうな雰囲気じゃない。

まあいいのさ、家の権力というのは、金を稼ぐ人以上に食事を掌握する人物こそが握るものだ。たとえば俺がバイトでもして稼いだ

ところで、その金を有効に使ってくれる人がいればそのほうが都合がいい。笑はすっかりした子だ。

こうして見ていても、まるで一端の主婦だ。俺には何の違いもわからない肉を真剣に見、そして店員と交渉を重ねている。どれがおいしいとかあるんだろうか？ 脂とかな。

入り口の横で待つこと数分、笑は紙袋を抱えて戻ってきた。

「お待たせ」

「ああ、持つよ」

「……そう？」

遠慮はいらんと強引に紙袋を引っつき、左手に抱えた。そうして笑は俺の右腕の袖をつかみ、店外へ出てまた歩き出す。

毎日毎日ご苦労なことで、太陽は今日も世界を照らしている。アスファルトを溶かし照りかえる光が網膜を焼き、脳をも溶かしてめまいを催す。この太陽は今も膨張を続けていると聞いたことがあるが、本当だろうか？ これ以上暑くなることなんて想像できなかったかもしれない。このまま膨張を続ければ何億年後には爆発するとかで俺なんてものはそんなときにまで生きてはいるはずもないけれど、果たしてそのとき俺の子孫か何かがいるかもしれない。こんなことも今までなら考えもしなかったけど、「子供」とか「死」について考えることが多くなったから、少しだけ気になった。

そうしたことを表情に出さないよう努め、俺は袖にある笑の手を取り返し、握った。

「……にいさん？」

「ん、いやだったか？」

「……んーん、や、じゃないよ」

笑の顔を見ず、その小さな手をしっかりと握った。

俺のそれより一回り小さく、そしてそれよりずっと細かった。けれど感触だけはどこまでも柔和で、この気温の中でも不快に感じない温もりがある。不思議な手だった。艶やかで、滑らかで、ああこれに撫でられていると眠くなりそうだというほどに優しい。

笑もまたそれを握り返してくれた。彼女の非力で、それでも精一杯の力を感じた。

無言のまま、俺たちは商店街を通った。途中で寄った八百屋や魚屋、それからスーパーの中でも、手が空くたびに互いに握り合った。買い物が終わり、俺たちはファミレスで昼食をとることにした。手を離すのは惜しかったけれど、どうしてか示し合わせたように向かい合って、窓際の席に座った。

「飢えてんのかなあ、俺」

「ん？ 何、が？」

「いや、なんつーか、いきなり手とか握って」

「……うれしかった、よ？」

テーブルの上で手を握ったり開いたりして、笑はそれを見ながら遠慮がちにも言ってくれた。そりゃあ、それは素直に嬉しいさ。けど――

「ん……いや、なんでもない」

水と共に言葉を飲み込み、メニューを開いた。

そういえばと、頼もうとしていたものを思い直す。そうだ、思えばもう両親はいない。定期的な稼ぎはない。だから、こうして気軽にファミレスに入ること自体、少しずつでも自重するべきだったのだ。

だめな兄貴だ。まったくいやになる。

「笑、何食べる？」

「……この、生クリーム、の、リゾット」

「だけで足りるか？」

「ん、じゅうぶん」

そういえば、いつも気づかないことばかりだ。たとえば毎食の量が極端に少ないこと――笑は昔からこんなに小食だったろうか？ 精神的なショックで食が細くなるというのはよくある話だし、彼女のそれは人一倍ナイーブでデリケートだ。

俺の視線が気になったのか、笑はそつとメニューを差し出す。

「……笑」

「ん？」

「お前は俺の手にあるものが見えないのか」

各テーブルにメニューは二つ。何も問題はない。

「……白紙、なのかな、って」

「……苦しくないか」

「……すこし」

メニューを引っ込め、笑はごまかすようにベルを押した。

どうでもいいんだけど、このファミレスによく置いてある店員を呼ぶベル、この形がなんとも……そう思うのは俺だけだろうか。いやだってこれ、この半球のてっぺんにぼっちという構造がなんというか、いやこれ以上は語るまい。

ふと見ると、笑が半目でこっちを見ていた。もともと眠そうな目をしているが、しかしそれをして半目とわかる辺りその感情は手に取るようにわかる。

「えっち」

まじですいません。

わだかまりはなく、されど共通点も少なかった。

笑とは同じ町内に住む従兄妹という関係にも関わらず数年会っていなかったから、正直なところそんなに話題があるわけでもなかった。性格が違えばセンスも違う、こう言うにははばかれるが、正反対の人間なのだ。笑が引っ込み思案である以上は俺が引っ張るしなくなるわけだが、しかし彼女の視線はそれを縛った。

遠慮がちで、気弱で、何かと俺の表情や機嫌をうかがおうとする。まるで自分の一挙動がすべて相手を怒らせるかのような態度だった。こうなってしまうば、人に嫌われる恐怖があるのはわかる。ただ、笑に遠慮などされるのは、すごく堪えるのだ。もっと不躰でもいいから、もっと彼女の声を聞いていたい。

そう思って、会話を質問形式にしてみました。

「身長は？」

「ひゃくろくじゅう、一」

「体重は？」

「よんじゅう……ご？」

「軽いなあ。服のサイズは？」

「えむ」

「ん……確かに笑はMっぽいな」

「それもドMだ。」

「得意科目は？」

「えいご」

「そっか……やっぱりおじさんの影響かな？」

「え、なんで？」

「いや静……」

「ん？」

会話がうまく流れすぎて、思わず口をついて出た単語——いやまずい、あわてて口を噤み、代わりの話題を探す。

まずい、ほんとにまずい。こればかりは笑に知られるわけにいかない。そう思うほど脂汗が流れて、けれど笑の目を見ればそれも落ち着いた。

大丈夫、大丈夫だ。笑は何も疑問には思っていない。

「んーっと、じゃあ、何か聞きたいことあるか？」

「ん……しんちょう」

「百七十五」

「たいじゅう」

「六十二」

「とくいなかもく」

「体育」

「……知識科目」

「……」

「……そう」

やめてその哀れみの目はやめて。

そりゃあそうさ、俺みたいな高校生に得意科目なんてあるわけがないじゃないか。体育はクラスでも活躍するほうだが、しかし知識科目となるとクラス内ではむしろ笑われる部類に入る。悔しいかなそれが現実だ。けど一つ言っておきたい。「信」のほうが下だ。

笑はしばらく俺のことを観察して、俺の頬をいじり、無反応なのを見てから口を開いた。

「兄さん、は、私のこと」

「おう」

「話してて、や、じゃない？」

「は？」

「や、じゃ、ない？」

質問の内容はああ理解した。だけどその意図がわからんな。話してていやじゃない、どころじゃなく、むしろ笑と話すのは大好きなんだが、どうしてそう思ったんだろう。いやもしかして笑のほうがいやだからそれに気づいてほしいとか……？

わからんが、まあ素直に返事をおこう。基本的に俺のことを嫌ってはいないはずだ。

「笑と話すのは好きだぞ」

「……そう」

答えを聞いてすぐ、笑は立ち上がってしまった。

俺もとくに食べ終わっていたからそれに続くけど、わが家の財布を握っているのは俺だから、会計をしなくちゃいけなかった。そんな俺を横目に見て、笑は店外へ。

「……なんだったんだろうなあ」

会計を終えると、店員の元気な声を背に店を出るのだった。

疲れていたのか、笑は帰るなり二階の自室へこもってしまった。それきり夕飯の時間になっても降りてこないから、俺は仕方なくと読んでいた雑誌を閉じ、彼女の自室へ向かうのだった。

階段から右手の一室がそれだ。客室だったものを申し訳程度に整理し、一応の部屋を作り上げたというわけだ。せいぜいたんすとベッド、机が一つずつとあったところだが、彼女に不満はないらしい。そもそも彼女の持つ服が少ないというのもあった。十五の女の子なら両手にあふれるほど持っているくらいイメージだったが、彼女のそれは下着も含めてダンボール一箱に収まってしまったのだ。

あまり使いたくはないが、金はある。両親の貯金と、そしてそれ以上の……まあ、賠償金とか生命保険とか、そういうものだ。

頭を振って、目の前の木板を叩く。軽い音の後に廊下に響く、小さく涼やかな声。

「はい」

「ああ笑、もう五時半なんだけど」

そう答えると、室内がにわかにあわただしくなった。がたりがたりと、なにやらあわてている様子だ。

そのうちにドアが開き、いつもどおりの眠気眼が現れる。

「ご、ごめんなさい、すぐ準備、する、から」

言いながら俺の横をすり抜け、階段へ向かう——良くは見えなかったが、思い返してみると「いつもどおり」じゃあなかったような気がした。少しだけ鎌首をもたげる不安をどうにか抑え、その背を追った。

夕飯はすぐにできた。豚肉とベーコン、白菜をコンソメスープで煮込んだ鍋メニュー。……夏なのに。

けれど食べてみるとなかなかどうして、不快にはならなかった。熱いには熱いが、吹き出る汗がべたつかないのが大きかった。暑い夏には辛いもの熱いものというのもあながち嘘ではないらしい。

スープをすすり、ため息を一つ。

「俺も料理を覚えたほうがいいな」

笑が小さな口を開いて固まるのを見、軽く提案してみた。

「ほら、今日みたいなことがあるとさ」

「だめ」

けれど、答えは簡潔なものだった。笑にしては珍しく頑固な様子で、きつぱりと言い切ったのだ。

これは珍しいと感心したが、あいにくとそれで納得できるほど子供じゃあなかった。

「家事全部、一人じゃきついだろ？」

「できるもの」

「だから、今日みたいなことがないとも限らんだろ」

「もうない」

「……笑」

「だいじょ、ぶ、だもん」

子供つっつーならこの子のほうがよっぽどだ。今の笑にはたぶん負担が大きすぎる。家事だけでなく、そもそも普通に生活することも本当なら難しいくらいのはずだ。それくらいシヨックな出来事だったし、彼女には耐性がない。もちろんそんな耐性俺にもないし、いらないけど、けれど彼女一人にそれを負担させるわけにはいかないのだ。

笑の黒瞳を見据え、もう一度名前を呼んだ。できる限り毅然と厳しく言ったつもりだったが、笑は臆することなく見返してきたのだ。珍しい、なんてもものじゃなかった。それが自分の義務とでも言いたいのだろうか……確かに、家事においては笑は頼りになる。

「お前、無理してる」

「してない」

「正直に言えよ。夜、何時間寝てる？」

「……」

正直に言え、と言え、そりゃあ笑は黙らざるを得ないと思うよ。正直に答えられない事情があるからだ。笑はあまり顔に出さないように努めているのかも知れないが、確かにその兆候はそこかしこに現れていたのだ。今の今まで気づくことのできなかった自分が情けなくはあるが、何事がある前に気づくことができたのは幸いだっ

た。俺だからと誇ってもいい。

だからこそ、認めることはできなかった。

「少し分担するだけだって。洗濯したりさ、一緒に干したり」

「……でも」

卑怯だとは思うが、切り札を出そう。

「俺は頼りにならないか？」

「そ、んなこと、ない。けど」

「少しでも頼りにしてくれてるなら、任せてくれないかな」

「……ずるいよ、そんなの」

そうすると笑はついにうつむいて、肩を震わせてしまった。

泣いてはいないようだが、まあこれでいい。

家族ってそういうものだろう？ いろいろなものをいろいろな形で共有して、支え合っていくものだろう？ 笑に何かあってからじゃ遅いんだ、それじゃ俺が立ち直れなくなる。

鍋から豚肉をすくって、笑の器にわけてやった。

「まあ、温まれ」

こくりとうなずき、笑は少しのスープをすすり、豚肉を頬張る。

「頼りにしてるんだよ、ほんとに。けどさ、できることはしてないと、俺も落ち着かないんだ」

笑に矜持があるのもわかる。家を守るみたいで、古い女性の観念があるのかもしれない。

うちに余裕はない。理解はしてるはずなのだ。

「俺だって無理するつもりはないさ。バイトもしなきゃいかんしな」

「……ばい？」

「ああ、そりゃあ、自分で稼がないとまずいからさ」

はたと反応した言葉は、バイト。

何かまずいことをと思ったが、見つからない。

「あの、私も」

「せんでいいよ。結局のところ、家事のほとんどは笑に任せるつもりだし」

「だって、ずるい、兄さん。できること、してない、と」

「できるのか？　ほとんど寝てないその身体で、周りに迷惑をかけずに」

「……」

わかってくれ。

笑はもう何もいえないようだった。説教なんてしたくはないが、今は無理をさせたらいけない時期だ。確かに気は紛れるが、身体がそれについていけないんじゃないじゃあ本末転倒だ。その無理がいつたたるとも限らない。

わかってくれよ。俺はお前まで失いたくないんだ。

「……ちゃんと、私、頼って、ね？」

「頼りにしてるさ。今はうん、誰よりも」

それで一応の納得はできたのか、笑はまた豚肉を頬張って咀嚼をした。

「にしても、大丈夫なのか？」

「だいじょぶ」

半ば尋問といった具合に問い詰めるが、笑はそう言い張った。けれど、大丈夫なはずがない。睡眠は人間にとってもっとも強い欲求であり、また相応に重要なものだ。それを多少なり欠いているのなら、何かしらの支障が出て当たり前だ。それが見ええないと言うのならそれが一番問題だ。

「夢、見るの」

「……ああ」

「お父さん、とお母、さんが……私の、横で」

うつむいて、肩を震わせて、笑はちゃんと話してくれた。

夢の中で、おじさんとおばさんが隣で笑っているそうだ。あんまり幸せな光景で、目が覚めるたびにそれが「ありえないもの」だと理解してしまう。もう絶対に味わえない夢なのだと悟ってしまう。それを繰り返しているうちに眠るのが怖くなって、いつしか本当に

眠れなくなってしまった、ということだ。

「お母さん、お父さん、に、会いたい」

「……今日さ、お前の部屋に行くよ」

「……うん」

「眠るまで、ずっといてやる」

「……うん」

「起きたら誰もいない、なんてこと、ないんだ。ちゃんと、俺がいるから」

「うん」

「俺じゃ、だめか？」

「ううん……そんなこと、ない」

幸せだって、形はさまざまだ。笑のようなものだったり、たとえば俺のために家事を負担してくれるというのも、その一部なのかもしれない。だとするなら、俺の幸せだって笑の知らない形がある。けれど二人同じだと確実にいえるのは、俺たちがいつか本当に家族になることなのだ。

だから笑、ちゃんと頼ってくれな。笑はしっかりとうなずいてくれた。

ベッドに横になり、タオルケットから顔だけを出し、笑はふと息をついた。

「ごめんね」

「何言つてんだ、早く寝ろ」

うなずいて、笑は目を閉じる。寝つきのほどは知れないが、まあ一時間だって付き合っただけやるつもりだ。

笑の髪をすいてやると、彼女はいたく喜んだ。それにその指どおり滑らかな感触には、俺だって感動すら覚えた。

「なんでも、わかるね」

「笑、結構顔にでるからな」

「そっ、なの？ 学校の人、何考えてる、か、わからないって」

「薄情だなあ。まあ、確かにわかりづらいかもしれんけど」

そういうものだとかき、笑は身体力を抜いた。その安心したような顔に、俺のほうむしろ安堵を覚える。

「兄さん、なら、何でもいえる、気がする」

「そういうやつになりたいなあ」

「うん……」

少しずつ口調が舌足らずになっていく。ちゃんと眠気があるらしい。

「学校でも話せるように、ちょっとずつでいいから、慣れていこうな」

「うん」

それを最後に、笑は寝息を立て始めた。

よかった、ちゃんと寝られた。笑の頭をそつと撫で、手を頬に移し、また撫でていく。吸い付くようで、けれどすべるように滑らかな肌。艶やかでありながら幼さも感じるきれいな肌。それと調和する流麗な髪。

もうしばらく眺めていよう。もうしばらくこの感触に浸っていよう。

この香りは、りんごに似てる。爽やかな甘みを感じる。

少しでも安らかに眠れるよう、俺は笑を撫で続けた。そうしていると、心なし笑の顔が安らかに脱力するような感覚を覚えていたからだ。

いい夢、見てるといいなあ。

第一章―二人の日常―3

夏空の下 ―第一章 二人の日常―

↓3rd episode↓

あんまり眠かったから昨夜はカーテンを閉める余裕もなく、倒れるように眠りについた。笑の就寝を確認してから、たぶん三十分くらいだろう、ずっと彼女の様子を見ていた。夢にうなされていなかを見ていたが、どうやらその心配はないようだった。その顔を見ているうちに眠くなって、といった具合だ。

そのせいか、今朝は窓から射し込む陽光に起こされた。目の眩むような心地で身体を起こしたが、不快感はなかった。強く鋭いその光は、ここにいる限りは決して毒ではないはずなのだ。身体を伸ばして一息つき、床に足を下ろす。これも陽光に温められたか、おろしてすぐに汗ばむほどの温度を感じた。なるほど、こういうのも悪くはない。

クローゼットからシャツとパンツを取り出し、ドアを開けてすぐに部屋を出た。この時間なら笑もいるだろう、早く降りて朝食をとりたい。階段を下りる間もその顔を浮かべ、洗面所に入って鏡を見るとさらに鮮明になった。

まずもって、俺と笑は似ていると言ってい。彼女を散々美人と称しておいてこう言うのとはばかられるが、二人は共に母親似だ。それでもって俺の母さんと笑の母さん、つまりおばさんは、よく驚

かれるが双子なのだ。別に何も珍しいことはないと思うが、とにかく母さんとおばさんは瓜二つで、その子供である俺と笑もそういうふうに生まれた、というわけだった。顔が小さいのはまあ別にどうでもいいとして、特徴はその目だ。どうしてか、眠くもないのに眠たげに見える。目自体もそうだし、まぶたがまず大きい上、二重の部分もだ。その上眉も少しばかり離れていてそれを助長した。まあ……俺のほうが多少釣り目かな、というくらいだ。

鏡から目を外し、洗顔料を使って適当に顔を洗う。スクラブだかなんだか知らんけど、このぶつぶつが割と好きだ。タオルで拭い、パジャマを脱ぎ捨ててから持ってきた服を着て、リビングへ。

しかし予想に反してそこはまだ仄暗かった。カーテンが閉まっていて熱もこもり、いつも出来上がっていた快適なリビングではなかった。こういうのを見ると気づく——笑はこんなふうにして、いつも気を遣ってくれていたのだ。まったく嫌になる。

エアコンをつけ、カーテンを開ける。とたん明度どころか彩度までも上昇したように思え、思わず目を細めた。キッチンを見やり、ため息を一つ。

「むう……しかし笑が寝坊とは珍しいな」

休日に寝坊も何もないが、まあ彼女にしてみればそれもそうだろう。

「朝飯……は、しょうがない、自分で作ろう」

ため息一つ、キッチンへ入る。

面倒とも言ってられない。家事を少しでも負担すると言ったのは俺だし、彼女の分も作ってやれば喜んでくれるかもしれない。彼女が「おいしい」と言ってくれれば、そりゃあ作った甲斐も生まれるというものだ。料理を作る喜びがあるとしたら、味よりむしろそっちのほうが大きいように思う。

何作ろうかと迷う間もなく、簡単なものしか作れない自分に気づく。……情けないがまあ仕方ない、いずれ笑に教わろう。そう結論付け、卵とスープの素をそれぞれ冷蔵庫と戸棚から取り出した。目

玉焼きにコーンスープ、あとは野菜でもちぎっておけばいい。最後にトーストを焼いて、それで完成だ。

一人黙々と作業を進め、エアコンが室内を適温に持ってきたくらいにちょうど出来上がった。むう、……まあ、笑を起こして意見を仰ぐことにしよう。

笑の部屋の前にたたずむ俺、十六歳の純情少年である。

昨日はあまり意識してなかったけど、考えてみれば女の子の部屋に入ったのは初めてだ。もちろん子供のころを除いての話だけど、やはり意識しだすと止まらない。この部屋の中で笑が何をしているか——いや、あんまりやましいことはしてなさそうだ。がつくりだ。身勝手な失望を抱えたままノックを一つ、すぐにドアを開けた。

「……」

そして、身体が硬直した。「凍った」と言っても別にいい。それどころじゃない。

同じく硬直し視線まで俺に固定した笑。事態についていけないのだろう、そりゃあ俺だって同じだ。彼女の姿を見ればわかる。胸と股間付近に白の布地、それ以外は肌色だ。要するに下着姿だった。

しかし肌色というにもはばかれるほどの白だ。美白、というよりはずっと病的で、見ていると不安になる。けれどそれは血色の透き通りそうなほどに透明感のある……ううむとうなっている場合じゃないんだよ、あいにくな。

「よ、よう」と片手をあげて爽やかに挨拶だ。何か間違えた気がするがまあいい。

「朝飯、な、できたんだよ。お前、今日遅いからさ」

そもそもさっきのはノックの要をなしていなかった。了解を得てから入室すべきだったのだ。つまりすべて俺の過失——言い逃れできない、が、する。

「リビングに誰もいなくてさー、笑のやつはまだ寝てるんだろうな

とか思つて、な、朝飯作つて起こしに来たんだ。返事を待たなかった非礼はわびよう、だからここは平和的解決——」と言葉を続けようとした……が、

「いい、から早く、閉めて……！」

「ちょ、待て待て、笑落ち着け！……うおおおっ！」

風を切る音。慌しい足音。ドアの閉まる音。そしてプラスチックの破砕音。

間一髪で退室に成功した俺の背後で、おそらく笑の目覚まし時計が砕け散った。……あつぶねえことするな。

「勝負の世界はいつだって紙一重なのだ……」

眩き瞠目。脳裏に浮かぶ白い影。

見てしまった。従妹とはいえ、妹のようなものとはいえ、年頃の、思春期の娘さんの下着姿だ。部屋に入っただのが初めてなら、もちろんそんな姿を見たのも初めてだ。子供のころ一緒に風呂に入っただのを抜きにすればだが、そんなこたあどうでもい……どうでもよくはないが、今はおいておくのだ。

病的に白く細い。しかし均整のとれた身体だった。引き締まった腰、小ぶりの尻、自己主張の過ぎない胸、そして長く細枝のようなしなやかな脚。

「か、かんぺきだった——！」

「なに、言ってる、の」

背後で開いたドアから沈んだ声が響いた。沈んだというより、腹の底から響くような暗い声、といったほうがいいのか……振り返ると、半目の笑。

「朝ご飯、できたん、でしょ」

短く眩き俺の横を通り過ぎる。表情の出にくい彼女が傍目にわかるほど怒つてらっしゃる。何か珍しいものを見た心地だが、しかしそれが怒りとなれば歓迎はされない。

何しろ覗きみたいなもんだ。全裸じゃなかっただけ、そりゃあ救われてるでも思つてなきややつてられん。

「行こ」

それでも気にかけてくれる笑。

あーあ、やっぱり怒らせちゃったみたいだ。

「ごめんなさい」

テーブルに手をつき、ついでに額もこすりつけながら申し上げてみた。われながら見事な平身低頭ぶりに頭が上がらない。いやあげるつもりもないけど。

どんな対応も正解でないのなら、ここは潔く平謝りだ。どこが潔いのかは訊くな。

「いや」

むしろ笑の即答のほうがずっと潔い。清々しいほどだ。

「そこをなんとか」

「や」一言どころか一文字だ。

むむと笑を見つめるが、彼女は上目遣いに俺をにらむばかり。生来の垂れ目のせいかまったく怖くは見えないが、しかし彼女が怒るという事実がまさしく恐ろしい。仕方ない——ここは俺らしく盛大におどけてみようじゃないか。

「え・み・ちゃあーん」

「嫌」

許されるところか硬化したな、間違いない。

こうなるとどこでも動かない。笑は意外に頑固だと経験が語つてから、今度こそは仕方がない、最後の手段だ。

以前これを友人に使ったら、「エスカレーターを逆さ乗り」という罰ゲームまがいのことをやらされた。もちろん人のいないときに限りだがあくまで迷惑行為の上、乗り切った後には疲れが待っている。どうしてか距離を置いて歩く友人一同を恨めしそうににらみつつ息を整える俺を、客がどんな目で見ていたか——思い出したくない。

だが笑のためにそれを使うなら、笑の許しを得るためなら俺は――

――！

「笑」

返事はないが、
「なんでもする。笑の言うことを何でも聞こう。だからお願い、許してください」

言ってやった。

何でもする――あまりみだりに使うべき言葉じゃない。特に俺たちの場合、生半な冗談が通じる状況でもないのだ。けれど冗談じゃない、俺は本気でそう思う。というよりは、友人にしたような冗談でない範囲で、俺は本当に笑のためならなんだってするつもりだ。彼女が食えと言ふのなら、くず鉄だって食ってやる。

思いながら笑を見据えた。

「……なんでも？」

「ああ、なんでも」

すると笑は視線を緩め、頬を赤らめてみせた。
何をさせるつもりか知らんが、笑ならそう無茶は言わないだろう。そついう打算もあったけど、彼女が喜ぶならそれでいい。

テーブルの上に手を置くと、笑はその手を取って小さく握った。

「あの、今夜」

やがておずおずと話しはじめた笑のその声に耳を傾ける。小さくかすれるような声だが、ああ確かに心地いい。

「今夜も、今夜、から、しばらく……寝かしつけ、るの、してほしい」

染めた頬を隠すようにうつむきながらの、恥ずかしげな上目遣い。相当勇気を出したか、少しだけ涙目になった彼女の瞳が揺れている。これは、なんというか、破壊力抜群、だ。

「だめ？」

「い、いやいや、それくらいならお安い御用だぞ。お兄ちゃん張り切って寝かしつけてやるう」

「……はりきらなく、て、いいけど」

至極もつともな突っ込みをしても、やはり彼女は面映そうにうつむくばかり。停滞した朝の一幕を切るように、俺はがたりと立ち上がった。

というより、実は俺も恥ずかしかった。

「あ、朝飯食うぞ、ほら」

「う、うん。今つくる」

しかし、ほんとにかわいいな、わが従妹君は。

朝食を終えると部屋に戻り、あまり認めたくないが、その……机に向かってノートを広げていた。問題集もついでにだ。

あまり認めたくないが、夏休みを四日残した今日になって、課題が半分残っている。高二ともなると結構な量で、その上小論文なんて厄介なものまである始末だ。現代文は記憶を問うものじゃないから別に問題はないが、いやしかし面倒だ。

葬儀やらで忙しかったがそれは八月上旬から中旬のことであつたし、そもそもそれを言い訳に使いたくはない。それで生活に支障を来たしてたら、遺して逝った両親に申し訳が立たないじゃないか。いつもなら平気でやり残して、新学期が始まってから言い訳と一緒に提出してたはずなのだ。まったく嫌になる、こんなことでまじめになりたくはなかったのに。

ぐちぐち言つても始まらない、さつさと片付けよう――

小論文の基本は、端的あるいは簡潔な文体によつて、結論から始める。次に仮説を立て、具体例を挙げて検証し、結論を出すくらいのものだ。うる覚えだったけどそんな感じだったよな？ 確か現代文の先生がそう言つてたんだ、うる覚えだけど。その基本を念頭に置いて、辞書をひき、そこからほとんど引用しました、すいません。何しろ俺というのは、成績において低空飛行をこえて地面にもぐりこむ勢いだ。宿題をやるうつつで気になったところで、急に頭がよくなるわけもない。

ため息一つ、数学の問題集に手をつけ、三分で挫折した。

「……なんだこの象形文字は」

意味がわからない。Σってなんだ、何かびつくりした時のリアクションか。

そもそもテキストはすべて、そうすべて学校の机の中だからな……
…なんというか、ようやく自分のためつぶりを自覚した。

自虐的に笑っていると、控えめにノックが響いた。

「ああ？」

「あの、おひるごはん」

少し驚きながら時間を見ると、なんともう正午過ぎではないか。
こんなに勉強に集中していた自分に驚きを隠せない。

ともあれ笑を待たせるのはいけない、急いで立ち上がりドアを開けた。律儀に待っていた笑の背を押し、階段を下りた。

「ところで笑よ」

チャーハンの載ったレンゲをくわえ、笑は首を傾げる。ゆつくりと咀嚼をしながら、どうやらちゃんと聴いてくれているらしい。

「お前、学力のほどはどうだ」

「……さあ」

チャーハンを飲み込み、その高く澄んだ声で、はつきりとしな
返答をしてくれた。なんだか馬鹿にされてる気分だ。

編入試験の結果から見るとかなりのものだが、果たしてそれがど
うかは俺には知れないのだ。本人の口から確認せねば。

「学園での成績は？」

「うん、とね……いつもは、大体、学年で十、番目、くらいかな」

「……おおう」

思わずもれた感嘆にまたも首を傾げる笑。

学園はいわゆる進学校に数えられる、県内でも有数の学力を誇っ
ている。部活のほうはてんで話にならないが、勉強に関しては全国
区といっても差し支えないほどだ。それをして学年十位となると……
…そりゃあもう、ええ？ はつきり言って、ミソガク三位よりもよ

つぽど社会的な影響は大きい。

「でも、なんで？」

「いや、課題がわかんなくて」

「……まだ、終わってない、んだ」

「何？ そういう笑は？」

「私は、転校する、から」というもつともな呟きだが、続いた言葉に驚かされた。

「七月中に、終わらせない？ ふつつ」

…… という教育をしたらそうなるのだろう。もしかしたら学園だと全員そういうふうなんだろうか？ いや、不真面目を肯定するつもりはないが、心底ミソガクに所属していてよかったと思う。もちろんまじめな生徒も多いが、あそこは馬鹿の巣窟だ。

「テキスト類が全部学校でな」

「だいじょぶ？」

「お前が俺の何を心配してるのかは知らんが、すいません教えてください」

馬鹿にされても、妹に心配されても、それでも背に腹は代えられないのだ！ かわいそうな目でこつちを見るな！

「でも、二年生のは、わかるか、どうか」

「大丈夫だ」

「そう？」

「ああ、少なくとも俺よりはわかるはず」

「……」 沈黙と視線が痛い。

食後に休憩を挟み、二人で俺の部屋に入るとすぐにエアコンをつけた。冷風は心地いいが、このいかにも人工物といった風情はなんだろう？ 風は空気の流れだから、そう大差はないと思うんだけどなあ…… どうにもわからない。

首を傾げる俺を、笑はテーブルの前に促した。

「それで、どこ？」

問題集を広げ、笑は自分のシャーペンを握る。かわいいねずみのキャラクターがトップに飾られた、いかにも女の子らしいかわいい一品だった。いやだ笑ちゃん、女の子らしいところあるじゃない。

「どこ？」

怒らないでくださいあ。

「どこがわからないのかわからない」

「……問題、どれが解けない？」

「こことここ、それとここ」

「……そこは」と説明を始めようとする笑を、手で押しとどめた。

「以外はわからんだ」ほんとに、だいじょぶ？」

だからお前はほんとに何を心配してるんだよ。割と本気で傷つくからやめてくれ。

勉強できない自分は承知の上だが、改めて人に指摘されると結構堪える。俺ってないーぶ。

そうして、笑主導の勉強会が始まる。そうさ、こと勉強に関して馬鹿に人権など存在し得ないのさ。

「いやさすがだ、まさか英語までお世話になるとは」

言っちゃなんだが、ほとんど笑一人でやったようなものだ。兄の威厳……そんなものは鯨の墓場に捨ててきた。初めからなかったしな。

……泣いていいかな。

「ばか、だったの」

「痛い！ 主に心が痛い！」

とてもストレートな罵倒に心が痛む。心臓も痛い。

けれど彼女の指導はとても優秀だった。懇切丁寧な説明にくわえ、教科書に沿ってのわかりやすい解き方の解説、それから独自に考えたやり方など、そりゃあもう彼女自身の優秀が痛々しいほどに伝わってきた。

俺ら、これでも親族なんだよな。血、つながってるんだよな。し

かも、二人とも母親似、なんだよな。……なんだよな？

「もつとこう、オブラートに包んで言えないのか。悪口がとても心に響くんだ」

「むり」

さいですか。

立ち上がり、笑はため息をつく。それは何に対してのため息だ？
疲れたよな？

「夕食、つくる」

「おお、いつもすまないねえ」

「それは言わない、約束、ですよ」

ああ、お約束もわかってるじゃないか。

妙な感心を覚えながら、改めて問題集の束を見つめる。そして思うのは、その妙な感心を遥かに上回る感動だ。

「まさか今日だけで全部終わるとは……」

休みを返上でやる覚悟だったのに、そう、一日で終わることができた。

できた従妹だ。俺よりずっと、親孝行もしていたろう。

感謝すべきは、大切な家族——少し、笑みがこぼれた。

夕食を終えると笑がうつらと舟をこぎだしたので、頬を叩いて軽く目を覚ましてやった。

「寝るか？　なら二階で、ほら」

「うん……おふろ」

「一緒に入るか？」

すねをけられたが問題ない。

「じゃあ入って来い。俺、ここで待ってるから、上がったら声かける」

「うん。ありがとね」

「何言ってたんだ。遠慮すんな、お礼言われるようなことじゃない」
笑が少し笑ったような気がしたが、それを悟る前に彼女は背を向

けリビングから出て行った。

……心から、そう満面の笑みを浮かべるようになるだろうか？
見たいんだ、それが。彼女がそうしたらどれだけ美しいだろう、どれだけ可憐だろう。想像するたびに胸が高鳴る。

従妹……妹。ああ、かわいい。大好きだ。

そうしているうちに笑はパジャマ姿でリビングに戻り、俺はその手をとって二階へ上がった。彼女の部屋に入ると、笑をベッドに寝かせ、その髪をすいた。安らかな顔でそれを受け入れ、笑はゆっくりと目を閉じる。

「おやすみ、なさい」

「ああ、ゆっくりな」

どこを撫でていると笑が安心するか、昨日学習した。
けれどちょっとした悪戯心だ、

「どこ撫でてほしい？」

「ほっぺ」

意地悪にもならなかった。

彼女は意外にも欲望に忠実だ。印象だけではあるが、表情ににくいだけで感受性自体はとても豊富だった。それと、うぬぼれかも知れないが、俺に対しては素直になってくれる気がしたのだ。

頬を撫で、次に「髪を」と言う笑に従い、それを撫でた。

「髪、ほんときれいだよな」

「お母さんが、好き、だから」

だったから、ではないのだ。

過去形にしなかったのは何気なくなのだろうか。髪への執着、母への執着——わからないでもないが、少し悲しかった。

「あったかい」

呟き、数秒後に笑は寝息を立て始めた。安らかな顔。安堵。安穩、
安寧……それを与えられたらと思う。

残った家族。俺はつまるところそれなのだ。彼女の、現在の唯一の支えだという自覚がある。

けれども今は、今だけはこの安寧の表情を見ていよう。それだけでいい。
そうして、眠りに落ちた。

第一章―二人の日常―4

夏空の下 ―第一章 二人の日常―4

↓ 4 t h e p i s o d e ↓

まどろむ意識の中に音が響く。いまいち判然としないが、どこか焦燥とした、けれど高く澄み渡るきれいな音だ。それは少しずつ俺の傍に寄ってきて、俺を呼ぶ。ああ――大好きな声だ。俺のかわいいあの子の声だ。それがわかると一度に目が覚めた。

「……にい、さん」

「笑……」

呼び合う二人。笑は俺の頭上で上半身だけを起こし、呆然とした顔で俺の肩に触れていた。

「どうして、ここに？」

その問いにはたと首を傾げ、辺りを見渡してみた。そういえばそうだ、どうして俺の寝てる横に笑がいるんだ。そういう不自然に気づいてみると理解は早かった。ここ、笑の部屋だ。一週間以上は使っているだろうか、もうその香りも笑のものに近づいてきた。

「に、におっちゃ、だめ」

「うつむ、甘やかなりんこの香り」

「だ、めってば」

必死になつて俺の鼻を押さえようとする笑。顔が真っ赤だ。……
りんご？

「で、どうして？」

ふむ……あごに手を当ててしばし熟考してみた。

思い出すのは昨夜のこと。笑を寝かしつけたあとのことだ。お風呂に入れてから彼女を部屋へ連れ、その頬や髪、ついでお腹なんかを撫でながら寝かせ、その後も続けながら寝顔を眺めた。あれはいいものだった。

緩んだ俺の顔を、笑が叩く。

いやいや雑念に流されるな。大事なものはその後だ。笑がうなされていないことを確認して、俺は部屋に戻ろうと腰を上げ——そうだ。
「なんか疲れたんで、そのままベッドに顔を伏せて」

「ねたの？」

「寝た。笑の香りがとても芳しくて、もう熟睡ですよ」

「に、におわない、でっ」

鼻から入ってくる笑の香りがとても素敵だ。

冗談めかしているけど、本当に素敵なことだと思う。香りというのは人それぞれに結構違うもので、この場は以前まで誰も使っていない客室だったのだ。それがこうして笑の香りに染まっているということは、それだけ彼女がここに馴染んでいる……そういうことにならないかな。

軽く笑った俺を怪訝そうににらみ、笑は手をひざ上におろした。

そうして黙りこくってしまったからさすがに悪びれて、俺は立ち上がって背を向ける。

「悪い。昨日入ってないし、シャワー浴びてくるわ」

返事はなし。ため息一つ、部屋を後にした。

一階に降り風呂場から出たところで笑と出くわした。俺の顔を見るなり頬を染め、短く「シャワー」とだけ呟き、俺が今入っていた風呂場へと消えた。ドアがぴしゃりとしまると、とたんにため息が

こぼれた。

何とかあの鉄面皮を壊せないかと思うが、そう深くは踏み込んでいけないのが実情だ。俺というのは彼女にとつての「一緒にいてくれる人」であり、恋人ではない。恋人だから深くまで、なんてことを言うつもりはないが、それでも彼女の中にこの土足で乗り込もうとは思えないのだ。

笑は「男が苦手」と言つてたが、たぶん嘘だ。いや、半分は本当かな？ 「他人が苦手」と言えば全部が正解になろう。

衣擦れの音に一度だけ耳を澄ませ、

「朝飯は？ 俺が作るか？」

「待つて」

短く答えが返ってきた。こうして怒つていても、きちんと対応をしてくれる。

あるいは照れているのだろうか。小さな顔を真っ赤に染めて、かわいく照れて見せているのかもしれない。……あの無表情だと、少し違和感があるけどさ。

これだけの短時間でよくもため息ばかり出るものだ、自分に少しばかり感心しながらソファに身を沈めると、わずかに仰ぎながら目を閉じた。とたん広がる暗闇に不安を覚えてから、またすぐに目を開ける。

あの事故の瞬間——あの時両親の目の前にはどんな世界が広がっていたんだろう。あの暗闇を永遠にさまよふのだろうか。耐え難い苦痛ばかりが待つている世界なのだろうか。恨み辛みをその身のうちに抱えているのだろうか。せめて優しい両親だ、安らかな眠りであつてほしい。

そうということが頭をあつという間に掠め去り、またため息だ。嫌になる。

笑といると視界は明るい、思考は温い。独りになると少し違った。嫌な想像がすぐに鎌首をもたげる。思考が冷えてくる。こういうことがいつもあるわけでもないが、これも一種の悪夢と言えるだろう。

か。

リビングの白色蛍光灯がちらちらと太陽に混ざり部屋を染める。まだカーテンも開けてないなと思うと、すぐにそれが開いた。

「……笑？」

「……ん」

返事があつた。どうやらずいぶん長い間ぼうつとしていたようだ。

「悪い、朝飯は」

「まだ。すぐ作る、ね」

笑は白いカーテンをベールのようにしてから、すぐに離してキッチンへ向かった。

すぐに聞こえてくる生活音。冷蔵庫を開ける音と戸棚を漁る音、それから包丁をまな板に叩く音や蛇口をひねる音——いやに安心する。

「ねえ、兄さん」

そうして浸っている中に新たな音。涼やかな音だ。

「私、兄さんに、頼って、ばかり」

思わず振り返ったが、シンクへ向かう笑の表情はこちらからではうかがえなかった。

「兄さん、一緒に、寝よう、か？」

「は？」

「そうしたら、一人じゃ、ない」

あまりに唐突で驚いたが、それ以上に笑みがこぼれた。何を冗談みたいなことを言ってるんだかと呆れたし、あれだけで顔を真っ赤にしたお前が何をとも思う。けれどその声を茶化す気にもなれず、俺は「悪くないなあ」とだけ言っておいた。

「恥ずかしかった、けど、すごく安心、したの」

笑がこちらを見る。相変わらず頬は淡く色づいているが、けれどさっきのように羞恥だけではないような気がした。都合のいい解釈だろうか？

「起きたら、すぐに兄さん、の、顔が見えた。すごく、安心した、顔で、寝息を立てて、るの。かわいいなあ、って、最初は」

そのうちに事実を飲み込むとたんに羞恥が襲ったと言う。

従兄とはいえ男を一晚部屋に泊めたのだ、そりゃあ笑がシャイでなくとも照れはするだろう。俺だって、冗談めかしてはいたが恥ずかしかったさ。けれど目覚める間際に聞こえたあの声、そして開いた視界に映る笑の顔。最高の目覚めだった。

けれど違うのだ。求めるものと違う。

「いや、笑が本心からそうしたいって言うなら俺も……まあやぶさかではないよ」

「うん……」

「けど、少しだって苦痛に思うなら、俺はそれをしたくはない」

「うん、……ごめん、なさい」

苦痛とは違うと言うが、まあ羞恥だって苦痛の一種だと思えばそのとおりだ。いずれ慣れるとはいえ、そのときに笑が新しい相手を見つけていたらどうする？ 俺はそれから離れることができるだろうか。

言い訳がましく笑に責任を押し付けたみたいだった。「笑が苦痛に思うなら」なんてきれいごとを言いながら、俺は結局その結末が怖いだけだ。

「あさご、はん、すぐでき、るから」

いつもならできる限り意味の通じる単語ごとに区切ってしゃべる笑が、こうして区切るところを間違える。

そういうことがやけに気になって、またため息がもれた。

朝食を終えると、いつもどおりにソファで一服だ。笑がうつらうつらと舟をこぐのを眺めるのもよし、雑誌を読みふけるのもよし、こういう家での時間も夏休みの醍醐味だろうか。笑がいてくれて本当によかったと思う。

頭をこくりと落としたまた持ち直す、あの寝まいとする動作がとて

も面白い。そして目を覚ましたときにこちらを見るその表情ときたら、ぞくぞくするほどだ。

「……ばか」

馬鹿呼ばわりですよ奥さん。

けれどまだ眠いようで、笑はまた頭を振り始める。いい加減不憫なので二階に行かせようと起こすが、彼女は言うことを聞かなかった。

「一緒に、いい」

「そんなこと言うとお前、俺すげえときめくぞ」

「……いつしょ」

眠気眼と舌足らずの言葉遣いが、笑の感情を素直に伝えてくれる。要するに茶化すようなことでなく、ただ一人が不安というだけだ。まだ一人で眠るのは難しいらしい。

「じゃあ部屋に行ってやるから。何でも俺に合わせりゃいいってもんじゃないぞ」

「でも」という言葉をさえぎり、すぐに笑の手を取った。

笑にはたぶん俺が合っているのだ。彼女の奥手にむしろ好意を感じ、それを引っ張っていける男——俺以外にもたくさんいるだろうけど、今のところはそれでいい。

彼女は人の都合に合わせて生きてきた。俺は少ばかり反抗的だったけれど、うちも牧野の家も両親は共に忙しく、夜だろうと家には一人でいることが多かった。そういうこともあって、笑は多分に家族愛に飢えていると思うのだ。まあ、俺と照らし合わせただけの憶測ではあるけどさ。

笑をベッドに寝かせ、タオルケットをかぶせる。目を閉じ嘆息する笑は、まだ睡眠が足りていないのだろう。

「手のかかる妹だな」

「うん……ごめん、なさい」

「いや、悪くはないよ」

それにしても、笑の眠気はどの程度だろう。本来「寝溜め」なん

てものはできないし、眠気だつて同様だ。けれど彼女はおそらくあの日から数えるほどしか寝ていないはずだ。身体は限界に達しているはず。

寝なければだめだ。笑の髪をすいてやると、彼女は心地よさそうにうめいた。猫か何かのようだ。

「いい香りがする。うちのシャンプーって、牧野の家と同じだったかな」

「うん……たぶん。お母さん、が、すき、だった」

そのために、もう何年も髪を切らずに手入れを続けているという。ボリウムだけはおばさんが調節してくれていたようで、だからこそその流麗なロングヘアーだ。

「うちの母さんも、そうだったよ」

「……うん」

「そっくりだったもんな、あの二人」

「うん。すごく、似てた」

そうすると、重苦しい沈黙が部屋にのたりと横たわる。

ごまかすように笑ってみるが、やはり笑にそれを作らせるのは無理があるようだった。寝ておけとまたごまかし、部屋を出ようと立ち上がる俺の腕を、今度は笑が引っ張った。

「兄さんも、今朝、みたいに」

「……いいのか？」

「へんなこと、しない、でしょ」

「まあ……妹相手じゃなあ」

「じゃあ、寝よ」

眠気にさいなまれているときの笑はまるで子供だ。わがままを通し、頑固になる。

それがかわいくもある俺がいけないのだろうか。甘すぎるのだろうかと思案したが、結局その誘惑には俺自身が抗いきれず、仕方なくと彼女の手を握り、ベッドのふちに腰掛けるのだった。

夢を見た。ひどく白んだ夢だった。

ずっと走っている。それを必死に追いかける少女の夢だ。

——待つて。

寂しそうで、悲しそうではあるが、けれど泣くまいとこらえている震えた声だ。

——おいてかないで。

何度も何度も追いつがる少女を、俺は見ないように走り続けた。

——ひとりはいや。

その声に振り返ると、その先に安堵の笑顔。探していた宝物を見つけたような、輝かしい笑顔。けれどどうせ——振り切るように、また走り出す。

記憶をなす感情があふれて白み、視界を覆っていく。霧中をさまよう感覚のままだ走り続ける。そうしているうちに息は切れ、意識は薄らぎ、やがて少女が消えていく。

視界が途切れると、その夢は黒く染まった。

「おはよ」

別の視界が開けると、そこに穏やかな笑の顔があった。その声も同様に柔和だ。

「……笑？」

起きてからしばらく経つらしい、はつきりとうなずいてみせる。

上半身を起こした笑は、その眠たげな瞳に俺を映してたたずんでいた。

「夢、見てた？」

「ああ……よく覚えてないけど」

「安心した、顔」

「……あんまりいい夢でもなかった気がするけど」

胸を圧すこれは何だろう。悲哀、悔恨、憎悪、寂寞、哀愁、どれ

も合っているようで、どれも違う。やはりよくわからない。

「ごはん、食べれる？」

「もう昼か。ああ、食べるよ」

「じゃあ、私、下行くね」

俺がうなずくのを確認してから、笑はベッドから下りて部屋を後にした。

ため息一つ眼を閉じる。

暗闇が埋めるこの世界——けれど現実だ。夢は夢、現実とは一切相容れぬものなのだろうか。夢は記憶や暗示に大きく左右されると聞いたことがある。だから、この感情もいつかどこかで味わったことがあるのかもしれない。

覚えは——ないといえはない。が、あれがそうだとしたら……予感めいたものはあった。父親が亡くなったのだ、それを夢見てもおかしくはない。

どうしているだろう、あの子は。ただ一度の不貞が招いたかけがえのない命。

まだ知らないほうがいい。俺にどうこうできる問題じゃない。口を閉ざし、俺も笑の後に続いた。

昼食を終えると笑に誘われ、商店街へ出た。

鉄筋コンクリート二階建て、御空校生徒御用達の学生生活用品店「For the Sky」を眼前に控え、笑は呟いた。

「変わったなまえ」

だろうな。こういった店の名前は結構地味な場合が多い。確か南側の学園生が使うところも当たり障りのない古びた名前だった覚えがある。

けれどもまあ、ちゃんと理由があるのだ。

「笑、これは『御空の生徒に』って意味だ」

「……ああ」

納得はできたらしく、笑は足早に店内へ。

それに続き入ると、空調に冷やされた空気が体内への侵入を試みる。けれどもすぐには入ってこれず、このまましばらくは汗が止みそうになかった。入り口付近で物珍しそうに辺りを見回す笑の肩を叩き、さっさと店員に声をかけるよう指示をし、俺も店内を見回ることにした。

とはいえミソガク生の俺には見慣れたものばかりで、一回りもすれば見飽きてしまう。今回笑が着ることになるミソガク夏服を眼前に、一つうなつてみた。これを笑が着るのか——とはいっても何の変哲もない半袖カッターシャツだが、笑がこういうシンプルな服を着るとやたらと映える。ちよつと楽しみだと笑う。それから黒のスカートだが、校則上一応膝上は五センチまでと決まっているらしい。そんなものを守る女子生徒のほうがちよつとめずらしくはあるが、律なんかは守っているし、笑もそういうことは遵守しそうな性格だ。

どうかと思っていると肩をつつかれ、振り向くとそれを身にまとった笑が横に立っていた。

「ど、どう、かな？」

予想通り校則を遵守した膝上五センチのスカートに、ちゃんとシヤツを入れて着ている。素晴らしい模範生だ。

けれどほんとに映えるな、この子。やはりこういう服装は長身痩躯の女の子が着てこそだと俺は思う……というかそういう子が好みというだけだ。何よりその制服の白地は彼女の清楚なイメージに合致し、そして黒い髪がそれによく映えた。空に浮かぶ太陽、あるいはその逆。確かな存在感を示していた。

見とれる俺を怪訝に見る笑は、どうやら返事を期待しているようだ。ならば答えてやろうじゃないか、男として兄として。

「似合うぞ。すごくかわいいな」

「そ……っ、そうじゃ、なくて、大きさとか」

「大丈夫だろ。何しろ笑はスタイルがいいからな」

「や、そんな、こんなとこ、で」

ほめると照れる笑ちゃん。拒否反応にも近いそれは、おそらく両

親の教育方針の賜物だろう。彼らはあまり面と向かつては褒めない人だった。

まあ俺は別だ。褒めるだけ褒める。

「確認済みだぞ、笑のスタイル」

半ばセクハラといった発言に、笑は思い切りにらみながら口を押さえてきた。

うつむ、かわいいものだが、なぜ俺は終わったことを蒸し返そうとするのだろう。馬鹿なのか？ ……馬鹿だけどさ。

忘れてという言葉に仕方なくうなずき、一応の弁解を試みる。

「ほめてるんだが」

「へんたい」

「ぐっ……相変わらず内角高めをえぐりこむような悪口」

「お金、払ってくる。待ってて」

短く言い残し、笑は再び店の奥へと戻っていく。

それをぼつねんと見送り、俺も一言だけ残しておくことにした。

「……やりすぎた」

今更だった。

第一章―二人の日常―5

夏空の下 ―第一章 二人の日常―

↓ 5 t h e p i s o d e ↓

「よし、本屋行ってくる」

朝食をつつがなく終えて数時間、現在は午前十一時だ。ソファでくつろいでいるところ突然思い立ち、笑に向けて提案してみた次第である。いい加減ぼうつとするのにも限界を感じ、そろそろバイトを探してみようと思ったのだ。その第一歩ともいえる情報誌購入の旨を、唐突かつ端的に切り出してみたといった具合だ。

「……いつて、らっしやい」

驚くでもなく戸惑うでもなく、笑は言う。
いつてきます。

出かけてしばらく、はたと気がついた。

あえて一キロ以上も離れた本屋まで行かずとも、バイト情報誌くらい近場のコンビニに置いてあるはずだ。今日日のコンビニは無駄にコンビニエンスだからな、エロ本まで手に入る時代だ。それはそれでコンビニとしていかがると思うが、まあそんなものに興味はない。エロ本などなくとも――いやいやと首を振り、進路を変更。

それにしても、もうすぐ九月になろうというのにこの炎天、残暑

が厳しくていやになる。蝉はもう鳴いていないし、虫が鳴き始めてはいるが、果たしてそれだけで秋が来たと判断はできなかった。なにしろ今朝のニュースで美人のアナウンサーが「三十度を超える」と言っていたくらいだし、笑の額にも汗が浮かんでいた。彼女は表情の割に気候の変化に弱いらしい。

黒いアスファルトも、実は太陽熱に焦がされたのかと思う。照りかえる光もあり、その上熱がこもりやすい。スニーカーのゴムを通してもなお足が熱いとわかるほどだ。

まったくいやになる。あの日から何も変わっちゃいない。

そうこう考えているうちに町並みは繁華街に近づき、やがてコンビニが見えてくる。考え事を中断、いや振り切るように足を速め、さっさと自動ドアをくぐった。

「いらっしやいませー」

いかにもやる気のなさそうな無表情と声色で、あまり歓迎された気にはなれないが、とりあえず入店を迎えられた。ずいぶんと小柄な女の子が一人でレジ番だ。なにやら視線を感じるが――まあどうでもいい。

さて情報誌と視線をめぐらせる。すぐに見つかった。入り口から右側、それはもうたくさんの雑誌、単行本や文庫、その奥に……まあ見なかったことにしておこう。あれっでどうして道路側に置いてあるんだろう？ 宣伝になるのかな？ ……まあなかったことにしておこう。

奥を一瞥し、情報誌を手を取った。この時期なのにどうしてか「夏休み短期バイト特集」とやらが目立つのを見るに、やはり大学生の夏休みが長いというのは本当らしいと推測。聞いたところによると九月半ばまで続くところもあるらしく、大学生のくせに勉強サボりすぎだと思ふ次第である。う、うらやましくなんてないんだからねっ……というか別にうらやましくないし、その分だと夏休みボケもひどそうでいやだ。

うつむとうなってページをめくる。初めて見るものだけに勝手が

わからない。

いくつか雑誌をとつかえひっかえ、一ついいものを見つけたのでそれにした。「高校生・未経験者歓迎」と特集が組まれたものだ。それとオレンジジュースのペットボトルを手に取り、さっさとレジへ向かった。

小柄な女の子。空色のシャツは制服として、裾が外に跳ねた黒い髪、それからきつく大きな目、ううん……なんというか、中学生じゃないかな、これは。

「……お客様」

「ああ、ごめん」

促され商品をカウンターへ。

「安物ばかり」

「……はい？」

「いえ、何でも」

なにやら馬鹿にされた気がするが、気がするだけなので気にしないことにしよう。なにやら見覚えのある子だし、そもそも何を言っただかもわからない。

「630円です」

けれどもまあ、なんというか、動作がいちいち様になつてるといつか——よくわからないが、品があるような気がする。笑の動きはどちらかというと緩慢だが、この子はそれとよく似た品がある。小銭を受け取る手もなんだか柔らかだ。

「1000円お預かり致します」

うむ。

「120円のおつりです」

うむ……じゃない。

「おかしくないかな？」

「え？」

「え？　じゃなくて、1000ひく630だよ？」

「……ああ、申し訳ありません間違えました」

ああこの棒読み、間違いなく馬鹿にされてる。

なにやらこの子は俺に恨みか何かでもあるらしい。表情に出さないよう努めてはいるようだが、それが逆に不自然だ。

確かに見覚えはある。小動物を思わせるが品のある仕草、小柄で勝気な少女だ。思い出そうとするが霞掛かってどうにも怪しい。何か恨みを買ったようなことをしただろうか？

「バイト、探してるんですか？」

と、突然少女が話しかけてきた。さすがにコンビニバイトに話しかけられるのは初めてという以上に、突然フレンドリーになるからびびったじゃないか。

「ああ、うん。なんというか、稼がなくちゃいけない状況になって」

「……誰か、恋人にプレゼントとか」

「いや、まあ、違うけど、でもあの子のためってのは確かにあるなあ」

「あの子？」

「妹みたいなもんだよ。従妹なんだ」

「いもうと……」

俺の言葉を咀嚼するようにうつむき、そして次に睨むように俺を見据える少女。その強い視線に、少したじろいってしまった。な、何を言っつもりだ。

「ここ、募集してますよ」

「は？」

「ここ。御空マート。バイト募集してます。自給900円で、曜日時間は応相談」

「……なに？」

「しましゅう」

「し、しましゅうだなんて、そんな」

「下劣な想像をしないでっ」

「ひっ、すいません」

怒られたが問題ない。

しかし、確かに魅力的ではあるな。コンビニなら多少スケジュールに無理はきくだろうし、深夜までやっているというのが何より大きい。高校生にそれができるかは知らないが、まあ田舎町の個人経営コンビニだ、労働基準法なんて知ったことじゃないってレベルに違いない。いや偏見だけどさ。

「じゃあ、考えとく」

「その、『あの子』のこと、色々聞かせてくださいね」

「ああ、働くことになったらね」

「あたし、ねこです」

「ねこ？ うん、確かに猫っぽいな」

「名前っ！」

「名前？ 名前がねこ？」

「はい。子どもの子に繰り返し記号つけて、子々」

「ふーん……俺、一。漢数字の一で、はじめ。武内っていうんだ」

「結城。結城子々」

カウンター越しに握手を求める結城さんとやらの手に、そっと俺の手を絡ませた。

細い、というより、すごく小さい。年の程は知れないが小柄だし、それを引いてもその手はひどく小さかった。思い切り広げればすべて包み込めそうなほどだ。

けれど結城さんは物怖じもせず、ふと笑って見せてくれた。

「考えておいてくださいね」

「ああ。じゃあ帰るけど、なんか笑……あの子に伝えることは？」

「そうですね……お困りでしたらいつでも、と」

その言葉に少し違和感を覚えたが、特に気にすることもなく承諾し、店を後にした。

「ただいま」と告げると、廊下の奥のリビングから笑が小走りに寄って来た。待ちわびていたのかと思うとかわいくて仕方がないが、その表情を見るに素直に喜べない。やっぱり薄いんだよなあ、表情

が。

「おかえり、なさい」

「ああ。これ」とレジ袋を笑に渡すと、彼女はそれを覗き込む。
中にはオレンジジュースとバイト情報誌。

「……注ぐ？」

「頼む。氷たつぷりで」

「うん。じゃあ、汗、拭いてきて」

母さんみたいなこと言うなと笑い、怪訝そうな顔をする笑から顔を背けて洗面所へ入った。

鏡を見ると思う。笑のこと、母さんのこと、そうになると父さんやおじさんおばさんの顔まで浮かんでくる。目の前の景色しか映さないこの鏡に、どうしてみんなが映っているんだろ。そういうことが突然に脳裏を過ぎる。

熱くなつた喉に水を入れ、火照った顔にもかけてやった。弱音は吐く。いいか、笑の前では絶対に笑っているんだ。それが俺の使命だ。言い聞かせ、軽く頬を叩いた。

「……大丈夫だって。明るいだけ取り柄だ」

タオルで顔を拭い、笑を想いながら足早にリビングへ。

コップを両手に持ってへりに口をつけながら、笑はぼつと空を眺めていた。テーブルの上には俺の分のジュースと、それからクッキーがあつた。

「や、お待たせ」

席に着くと、笑がすぐに視線を向けてくれた。

「勝手に、飲んじゃって」

「ああいいよ、そのつもりでかいの買って来たんだ」

「ん……ありがとう」

ことりとテーブルを叩いたコップから雫が垂れる。テーブルを濡らした水に指を置き、笑はさつとそれを撫で付けた。柳の枝のように細くしなやかな指。

「笑ってさ、なんか……うん」

「ん？ なあに？」

「いや、かわいい妹だなと」

「……それは、ほめてる？」

「褒めてるとも。ん、ずっと一緒にいてやりたい、とかさ」

「ん、私も。……もうたくさん」

ああそうだとわずき、すぐに話題を変えた。

どこから「かわいい妹」なんてセリフが出てきたのかは自分でもよくわからない。そう思うのも事実だし、その後も否定はしていない。けれどどうしてか頬が火照って、それはさっきの回顧のものと違ったから、それからの俺のテンションはさぞかし不自然なものだったろうと思う。

ああ、ずっと一緒にいてやりたい。いや言い直そう。ずっと一緒にいてくれ。

昼食を終えても、また夕食の準備を笑が始めても、俺はずっとリビングに居座っていた。部屋に戻る気が起きない。頼りない脚をゆるりと動かしながら、笑はきつちんを回っている。

こうやって母さんを眺めたことはない。けれどどうしてだろう、笑の後姿がそれとかぶる。

空気はしとやかに巡り、エアコンの送風と笑の鼻歌がそれを小さく振わせる。この澄んだ音は聞いていてすげえ安らぐ——そう、音ではあるはずなのに、これを形容する言葉が「静寂」くらいしか見つからない。眠くなる。

テーブルに顔を伏せようかとして、ふと思い出した。笑の背中に声をかける。

「あのさ、そのコンビニで女の子に会ったんだ。バイトの」

「……」なんで返事してくれないんすか。

「髪の毛、裾のほう、ちょっと跳ねた感じの。見覚えあるんだけど、知らない？」

「……知らない」

ああ嘘だ。なんでこうわかりやすいんだろうこの子。

「バイト、誘われた。ここでしませんかって」

「……知らない」

もうこの子に聞いても無駄だとそこで悟った。どうせ他に当てはなく、あの子と一緒に働いていれば事情もわかる上、どこか彼女には惹かれるものがある。

「じゃあ決めた。電話しよ」

「兄さん」

そこで意外にも呼びかけがあった。

「……後悔、しないで」

……それは、どういう？

結局電話の際に面接の予定が決まり、俺は明日の午後一時に店舗へ出向くことになった。店長……というよりはオーナーは、結構歳がいつているからか不在の場合がほとんどということらしかった。そこで一任されているのが「平田」とかいう人で、その人からの信頼を寄せているのがあの結城さんということになっているらしい。

要するにまあ、俺の就任を決める面接官が、あの結城子々という少女だっつーわけだ。

……不安になるのは気のせいか、あるいは笑の言葉のせいかな。

第一章―二人の日常―6

夏空の下―第一章 二人の日常―6

枕元で軽快に鳴り響くそれは紛うことなき目覚まし時計だ。軽快と言つのもはばかられるほど不快な音ではあるが、しかしそれが今鳴るよう設定したのは俺なのだ。まったく人類の業の深さときたらないね。

目覚ましを切り、頭を引っかきながら上半身を起こした。時刻は朝の六時。

……どうして俺はこんな時間に目覚ましをかけたんだろう。目的である面接はそもそも午後一時からであるからして、こんな時間に起きてても何の意味もないはずだ。――いやわかつてる、わかつてはいるんだ。認めたくはないが、実のところ、緊張しているのだ。たかがバイトとはいえ、「社会に出る」という言葉にしり込みをしている。

ため息一つ、床に脚を落とした。今日も汗ばむ陽気だ。もうすぐ九月とはいえまだまだ夏真っ盛り、廊下まで差し込む光はその床を濡らすほどに温めていた。多少の不快感を覚えつつドアを開けたそこはトイレである。用を足しつつこぼす愚痴にも力はない。

「……眠い」

それこそ自業自得だからだ。

まったく、俺がこんな緊張してるって知ったら、笑だつて笑うぞ。馬鹿みたいに笑ってばかり、話にも中身はなくてスッカス力、そういう俺だったはずだ。

少しだけ体を震わせてパジャマのズボンをはきなおすと、部屋に戻りシンプルなティーシャツとジーパンに着替え、さっさとリビングへ降りた。

「あれ」

こんな時間だ、まだ誰もいないだろうと入ったリビングのカーテンは既に開け放たれ、眩むほどの陽光に満ちたそこはエアコンの冷風によって過ごしやすい場所となっていた。周囲を見渡してからふと気配に気づき見ると、キッチンにはちまちまと動き回る我が従妹の姿があつた。

「笑？」

名を呼ぶとキッチンから顔を出す。

「あ……おは、よ」

包丁危ないからしまつてから来ようかと視線で訴えると、顔を赤くしながら戻り、再び俺の前に顔を出した。

相変わらずの眠気眼だがまあ、心配するほどのこともないだろう。昨日もすやすやと寝てたはずだし、やっぱり一人と二人じゃ天と地ほども違うはずなのだ。サンプル俺ね。

「ところで」と区切ると小首を傾げる笑である。

「ずいぶん早いな」

「うん……ちよっと」

「ふーん……まあ、適当に待つてる」

「すぐ、作るね」

そういつてキッチンへ入る笑の後姿を眺めつつテーブルへ。椅子へ腰を落ち着けると、その上に乗っていた雑誌を手にとってみた。表紙に躍る「秋物先取り」の文字を見るに、どうやらファッション誌のようだ。うちにこんなものを買うのはいなかったから、恐らくは笑のものだろうが……笑がこういうものを見るとも思えない。なにしろ買い物をおばさんに任せるくらいだしなあ……

ぺらぺらとページをめくると、色とりどりの服や小物や、……い

かん目が潤っちゃう。

「兄さん」の声にびくりと肩を震わせた。

いや後ろめたいことしてないぞ？ してないしてない。ちょっとファッション誌の内容が下着になっていたというだけだ。いやー…モデルだけあって細身で、反則なまでにきれいな身体してる。

「兄さん、つてば」再び肩をぴくり。怪訝な顔でキッチンから顔をのぞかせる笑に、俺は不自然な笑みを向けることしかできなかった。

「ジャムと、バター、どっち？」

「んー…ジャムで」

「ん、わかった」

全力で嘆息、ファッション誌を折りたたんだ。まったく心臓に悪い、お前のせいで笑に妙な勘繰りをされるところだったじゃないか。にしても——嫌でも意識する。モデルの下着姿から連想するものそれは、どうしようもないさ、そりゃあ笑だつて負けないくらいきれいな身体をしてるんだから。まったくいやになる。

「兄さん」

お前はっ、俺の寿命をつ、縮めたいのかっ！

「忘れて、ね」

……いやほんとに。

「しかし」

食後のくつろぎに水を差す俺の声は、何もまどろむ笑を邪魔しようと思って放ったものじゃない。突然に思い出しているもたつてもいられなくなったというだけだ。こういうことはこの一瞬を逃すと後で忘れることが多いからな。

頭を傾ける笑に対し一瞬の間をおき、話を始める。どうやら起きたようだ。

「結構緊張するなあ」

「面接？」

「ああ。なんかさ、面接する人に妙に嫌われてるような気がして」
嫌われてはいない……かな。最後はあんなに話してくれたし。けど最初の頃の態度が嘘だったとも思えないのもまた事実だ。

「もう知ってる、んだ」

「ああ、前行ったときの店員がそうらしくてさ。小さい女の子」
その声にびくりと肩を震わせる笑。

わかりやすいというならこの子も大概だ。腐っても血縁ってことだろうか。しばしの思案の後に、遠慮がちに尋ねてくる笑。俺の方がびびる。

「どんな、ひと？」

どんな人。

小さい女の子という以外の特徴は――

「結構きつい子だった。あと髪の裾のほう、ちょっとぴょこんと跳ねてたかな」

「……そう」

伝えた特徴が心当たりには合致するのか、笑は再び思案顔になって黙り込んでしまった。まったくいやな予感がする。いやな予感ほど当たるとはよく言ったもので、果たしてそういうものこそ経験が多かったりするから厄介ものだ。

ああもう、笑がはつきり言ってくればいいんだよ。それが何であれ知らないよりはずっと、知ってるほうがいい。後で嘆く自由すら与えられないのは苦痛以外の何ものでもない。特にこうやって思わせぶりなことが何度もあればだ。

やがてソファの上でぎしりと身じろぎをした笑は、俺の方へと倒れてきた。

「……笑？」

「……」

返事はなし。

寝てたのかよ……。

笑の頭を肩に乗せたまま一時間ほど、そろそろばうつとするのにも飽きてきた。彼女の髪の甘やかな香りと温もりで力は抜けるばかり、このままだと俺まで寝てしまいそうだ。などと思って笑の肩を揺するうと手を回すと、ふと思に至る。

「恋人みてえじゃん……」

笑の背後から肩へ手を回し、その笑は俺に身を預けている。ああまさしくだ。

それでも安らかな笑の寝息に、わだかまりは何も感じない。いつだったか言っていた、傍にいと安心するなんて言葉。嘘偽りなくこうして身体を預けてくれる笑が愛おしく、だけれども状況を省みるにとても平静じゃあいられなかった。

どうしたもんかと指先を揺らしてみると、笑の細さがよくわかった。掌だけで肩を覆えそうなほどだ。こんな身体に抱えきれない悲しみを抱えて……

っていうのはまあ、いいんだよ今は。

「笑、笑」

「……んっ」

うめき声一つ、それからまた寝息。

笑のやつ、こんな寝起き悪かったかなあ。眠たげな瞳をしちやるけど、寝覚めはよくて、生活リズムもきっちりしていたはずだ。

「起きろー。おにーちゃんそろそろ身体を動かしたいぞー」

「う……ん」

おお、手応えあり。

そのまま揺らし続けることさらに数分、笑は目をこすりながら身体を起こした。俺との身長差はほんの十センチばかり、目と目の距離はごく近く。そうして少しだけ潤んだ目で俺のことを捉えて、笑は顔に紅を差した。

「あ、あ、にい、さん……ごめん、なさい……」

潤んだ、なんて超えて泣きそうだ。それがまたかわいいと思うち

やう辺り、俺も結構病んでるんだろうかなんて思いながら、さて肩に回した手を引こうと動かす——と、びくりと笑の身体がすくんだ。「に、いさん、あの」

今更このくらいで照れることもあるだろうかと思っただけど、それに照れてたのが俺だったことを思い出す。そりゃあ、この距離この体勢、この香りに温もりとくれば、もちろん心臓だって早鐘鳴らすさ。笑の頬に光る産毛すらも見えてしまう。吐息の湿り気まで感じられる。

笑の瞳は濡れたまま何も語らない。震える肩に力はない。不安はどうか、さてはて、どうしたものかと思っていると、笑はそのまま身体を預けてきた。

「ん、どした」

「……あ、うん。あの、あわてる、必要、なかったから」

「まあ、そりゃあ、そうかな？」

「あの子」

「……ん？」

けれど俺の顔を見ようとはせず、笑は独白のように言葉を重ねた。「学園の後輩。学園長の娘だって」

心当たりを探るとすぐに脳裏に浮かんだ少しきつい瞳、そして顔つき。今日の面接官であるところの子々ちゃんか。

にしても、確かにあの時「結城」って名乗ってたな。でもなんで

……

「社会勉強、とか、なんとか。あの子、いつも私に、話してばっかり」

「ふーん……ずいぶん懐いてるみたいだなあ」

「どうなん、だろうね。よく、わからない」

ともすれば苦笑いともれそうな声をため息と共にこぼして、笑はそのまま無言になった。俺の肩から離れようとせず、ただじつと目を閉じている様子だ。この体勢が落ち着くんだろっかなんて思うと俺まで苦笑いがこぼれ、肩に回した腕で笑を引き寄せてみた。

身をすくませた笑だったけれどすぐに脱力して、静寂が訪れる。わかつちやいるんだ、笑の頬が紅くて、肩は少しかり震えているし、いつもより体温も高いくらいだ。でも、それだけだ。

夏の日差しは鋭く強い。風はなく草は青く、窓の外はこの心地いいリビングとは別世界のようだった。暦の上では既に秋、けれど蟬の声はけたたましく窓を揺らし、外の景色は陽炎に歪む。

本当に別世界だった。笑の息遣いと香り、温もりと重み、すべてが彼女の存在を近く感じさせた。大切な人、近しい人が「ここに在る」ということの感動だ。胸が熱くなる。

「なあ笑」

「んー……？」眠たげな声。

「俺たち、結構うまくやってけそうだなあ」

「……そう、だね」

本当に思っんだ。

「家族、かあ」

「……かぞく」

家族がここにあるということと、そういう事実の、当たり前のはらしさが、今この腕にあるということ。これからもずっと傍にいてくれると約束してくれること。

この腕はならばきつと、この子をこうして包んでいくためにあるんだ。守っていいこう、いつまでだって——本当に、そう思っただ。

さて守るためには先立つものを。と意気揚々と出かけてはみたが何しろ「別世界」だ、暑いなのなんのって、出かけたそばから汗が吹き出る。何しろ今日の気温は、キャスターの言うところの三十二度。真夏日だ。

ありえないありえないと呟きながら角を曲がり、その先の景色がまた歪んでいることにため息をこぼす。笑に言われたとおり、ハンカチなんかをもってきて心底よかった。彼女とでかけるたびに言わ

れるから、すっかり習慣化しつつあったんだ。汗だくのままバイトの面接なんて、そりゃあ出会った瞬間心象を落として当たり前だろう。

さてようやくと立ち止まってみる。目の前にそびえる建造物——なんて仰々しいものでもなく、ガラス張りのそれはごく見慣れたコンビニ「御空マート」だ。店内の様子はここからでもよく見えるとおり、整然と並ぶ商品と店員の立つカウンター。ふむ、あの青と水色のストライプの制服、あれを俺が着ることになる……かもしれないということか。

ああ、わかつてる。緊張してるんだよ。足がぎくしゃくしてどうもおかしな気分だが、ここでじっとしてても仕方ない、覚悟はすぐに固まった。

そうして店内に入っすぐ、結城さんの目に留まり、事務所に案内された。ダンボールが少しずつ積まれた中、テーブルをさしはさんで座る俺と結城さん。彼女の手履歴書などはなく、もはや面接としての体裁を保っているかどうかすら怪しい。何しろにらまれているし。

「……武内さん」

「はい」

武内一ですよろしく。

「ん、まあ、猫よりかは使えるでしょう」

「……はい？」

「だから、働けば猫よりはマシでしょうって」

言ってることがさっぱりわかりません。

第一声が俺の苗字で、それから「猫より働けるか」。もはや面接としての体裁なんてものはどうでもいいようだった。

「本当は温情とか、あっちゃいけないんでしょうけど」

「……おんじょう」

「両親が亡くなって従妹と二人暮らし。遺産は十分にあるけれど、それだけじゃ不測の事態には不安だ」

「な、なんで」

「お葬式。あなた記憶力ないの？」

結城さんのその言葉に思いをめぐらせること数秒、はたと思い出した。

葬式るとき笑にまわりついて言葉を募らせていた女の子。哀れなくらいに必死で、空虚に支配される笑の表情をなんとか和らげようと慰めていたあの小さな女の子の顔が、目の前のそれと重なった。つまり、

「あたしは」

「……笑の」

「あたしは認めない」

「……お姉さまの唯一があんただなんて、絶対に認めない」

第二章―感情と発露―1

しとしとと泣くような雨が降っていたことを覚えている。ある意味では俺たちの日常の始まった日であり、またその運命を決定付けた日ともいえる。ただはつきりしているのはこの日の小雨が夏らしからぬ冷たさで、一日が憂鬱な気分で明けたということだけだった。何がどう変わったのかはよくわからない。「今」この日を振り返ってみたところで、俺には何もできることはなく、またできたとしたら笑はこうして泣いてはいないはずなのだ。

泣くような雨だったことを覚えてる。空が鈍色に輝いていた。

夏空の下 ―第二章 感情と発露―

↓ 1 s t e p i s o d e ↓

水のはじける小気味のいい音に目が覚めた。特に不快感もなくベツドに床をおろしたはずだったのに、カーテンを開けて窓の外を見てみればその気分も一気に消沈だ。嫌いなんだよ、雨は。そりゃあ、

出かけるんであれば好きになるやつなんてそうはいないだろうけどさ。

ため息を一つこぼしてからクローゼットを開き、中から制服を取り出す。登校日もあったが実に数十日ぶりに着ることになるカッターと黒のズボンは、笑がきつちりとアイロンをかけておいてくれた。まめな従妹で助かる。パジャマを脱ぎ捨てそのしわ一つない制服をシャツの上から着込むと、すぐに部屋を出た。笑の顔も見ればこの気分も晴れるだろう。

階段を下りる音と雨音が混じる。さながら拍手のような小さくそろった音ではあるけれど、果たしてこの音を好きになれるというのならこのときだけで。部屋の中で聞いている分にはいい音なのに、まったく自然現象のいやなところだった。

目覚ましはかけておいたがこの時期だ、もう六時ともなれば結構明るい。それでも雨のせいかうすぼんやりとしていた廊下から一転、ドアを開けるとリビングは照明の光で満ちていた。もう起きて朝食の準備を進めてるらしい。キッチンには想像に違わない細い彼女の姿があった。いつもと同じようにせわしなく動いてるせいか、俺の起床にも気づいていないようだった。

「笑」と声を上げればようやくだ。

「あ、おはよ」

「ああ、おはよ。あとどれくらい？」

「ん、あと二十分も、したら、できるよ」

「了解。テレビでも見てるわ」

「うん。寝癖、立ってるよ」

「あとで直しとく」

まめで、それによく気がつく子だ。妹としてみてるし彼女も兄さんと呼んではいるけれど、もしかしたら俺のことを手のかかる弟だとも思っているかもしれない。年齢だけ上、どっちが自立しているかと言われると、そりゃあ客観的に見れば彼女だと思うんだ。

苦笑いも漏れる。そのままの表情でソファに腰を沈めると、新し

いソファはそれでもぎしりと軋みを立てた。そしてそれにも変わらぬ雨の粒音。

笑に言ったとおりにテレビをつけると、ちょうどその天気について美人の姉ちゃんが伝えていた。いわく「昼ごろには止むだろう」とのこと、ほっとため息だ。全国ネットも多く流れてはいるが、基本的に見るのはこういう地域密着型のニュースとか旅番組とか、あとはドキュメンタリーくらいだろう。ドラマ、バラエティとかいった類のものは、少なくとも笑が来てからはほとんど見なくなった。空回りしているような笑いが不快で、作り物の感動が空虚で、馴染んでいたものが突然遠くへ行ってしまったような錯覚——まあ、それほど大げさなものでもないんだけど。

テレビはいつの間にやら今日の事件へ。もう半月だろうか、しかしあの事故のことはいまだにその勢いを止めることなくキャスターの口を動かし、またもつと多くの人を動かしていた。雨に包まれて停滞したような時間を送る俺たちとは対照的に、賠償だの説明責任だのとわめいている大人たち。

社会に出る——ということとはそういうことなんだろう。多く責任を果たすことを求められる場所だ。たぶん。お金なんかどうでもいい、なんて思えるのも家が裕福だったからに他ならない。質素な暮らしならばうちと牧野の家の遺産だけで、少なくとも高校、あるいは高校卒業後俺が働けば笑だけならば公立の大学も卒業できるほどになる。

恵まれている——？ わかんないさ。そんなもん誰にも。いや少なくとも生活の苦しくなった他の被害者よりはずっと「恵まれている」ってことにはなるんだろう。彼らがそういうことで俺たちを責めるとも思えないけれども、それをして思う。やっぱりお金というものの重要性だ。

学校に行くことへの意識も変わるだろうか。なーんてまじめな思考を試してみたいいいものの、やっぱり学校へ行く、なんて行動には特に何の感慨も見いだせやしなかった。友達に会えるうれしい、勉

強めんどくせえ、それくらいだ。

ため息一つこぼしたところで笑の呼び声があった。

「できたよ、兄さん」

「ああ、ありがと」とテレビの電源を落とすと、食卓についた。

いつもと変わらぬパン中心の洋食メニューだ。それでも俺が作るものと全然違う。

「いただきます」

「ん。いただき、ます」

こういう挨拶もまた一人じゃあしないんだろうなあと思う。

「笑、学校の準備は終わったか？」

「ん。って、いつでも、今日は、私、授業ない、みたいで」

「ほーう？　なんだ、よくわからんけどうらやましいなあ」

「そう？　兄さんも……は、勉強、しようね」

「……ハイ」

なんとという切ない言い直しなんだろう……笑ちゃんはいつもの確にお兄ちゃんの心をえぐるなあ……。

まあ、おそらくは転校初日だからということだろう。あるいは事故の直後である程度の便宜を図ってくれた、くらいのものだろうか。いずれにしても今の笑にはありがたい采配だった。人が苦手、それも今はストレスを過剰に溜め込んでいる時期のはずだ。

制服姿の笑を見て思う。似合っている。でも馴染めるだろうか。

「……何かあったら俺のクラスに来いよ。二の六だからさ」

「ん、わかった。すぐいく」

「いやすぐ来ちゃだめだろう……」

笑がクラスに来るのはもちろんうれしいが、自分のクラスに馴染めないんじゃないかな。意味がないね。信や律だったら人懐っこいやつらだし、たとえば馴染まないにしても積極的に話しかけていくはずだ。俺の従妹で、大事な人だから、という理由だけでだ。ただクラスの人間はそうはいかない。気に入らないとなれば叩く人間だっているだろう。

休み時間のたびに上級生のクラスに遊びに行く——どうだろうか、心象は。

妙に不満そうな顔をしているのは気のせいかな、笑は何も返事をせずにトーストをほおばった。相変わらず一口の小さく咀嚼も遅い、時間のかかる食べ方だ。けれどこれは、うん、かわいいからおっけいだ。

「ん……みちゃ、や」

しっかりと飲み下してからしゃべるあたりも、ちゃんとしてんだなあと思いつつ、とりあえず謝っておくとまた一口。

「かわいいなあ」

「……」

すっごいにられた。褒めたのに。

「笑ー、まだかー！」

「もう、ちよつと」

洗面所に向けて声を上げたのは八時を少しばかり過ぎた頃だ。さて学校へ行こうと準備を始めたが、案の定といえいいのか、笑のそれは相当に遅かった。いや案の定なんてことはないだろうか、甘く見ていたとしか言いようがない。一緒に出かけたりはしていたのに、思えばこうして出かける準備を待ったことはなかったんだ。

外は相変わらずの雨。ドアをはさんだ向こうの空気はすでに湿っている。ああいかな、外に意識を向けるからいけないんだ、笑のほうに集中すればそんなこと気にならないんだから。髪を直し、顔を洗い、……あと何してるんだろ。女の子のことなんてわかりやあしないが、なんにしても時間のかかることだ。

「おまたせ」

といったところで洗面所から出てきた笑は、いつもとさして変わりはない。きれいなままだ。

「んむ。よし、ほら傘だ」

革靴を履き地面で叩く笑に白い傘を手渡すと、少し強く玄関のド

アを押し開けた。

空に地面があるみたいだ。アスファルトに墨を混ぜ込んだような色をした空が雨水を吐き出し、またその水がアスファルトに帰っていく。まったくいやな空だった。暗く、電気を消した室内よりは少しばかり明るいものの、やはり新学期初日からこうだと気が滅入る。ため息をこぼすと後ろから笑の聲がした。

「いこ」

ああ、行くとも。隣に歩くこの子がいるだけ、まあマシってことなんだろう。にやけた俺を訝しげににらんだ笑は、俺を追い越して歩いていつてしまった。あわてて追いかけて隣に並ぶと、笑は一度だけ俺を見た。

「笑ってこうして並んでみると結構背高いなあ」

「並ば、なくても、同じ、だけど……」

「そりやそうだろう。いやそういうことじゃなくて」

「……冗談」

そりやそうだろう……げんなりする俺を笑うようにして覗き込む笑の頭を軽く小突いてやると、今度はそのまま目遣いににらんでくる。何だ俺らカップルか。

「百六十五、だっけ？」

「うん。みんな、より、少しだけ、高かった」

「少し、かあ？ 周りの女子よりだいぶ高そうに見えるけどなあ」

「ん……そう、かな」

俺が確か百七十五くらいだったはずだ。その十センチ下で、顔の辺りに頭があるくらいだろうか。うん、やっぱり周りの女子にここまで高いやつはそうそういなかったはずだ。まあ、大半の女子はうる覚えだし、唯一はつきり覚えてる律だって百六十はなかった。

それに細いんだ、笑は。脚は長いし、そりやあ胸は少しばかりさびし……

「……なんか、いやな、気配」

「……なんでもないぞ」

なんでもないと。

「兄さんは、背の高い、のは、いや？」

「ん？」

「背高い、女」

「んー……いや背の高い低いは関係ないだろう。生まれ持ったもんなんかどうしょーもないわけだし」

「ふーん」

そりゃあ好き嫌いはあるだろうさ。けれどもまあ、たとえば俺が笑を好きになるとして、少なくとも背の高低がその基準になることはありえない。それにこういうスマートな女にほれない男なんてそうはいないと思うぞ——なんて言葉は、飲み込んでおいた。

住宅街に音はない。生活の匂いがそこかしこから漂ってくる以外に、家々もブロック塀もそれから道路、電柱にいたるまで、まるで画一的にしか見えなかった。そういう中を歩いていても足音は雨に濡らされ、暗い陽光は二人を包むと言葉を奪ってしまう。参ったな、言葉が続かないことに苦痛なんてなかったのに。

黒い傘の先からひたりと雨粒が落ちていく。少しずつながらまた一つ二つと確実に、足元へ波紋を立てていく。目の前には変わらぬ景色。見える限りに角は三つ、右側の二つ目を曲がってしばらくすれば商店街だ。住宅街と商店街、それから繁華街の境界は曖昧だ。いつの間にか小型店舗が目立ち始めて、またいつの間にか中型店舗、大型店舗、そしてビル郡へと変わっていく。どういうからくりだろうと思つてはみるが、それを意識してそこまで歩いたことなんてなかった。空と雨、それからあの雲、地面、その境界はどうだろうか。なんにしても気まずい沈黙だった。笑はどうだろうかと思つてみて、ふと隣を見ると、笑もまたこっちを見ていた。ぼうつとした視線は相変わらず、俺のそれに気づくと小さく小首を傾げる。癖なんだろう、笑はよくこうする。

「笑さ、それは癖か？」

「え……何が」

「首、傾げるの」

「ん……なんで、だろうね」
いや知らんけども。

まあ聞いといてなんだけど、癖ってそういうもんか。笑だって俺の知らない俺の癖を知っているかもしれない。とまあ、納得できそうなもんだけども、まだ笑はそうして顔を傾けたまま歩いている。前向けと言ってようやくだ。

「今日の晩飯は」

「かれー」

「カレーか。うーん、珍しいな、笑がそういう既製品っぽい作
るの」

思えばそうだったな。ラーメンとかカレーとか、既に材料が七割完成してしまっているものを、笑が買ってきたためしがない。あえて言うなら朝のスープとかパンとか、そういうものだけだったはずだ。とそんなことを思っていると――

「スパイス、から、作るよ？」

なあんてことをのたまったのだ、この子は。

「好みじゃ、なかった、から。レトルトも、ブロックも」

「……お前はほんと、何でもできるなあ」

そうしてまた小首を傾げる笑を笑うと、彼女は不服そうに頬を膨らませた。それがまた面白くて笑うと……と、悪循環だ。我慢してしばらく口をつぐむと、笑はとつとつとその秘訣を話し始めた。

「不満に、思ったら、自分で、やってみる」

「それが秘訣か？」

「ん。勉強と、おんなじ」

「なるほど、俺にできないわけだなっ」

その呆れた目も想定範囲内だ。問題ない。……問題、ないんだ。

「兄さん、は、楽しそう、だね」

「能天気と言いたいわけだな」

「ちが、違うよ。えっと……なんて、いうか、その、楽しそう」

「能天気と」

「いい加減に、して」

「すいません」

まあ言わんとするところはわかるんだが、どうしてかからかいたくなるのは笑だからだろうか。律相手だったらこんな風にかかったりは……まあするけども。女友達が特に多いわけでもなし、そういう点では笑や律といった女の子のいる分には幸せだって思ってもいいんだろう。こいつらにとってはどうか知らないけど、まあ笑は懐いてくれてるみたいだし、やっぱり幸せっちゃあ幸せなんだろう。横顔を見て思う。

ちらちらと俺の様子をうかがっていた笑は、何も言わない俺を諦めたのか、また前を向いた。商店街に入り繁華街を越えればもうすぐ学校、半日は笑と離れ離れか。以前はそれが日常だったのに、今はそれに少しばかりの寂しさを感じる。繁華街のあと、また住宅街に入るかといったところにミソガクはある。遠くもない、近くもない、まだ新設で途上といったミソガクにふさわしい、なんとも中途半端な距離だった。もちろん俺たちの家からの距離がこれだってだけなんだけど、どうにも不思議な中途感があるというか——言葉にするのも難しい。

「もう結構車通ってるなあ」

繁華街に入りそんなことをつぶやいてみる。ここを通るのはずいぶん久々だ。

「ん」と笑の返事はそれだけ。

「やっぱり苦手か、人ごみ」

車だけでない、通勤通学途中の人々も往来を埋めている。そりゃあ時間も時間だ、まばらと言えなくもないけれど、笑にしてみれば十二分に「多い」といえる。

案の定笑はこくりとうなずいて見せた。ため息は出なかった。

「一人じゃ、ないからな」

「うん、ありがと」

俺の予想が合っていたのか、笑は俺の言葉に微笑んだ。いや表情が変わったわけじゃあないんだろうけど、俺にはそう見えたというだけの話だった。まったく都合のいい解釈ではあるけれど、不思議といい気分だったんだ。結局言わなかったけど、「手をつなごうか」、なんて言い出したくなるほどに。

そうして校門の前に立った笑は少し気後れしたのか、一歩だけ後ずさりをした。正門からまっすぐのところには円形の花壇があり、そこに伸びたのち囲うようにして背後の校舎へ伸びていく白い石畳の道。この奥に整然と一棟、二棟、といった具合に四棟校舎が並んでいるという構造だ。花壇の右へ伸びる道は体育館へ続き、その隣にプール、卓球場などがあり、校舎の奥にはテニスコートと柔剣道場。花壇から左へ行くとグラウンドだぞーと、そういった具合にしてやった説明を、笑は俺のほうをちゃんと見ながら聞いていた。

「んでもって、一棟が一年、二棟が二年、三棟が三年、四棟は特別教室棟だ」

「私は、一棟？」

「そういうことだな。職員室も各学年に一個ずつだから、まずは一棟の職員室だな。案内するか？」

「おねがい」

まあ、懸命な判断だ。案内が必要なほど複雑な造りはしてないが、職員室が二階にあるという点じゃあ少しばかり変わってる。でも、そもそも学校の教室って、校舎一つに南北並んだ教室を作らないんだよな、確か。太陽の光を取り入れるためだかなんだか、そんな気遣いは別にいらないんだけどなあ。要するに適当に歩いてればまず迷うことはない、というのが少なくとも俺の知る「普通」の学校だ。まあ、少なくとも校門前にたたずむ女の子を無遠慮にじろじろ見る文化が「普通」だとは、決していえないとは思っけども。お前ら見慣れないからって見るんじゃないよっ、これは俺の……俺の妹だぞ。

とまあそんなこんなで物珍しげな視線に辟易しながら、笑を一棟二階西隅の職員室前へ案内すると、「大丈夫か」と声を掛けた。

「だいじょぶ」

「自己紹介はちゃんとするんだぞ。牧野笑です、で終わるなよ?」

「……えっ」

「……終わるつもりだったのか」

いやまあ、予想はしてたけどね。予想してたから、忠告したんですよ。

「まあ初日だしな。んー、趣味はなににですとか、彼女募集中ですとか、そういうあれだよ」

「彼女、募集……」

笑が彼女募集。おかしいなそれ。おかしいけど……どうしてだろう、すごく心ときめく。

だがあえて掘り返すようなことはせず、職員室のドアを開くと笑の背を押した。

「行ってこい。しつかりな」

「……ん。ちゃんと、勉強、してね」

「わ、わかってるもんっ」

「……じゃあ」

……いいんだ。わかってるから。

二棟三階の東から二つ目。二年六組。朝日の漏れる俺の教室は、既に多くの喧騒で埋まっていた。結局笑の準備で結構時間をとられたから、そりゃあ人も多いはずだ。立ち位置はどっちかというところ——自分で言うのもなんだがムードメーカー、悪友の信と一緒にとばけた発言でクラスの真ん中にいることは多いと思う。ただ——

ドアを開けて感じるその視線。静まった喧騒。誰も俺に話しかけてこようとはしなかった。これかな、学校が始まったとして、俺が一番恐れていた事態は。まったくいやになる。

自分の席は窓際から入り口へ二つ目、後ろから二番目の席だ。隣

の女子生徒は……

「なんだよ」

じつと俺を見ていた。まさに「氣遣わしげ」という言葉にふさわしい視線だ。

「律、きもちわるいぞ」

「……一君、元気ないね」

「お前は俺の何を見てるんだ」

そりゃあ葬式的时候はたぶん、律にはそう見えただろう。実際のところは忙しくてそれどころじゃないって感じではあったけれど、余裕がなかったというのもまあ元気がないということにもなるんだろう。ただ今は違う。大きく満たされてる。

「まったく、もう一年半の付き合いになろうというのに、一君のこの有り余る性欲をも見抜けないとは……律の名も落ちたもんだ」

「せ、せいよく……一君、こころが……おかしく……」

どうしようすごく哀れんです。

「俺は前からこんなだったと自覚してるが」

「……そういえばそうだよな」

「そこで認めるな。切なくなる」

「……そういえばうん、心配するだけ無駄だったかな」

「無駄とは言わない。言わないで」

真面目そうな容姿とは裏腹に辛らつな彼女の名前は、鈴木律。彼女の容姿、性格、その他もろもろ含め形容してしまうのであれば――「普通」とか「凡庸」であつた。黒のまま切りそろえられたセミロングの髪に、眉は形を整える程度、目は小さくもなく大きくもなく鼻も同様、唇が少しばかり艶つぽくはあるが……とまあそういういた具合だつた。制服だつてほら見る、第一ボタンまできつちりとはめ、笑ですらつけていないリボンを締め、スカートは……見なかったことにしておこう。体裁が悪い。

じろじろと見ていたか、律は訝しそうに俺を見つめる。

「……いや、照れるな。そんなに見つめないでよ……」

「きもちわるいよね」

「言うな」

切なくなる。

といった風に辛らつではあるが、

「でも、困ってたら言ってね？ 力になるから。あたしにできると、ないかもしれないけど」

と、面倒見のいい性格をしているのも確かだ。勉強ができない俺を心配して近づいてきたという委員長気質でもあり、だが委員長という枠に収まらず生徒会副会長にまでなってしまった女でもある。会長であつても十分な仕事はできるであろうに、副会長を選ぶ辺りが律らしい。

整然と並んだ三十ばかりの席はもう九割方埋まっている。律の言葉には「ありがと」と返して見渡してみるが、ふとあいつがいないことに気づいた。まあいつものことではあるが一応――

「信は？」

「信君はー、うーん、もうすぐ来るんじゃない」といったところで乱暴に開くドア。

「いよーう。一君律君、ひさしぶるー」

「ひさしぶるーって何？」

「さあ。まあ信だし」

「信君だからか。納得」

うん。

憤慨するこの男は井上信。まことと読むが、俺たちはもっぱらしんと呼んでいる。まあどうでもいい。適当に流した金髪に囲われるその顔は細く小さく女もうらやむような美形……ではあるが、まあどうでもいい。見た目どおりに軽いやつだ。

選ぶ話題が何より先にこれだというのはその一端だと思う。

「そんで一、新婚生活はどうだ？」

「あ、それあたしも気になる。笑ちゃん、だっけ？ かわいいというか、すっごいきれいな子だよー」

「……お前らなあ。従妹だぞ、従妹。妹みたいなもんだろうが」

まあそりゃあ、多少異性を意識しないでもない。一緒に寝たときなんかも、最終的に感じた安堵とは別に、少しくらいはときどきしたもんだ。けれど違う。

「ま、その様子じゃ何もないわな」

「ん、ああ。なんだかんだで、大丈夫だな」

「どよーんとした、あれだ、自分の家で奥さんが他の男と絡んでんの見たみたいなさ、顔をした一を想像してたんだ」

「……それは、お前」

「いらん心配だったな」

「ああ。間違いなくいらん心配だ」

茶化してるが、心配したっていうのは本当なんだろう。たぶん。それだけ感謝しつつも適当にじゃれあっていたらすぐに先生がやつてくる。信が来るのはいつもHRぎりぎり、それでも遅刻はしないところがまったく信らしい。最低限であれ単位はとり、無事卒業しすぐ家を出る。それが信の目下の第一目標だからだ。

どこもかしこも複雑だらけ。まったくいやになる。ため息を悟られ隣の席の女子生徒から「大丈夫？」の声。もちろん大丈夫だともお前らみたいなおせっかいがいる限りはこの世に絶望する暇もありやしない。

——笑。お前もこういう仲間が見つかるといいなあ。

……下校時間すぐに向かった正門には、案の定表情を変えないままの笑がいたのは、そりゃあ予想していた事実ではあるけれど。

第二章―感情と発露―2

夏空の下 ―第二章 感情と発露―

↓2nd episode↓

実際のところ樂觀視していたんだと思う。なんだかんだで律も言うようにきれいな子だから、少なくとも引く手数多ではあるとは思っていたし、実際もそうだったんだろうと思う。重要なのは笑がそのどれも拒み、一度家に帰ったにも関わらず制服姿で俺を待っていたことだ。一人は、辛いんだな。

ぼうつとした視線をそむけようとせず、正門の柱の横で笑は俺の隣に立っていた。黄昏に沈むようなその視線を受けてみて、どうしてか俺もそらしてはいけないような気がした。そうしていると正門から出てくる陽気な声、笑の苦手そうなやつだろとは思っていたが――

「よう、こんなとこでなにいい雰囲気作っちゃってるの、」

「……信。できれば大人しく」

「それは俺じゃねえ」

「——だよなあ」

案の定、すぐさま視線を地面へ落としてしまった笑を横目にため息を一つ、そいつを見た。井上信、とはいったものの、彼が誰かを信じているのを見たことがない。いつもへらへら笑っていて、とにかく輪が崩れてしまうのを何より嫌う人間だった。複雑な家庭環境が原因だとは思うが——ともかくにも一度輪に入ろうとする人間、あるいは輪の中にある人間の大切な人であれば、放っておくはずがないんだ。

笑に向き直り、その美形を活かした爽やかな笑顔を——向けてはいるが、いかんせん普段の信を知ってるせいか、心の底から気持ち悪い。

「笑ちゃんだっけ、俺井上信。シンって呼んでくれていいから」

「何だよその猫なで声。気色悪い」

「……水を差すな。これは俺の一世一代の勝負なんだ」

「何の勝負だよ」

もちろんナンパだという信の後頭部を張り倒し、笑を背後にやった。そうして後ろに追いやられた笑はそれでいいとも言うように俺のシャツのすそをつまみ、ふつと息をついた。やれやれ、これは本格的だなあ。

「……嫌われたもんだ」とその金髪をがさがさとかきむしり、同じようなため息を一つ。

「いや、信。嫌ってはいない」

そうさ、これだけは伝えとかなないと。そりゃあ信がこの程度でくじけるなんてことはありえないけれど、そういう誤解を植えたまま笑と接してほしくはないんだ。ただのわがままだけど——本音なんだよ、心からの。

「な、笑？」

後ろを向いて笑いかけてみれば、うつむいていた笑はかすかな上目遣いでそれに応えてくれた。

「そっということだ。よろしくな」

「んー……まあ、いずれ、だな。よろしく、笑ちゃん」

「あ、よろ、しく……おねがい……」

語尾のほうはもう小さくて聞こえなかった。ただそれが伝わったということだけは確かだったから、もうこの辺にしておいてやろうと思った。

信に別れを告げると、彼は気にしたふうもなく手をぶらぶらと挙げてから帰っていった。俺たちとは逆方向、南側の隅に住むあいつの家には、俺も行ったことがない。これから行くことはないはずだ。釈然としない思いに首をかしげてから、シャツのすそにあった手をつかんで振り返ると、笑はまだ上目遣いに俺を見ていた。

「帰ろうか」

「……うん」言葉少なな笑に無理やりの笑顔を向けると、安心したように力がこめられた。その白魚みたいな細い指をきゅつと丸めて、俺の無骨なそれに応えてくれたのだった。……やばいなこれかわいいぞ。

家に帰ってようやく笑の身体から力が抜けた。今まで違和感程度のものしかなかったが家に帰ってはつきりした。玄関を開けるために手を離して、そして扉を開け廊下の電気を点け、彼女に振り返ったところで明らかに表情の質が変わったのだ。俺にはわかる。

リビングに入って制服のままエプロンをして夕食の準備を始めた笑の背中を見て、なんとはなしに呟いてみる。

「休んでも、いいんだぞー……ってか」

果たして笑がそれを望んでいるかは別にして。

ともかくも他人ありきなくせ、他人に頼ることに限りなく不器用な笑。今しばらくは俺が引っ張っていつてみるさ、けど——いずれこの家から出て行くこともあるんだろう。そのとき彼女の傍にいる人が、彼女のすべてを受け入れてくれているだろうか。

黄昏時。逢魔時。何かしらの「異物」でもいるんじゃないかと、背後を振り返ってみたくなる色をした時間。ソファの背にはいつも

のように笑が料理を作っているはずなのに。リビングの蛍光灯が照らすこの場所とは対照的に、カーテンは暗く燃える情景を薄く遮りその残滓を映し出している。まったく何か潜んでいそうな色だった。「笑さー」ごまかすような俺の声。

笑は料理の手を止めて振り返ってくれた。俺が振り返るとほぼ同時だ。

「信は、どう思った？」

「……さあ」

いつも安堵を運ぶソプラノの声が、俺の友人を否定する。

嫌いじゃあない。だが好きであるわけもない。それは——どうでもいい、ただの無関心でしかないんだ。「兄さんの友達だから」挨拶したに過ぎない。……考えすぎかな。もっと好意的に捉えてもいいものだろうか。

「うつとうしいかも知れないけど、あいつああいうやつだから、しばらくは寄ってくるよ」

「……うん」

「我慢。できるか？」

「うん」

本当はこういうことを言うべきじゃあないんだろう。警戒するまではないものの、人と関わることにストレスをためるのならば、せめて必要最低限にとどめるべきだとも思う。人間関係の重要性を説く人間は多いけれど、それが重要だと思うことそれ自体、既にそれを重視しているということだ。だから、彼らはそれを軽視する人間の気持ちを一切顧みてはいない、ある意味では自己中心的な人間だとも言える——まさしく俺のことだけださ。

笑にも仲良くなってほしい。信だけじゃなく律もだ。女であること、真面目であること、面倒見がいいことなんかもあるから、律はそりゃあ信に比べればとっつきやすいとは思うが、果たして笑にとって彼らはいかな存在になっていくんだろう。

しばらく料理の手を止めていた笑は、俺の言葉が続かないことを

確認してから再開した。素人の俺が見ても手際がいいと思える軽快さで、次々と食材を化かしていく。動作は決して速くはなく、むしろ緩慢とっていいものの、どうしてか俺がやるよりずっと早く食材は料理になっていく。まるで何かしらの手品でも見ているようだった。

まったく世の中のままならないことだった。クラスの連中をここへ連れてきて料理の一つでも振舞ってみろ、すぐにでも人気者になれるくらいの特技だつてのに、笑はそれを「当たり前」と思っているんだ。それは俺も知っている。家事をするのは女の役目——間違っちゃいないが、いささか古い觀念に囚われすぎじゃあないかな……なんて、それを放ってソファでくつろぐ俺に言えた言葉じゃないんだろうけどさ。

「笑ー、今日は学校行つて腹減つたからたくさん頼むぞー」

「ん。たくさん、ね」

その背に声をかけてみれば律儀に返事がある。友達のできない要素なんてないじゃないか。

まったくままならないことだった。

「それで……これが、笑なりの『たくさん』か」

「ん。たくさん」

たくさん……は、確かにたくさんなんだろうけどさ……これはないだろう。

カレーだということは聞いていた。ただしいつものカレー用の皿のへりが見えないくらいの山盛りだということとは知らなかったし、トンカツでご飯の白い部分が見えなくなるとも聞いていない。ポテトサラダはあくまで常識的な量——だが、笑の前に小さな皿がちょこんと置いてあるあたり、これが一人分なんだよなあ……まったく張り切りすぎもいいとこだ。

あきれた目の俺を笑は上目遣いににらんで、すぐに消沈した。

「ごめん、なさい」

その消沈ぶりには今度は俺がうろたえる番だった。何せあきれただけだから、こうまで悲しまれちゃあ立つ瀬もない、責めてるつもりもなかったんだから。

「怒ってるわけじゃないんだ、笑」

「でも……ごはん、もったい、ないから」

「たくさん食べたいなんて言ったから、張り切っちゃっただけだろ？ うれしいくらいじゃなか」

「……兄さん」

ふっ……こうしてナチュラルに笑を感動させられる自分の才能が恐ろしいぜ。

冗談は置いといてだ、少しだけの上目遣いからすぐにまたうつむいた笑を見て思う。笑は感受性も感情表現も十分豊かな女の子なんだろうな。その形が少しばかり歪なだけなんだ。そして——人はそれを許せないんだという。

そりゃあわからなくもない。俺は笑の生き方を比較的長く見てきたから彼女の感動に敏感になったけれど、他人にとっては「何を考えてるのかわからない」人間であり、例えば俺が勉強ばかりしてるやつを理解できないように、それを不気味にも思うかもしれない。

だけれども、それとこれとは別物。——考えないようにしている。「兄さん？」

気づくと笑は正面を向いて俺を見ていた。物怖じした様子もなく、返事のない俺をいぶかしむように小首を傾げる。

「食べるか。腹減ってるからな、これくらい全部食ったるぞ」

「……むり、しないで、ね」

「無理も何もないさ。食べただけ食べるよ」

「ん。いただきます」

「いただきますーす、と」

さてさて、笑を喜ばせてやろうじゃあないか。スプーンを取ると、香りからして「美味しい」とわかるそのカレーに差し込むのだった。

翌日の学校、一棟前で笑と一旦別れたものの、数歩歩いたところで彼女がすぐに引き返してきた。快晴も快晴、前日の雨が嘘のように乾いてしまった石のタイルは、笑の履いた革靴の音をよく響かせた。

「忘れ、もの」

と、差し出された手には水色の布の包み。

「おべんと」

「あ、ああ……悪いな」

受け取って少し感動……いやはや俺が年頃の女の子から手作り弁当なるものを受け取ることになるとは思ってもなかった。そりゃあ従妹ではあるけれど――

「そういやいつ作っただ？」

小首を傾げる笑を笑うと、以前にそれをからかわれたのを思い出したらしい、少し拗ねたようににらんだけれどすぐに気を取り直して教えてくれた。

「夜のうちに、仕込みだけ。あとは、朝、仕上げ」

「ほお……さすがだな、うん、涙流して食るとするよ」

「……うん」

返事の前の一瞬の間がすべてを表してお兄ちゃんはとても切ないが、泣かないよ男の子だもん。

さてと用事も済んだと笑は手を振って校舎に消えていった。なんとなく釈然としないものを抱えながら歩き始めて、一棟の昇降口から入って渡り廊下を通って二棟へ行くのに別れる必要ないんじゃないかという答えにたどり着く。天才だった。

……笑は当然もうスリッパに履き替え階段へ続く角へ差し掛かるころだった。お兄ちゃん切ないけど泣いてもいいのかなこれ。

涙をこらえて再出発、履き替えたスリッパがリノリウムをこすってキュウキュウと音を立てる。渡り廊下は一メートルばかりの柵をあしらえただけの、例の小さな凸凹がついたマットを敷き詰めた簡

易廊下だ。手抜きだろうと思うがまあそこは公立高校、下手なところに金を使うわけにもいかんだろうという結論だ。

勉強しろってんなら冷房くらい点けてほしいなあと、渡り廊下の終わりしなに空を見上げて思う。青い青い、向こう側の見えそうな空だった。

ため息一つ再々出発、今度は喧騒すらも気にせずに教室へたどり着いた。律はいつも通り早めの登校なのか既に席について、いつもは雑務で潰している時間を読書に充てているらしい。

まあ、そんな趣味に没頭する律の都合など知ったことじゃあないと肩を叩いた。

「よ、おはよ、律」

「あ、うんおはよ」

相当夢中になっていたらしく、律の返答は少し現抜かしたようなぼうつとした声だった。それとなれば興味も湧くが――

「――何読んでるん？」

「えーっと、……一君、読まないから教えてもなあ……」

失礼な。読まないけども。

「まあいつか。タイトルはこれ」

読んでいたページを開いたまま表紙と背表紙をこちらに向けてみせてくれた。タイトルは「心人」とあり、隣に小さくひらがなで「こと」と打ってある。変わったタイトルだなあと思いながら当て字だろうかと小首を傾げる。

「……読んでみる？」

んー、と考えてるうちに手が伸びていた。意外そうな顔をしてる律以上に意外に思ったのが俺自身だってんだから救いようがないと思う。

何しろ読書感想文でも小説を読んだりほとんどしない人間だ。ふざけて漫画で書いたりしていて、趣味にも選ぶはずがない、本当に文章だらけの本に耐性のない阿呆なのを自覚しているくらいだった。

なのに、どうしてかその本には手が伸びた。これも何かの縁かな
と思つて、何か壊れ物を扱うように手にとって、じつと表紙を眺め
てみる。無表情の少年が小さくたたずんでいるだけの——ごくシン
ブルなものだった。

「大事に扱つてね。本って傷みやすいんだから」

「……わかつてるよ」

拗ねるように言うと言は笑う。面倒見のいい彼女からしてみても、
やっぱり俺つてのは「手のかかる弟」なんだろうか、なんて思うと
少しやりきれなかった。

「じゃあ、今日のお昼、ご一緒していい？」

本を鞆にしまつて、椅子に座つてすぐの提案がそれだった。

「貸してあげる交換条件。えへへ、いいかな」

「まあ、いいけど？」

「へへ、ありがと」

それで本当にうれしそうな顔をするから、悪い気はしないなあと思
機嫌を直してしまう自分もまた単純だ。情けないもんだなあと思つ
て頭をかいて、それからまた「悪い気はしないなあ」と胸の中で呟
いてみる。

律はどこまでも面倒見がよくて、彼女がずっと傍にいたらどんな
人間だつて、普通に社会に溶け込んでしまふんだらうと思う。人望
も厚いからたいいていのことじゃあ頼みごとを断られないし、だから
こそ彼女が忙しいことを察知すれば皆から「手伝おうか」と声がか
かる。日ごろの行いがいい、という言葉はこいつにこそ相応しいも
のと思える——が、声に出そうとは思わない、調子に乗るから。

だから、こいつなら笑をなんとかしてくれるんじゃないかと思つ
た。いや、正直なところ俺だけでなんとかしてやりたいし、これか
らだつてそのつもりだ。けれどももしもどうしようもない問題に立ち
止まったとき、こいつが隣にいてくれたら——……いや、止めよう
こんな考え。失礼すぎる。

思い直して談笑に戻ると、ホームルームが始まる間際に信が現れ、

すぐにHRは始まる。

——盗み見た横顔は真剣そのもの。担任の話なんて、誰も聞いてないのに。

四時限がつつがなく終わり、今朝受け取った包みを藍色のサブバツグから取り出すと、案の定というか、信と律が絡んでくるのだった。

「おい律、見ろ、これはあれだ」

「うん、信君、これはあれだね」

展開が見える、二十点だ。

……なんて言ったものの、見えてしまう展開にうんざりする自分もいる。決まってる、笑を知る二人がその手作り弁当を見て言う言葉なんて、

「愛妻弁当だ！ 愛妻弁当だ律！」

「愛妻弁当だね！ いやーあたし初めて見たよー！」

「俺もだ！ いやー照れるなーなんか」

「なんでお前が照れるんだよ……」

想像通りの展開にげんなりとしながら包みを解いてふたを開くと、から揚げやら卵焼きやら、これぞ弁当といわんばかりのラインナップ。彩りもよくて、本当にマメなもんだと感心してしまうような弁当だった。まだまだ盛り上がる二人を無視して箸をとったところで、話しかけてくるクラスメイトの男子——「知らん女子が呼んでるぞ」廊下に出てドアの横を見ればこれまた案の定、俯き加減にたたずむ従妹の姿があった。

「……笑」

名前を呼ぶと弾かれたように顔が上がる。

「兄さん」

「ん。どした？」

まあ、聞かなくともわかるけれど、あえて笑の口から聞いておき

たかった。それから先の会話も手に取るようにわかったから、会話はいつてもよりもスムーズなくらいだ。

「お弁当、一緒に、どうかな、って」

「ん、構わんけど、友達はいいのか？」

「いい」

こぼれそうになったため息を自制して、「待ってる」と呟いて教室に戻る。

まだ転校二日目だ、焦ることもない。誘ってくるやつだってまだたくさんいるはずだ。それが律みたいなのだったらなおさらいいなあなんて思っただけを包みなおしていると……

「あたしたちなんか目にも留まらない、と」

「切ないなあ律さん」

「涙が止まらないよ」

俺の机に手と顎を引つ掛けて、じつと見上げる二つの人影があった。

……いやマジで忘れるとこだったわごめん。

何か言おうとするとニヤニヤする二人に殺意が湧いたがそれは堪え、搾り出した声に力はなかったと思う。

「行くか？」

「もちろんだとも」

「あたしもー」

すぐ席に戻ってパンとパックジュースを持ち寄る信と、隣の席でサブバッグから弁当と水筒を取り出す律。結構性格って現れるもんだなあと思うが、信が朝家に留まってまで弁当を作とは思えない……からかうのは随分前に自重するようになった。

一人だけで笑の前に立って伺いを立てると、どちらともつかない「いいよ」と返事をくれる。場所は中庭に決めて、すぐに四人で歩き始めた。

二棟と三棟の間にささやかな並木道があって、その周りの芝生にいくつか並ぶベンチは生徒が集う憩いの場所だ。特に春、秋の過ご

しやすい季節には昼食を持ち寄って、時にはビニールシートまで持つてくるアホまでいるが、結構な賑わいを見せる。けれどもまだまだ暑い九月初旬の快晴日じゃあ人もまばらで、さてちょうどいいもんだと手近なベンチに笑を座らせて、その隣に俺が陣取った。その隣のベンチは二メートル先、話をするには遠いから……

「……こういうときって、普通女の子に譲らないかなあ」
律のぼやきももつともだ、しかし――！

「お前にこれ以上普通なんて言葉を当てはめたら、俺は申し訳なくて仕方ないじゃないか」

「意味わかんないよ！ これ以上信君が増えたって対応しきれないんだから！」

「お前、言っているいいことと悪いことがあるぞ！ 信と同レベルなんて心外にもほどがある！」

「……別にいいんだがな、笑ちゃん、もう食い始めてるぞ」

乗ってくるのを期待していたのに信ときたら、呆れたようにそんなことを言う。けれどもその言葉通りにベンチを見れば、黙々と小さな口から揚げをほお張る笑の姿があった――

「……食うか」

「……そうだね」

「そうしろ」

黙々と食べる横で律が話を振って、下の芝生で俺と信が盛り立てる。けれど笑は変わらずだんまりで、……けれど楽しかったと思うこのままじゃあいけないのはわかってるけれど、三人でいるよりずっと楽しかった。

そして一人パンを食べる信を笑ったら殴られた。すごい理不尽だ。それでもなんとかして二人に笑を知って欲しかった俺は、笑の弱点をつくことにした。即ち褒めちぎって照れさせてしまおうという画期的なアイデアだ。

「しかし笑の弁当は冷めてもすげえうまいな」
「ありがと」

「こんな飯が毎日食える俺って幸せ者だな」

「……そう？」

「ああ。笑ってほんっとできた子だよなあ」

「……ん」

一向に変わりません泣きそうです。

そうしてため息をこぼすと視線を感じて、見れば律と信が顔を見合わせ、そしてため息だ。

「律」

「言わないで」

「俺ら忘れられてるな」

「言わないでって」

「あんなセリフを何の臆面もなく」

「すごいよね。あんなの言えるの熱々の新婚さんだけかと思ってたよ」

「でも報われてないよな」

「切ないよね」

「切ないな」

そんな結論を持って二人は肩をすくめる。

空を仰いで赤面してみても、「大失態だ」とごちてみる。空は快晴、青い青ーいまま、向こう側が見えてきそうなほどだった。いまだ先の見えない俺たちの関係についてちよつとばかり考えてみて、またため息をこぼして、すぐに視線を三人に戻す。

まだ始まったばかりじゃなか。笑だって返事をするくらいはこいつらだってわかったはずだ。

何も悲観することはないんだ。そう言い聞かせて、話を盛り上げようとテンションを上げるのだった。

第二章―感情と発露―3

夏空の下 ―第二章 感情と発露―

↓3rd episode↓

九月になるというのにこの気温と湿度はどうしたことだろう、汗がじわじわと少しずつ染み出してくるのが自覚できるほどだった。蝉の声はもう数日に数時間聞こえるか聞こえないかだし、秋の虫がもう鳴き始めているとはいえ、今も気温は三十度を超えている。これでどうして秋なんて言えたもんかとぼやいてみるものの、やはり暦の上ではもう秋なんだろうと少し釈然としないものを感じるそんな時期。

夜道は暗くまた静かで、頼りない街灯の光がぼつぼつとまるで闇に開いた穴のように円を描いている。家々から漏れる明かりはどれも温かで、だからこそこんな時間に一人で夜道を歩いていることに疎外感を覚えてしまう。見上げれば片手で数えられる程度の星がちらちら――救えないほど寂しい風景だった。

左手に巻いた腕時計を街灯の下で確認してみれば、七時四十五分となっている。ここからコンビニまでは五分もあればいけるから、

十分間に合うとみていいだろう。特に急ぐでもなく、スニーカーが鳴らす間抜けなゴム音が少しだけ気を紛らわせてくれる。

夜はあまり好きじゃない。なくなったって言った方がいいのかな。暗いのが嫌いってわけでもないし、星はもちろん——って言っているのか、好きだ。けど、夜特有の静けさというか、どこか寂寥とした空気が嫌だった。ほとんどの音が消えてしまつて、代わりに家の中にそれが全部入つてしまふから、その外にしていると否応にも自分が孤独なのだと錯覚してしまう。——もう、いないんだな、俺の家族。まだ、いる。そんな時思い浮かぶのはもちろんあの子の顔だった。それが浮かぶと、それまでの嫌な気分が全部消し飛んじゃつて、胸が温かくなつて、自然と頬が緩んでしまふ。それくらいにかわいい俺の従妹、笑が、今は俺の隣にいてくれる。

今度は絶対だ。何があつたつて、あいつのことを見守つていく。たとえ守りきれないようなどうしようもない事故があつたつて、俺はきっとそのとき隣にいてやろうと思う。

それだけなのだ。俺ができることってというのは。

どこから入ればいいのかわからない、というか入り口は客用のものしか見当たらなかったから、そこから入つていと「いらっしやいませ」と声がかかった。どうしていいものか、レジ担当の男性に声をかけてみれば、

「新しい人？」

と聞き返してくれた。

「はい。武内一です」

「ああ、子々さんから聞いてるよ」

子々さん……っていうと、子々か。あのちっこいのが、明らかに大学生以上であろうこの人に「さん」付けされることに違和感はあるが、まあ子々ならと納得できるのも怖いところだ。

「奥の事務所、行ったことあるよね。そこに子々さんがいるから、

とりあえず制服の場所だけ聞いて着替えておいで」

「はい」

こう言っちゃ失礼だけど、意外とはつきりとした口調で喋る人だなあというのが印象的だった。あんまりファッションに気を遣ってるようには見えないし、お世辞にもかっこいいとは言いがたいけど、とにかく優しく笑う人だ。顔つきも穏やかだから、男の俺だってこの人の前じゃ安心しちゃうなあと思うくらいで、いい店員なんだろうなと思いつながら事務所へ向かった。

ドアを開ければメロンパンを小さくかじる子々の姿。はむはむとまるでハムスターのようなかわいい姿だった。

「……おはようございます」

で、いいのかな。バイトの挨拶ってなぜかこれのような気がしてならない。

「……おはよう」

すっかりとメロンパンを飲み下してから挨拶だ。やはり品がいいという印象に間違いはなかったんだと思う。

「別にタメ口でいいわよ、あたしのが年下だから」

「ふーん……じゃあ、よろしく」

「あい、よろしく」

やはり小動物的な仕草がとても愛くるしい。けれどハムスターというよりは猫かなあ、子々だけに。ちょっと気まぐれなことかありそうだし、しなやかな体つきも——これはセクハラか。

とにかくも年下であることに少し安心して、って、本当はいくつだろうと疑問に思ってみる。バイトできる、ということは高校生には間違いないんだろうけど、少し違和感があるのも事実だ。

まあ、気にすることもないか。あの人が待ってるだろうし、早いとこ子々の着てるのと同じであろうシャツを着てだね、向かわないといけない。

「制服どこかな」

「そのロッカー。あんだのは一番右」

「ありがとう」

言われた通り、事務所の奥に並んだロッカーの一番右側をガコツと開けると、ぽつんと寂しくハンガーにかかった青と水色のストライプシャツ。他には何もない。

寂しいもんだとシャツだけ着込んで、子々には「じゃ」とだけ言っただけで店内へ戻った。もちろん返事はない。

レジで待つあの人の下へ戻ってみれば、その第一声はこれだった。「うん、似合うね」

あんまりうれしくないのはなぜだろう。

「はあ、ありがとうございます」

「僕は平田幸樹。よろしくね」

ニコニコと笑顔、まったく人懐っこくて警戒する気も起きやしない。そんなもん最初からする気ないだろうと一人突っ込みを入れてみるが、あまりの空しさに断念。彼が差し出した手に応じてみて、意外とごついなあと感心してみる。

「今はいないけど、いつもお客さん来るかわからないから、簡単なことだけ説明しちゃうね」

OKボスいつでもこい。

いつも優しい彼の説明によると、夜の仕事も意外と多いらしい。レジに入荷、品出し、発注、掃除などなど、こんな夜にも入荷ってあるのかと疑問に思っただけ。とにかくもその基礎部分だけをちゃっちゃと教えてもらって、一応のところ時間を潰せるくらいのことではできるようになってくれ、とのことだった。そりゃあ仕事で時間を潰せなきゃあただの給料泥棒だ。やってやりますとも、今はお金が必要なんだから。とはいっても彼の「タバコの銘柄も覚えてね」という言葉はある意味脅しじゃなからうかと思ってしまう俺に罪はないだろうと思う。レジの背後に並んだ数十種類はあろうかと思しきタバコの数々——銘柄と数字を一致させるのも忘れちゃいけない。

けれどもまったく平田さんの親切さときたらなかった。ちよつと

した疑問にも丁寧な答えてくれるし、大変だからとタバコの銘柄の
一覧をプリントしてきてくれたり、少し萎縮してしまうほどだ。
どうも子々から俺の家の事情を聞いていたらしく、それに同情して
くれたようだった。まったく頭が上がない。

そして平田さんはその理由についてまだ加えることがあるようだ
った。

「――静香ちゃんのこと、これから僕が色々話に加わることもあ
るだろうし」

思わず息を呑んだ。

――だってその名前は、知っているのはごくわずかな人間だけだ
ったはずだ。そのごくわずかな人間の最たる人たち、俺と笑の両親
はもういない。だから、どうして。

「いつまでもなかったことにはできない、っていうのはわかるよね」

「……はい」

「お母さんが亡くなったそうだよ。君にはまだ伝えられないって言
ってたけど、君は知ってたほうがいいと思う」

「……！、はい」

まったく、意外なことだった。

人の関わり、縁つてのは結構狭いもんだなあ。まさかこんなところ
で静香の関係者に会うなんて、思いもよらないとはこのことだ。

忘れてたわけじゃない。なかったことにしたかったわけじゃない。
ただそれを知って悲しみ傷つく笑を見たくなかった――それだけだ
った。何も知らないほうが哀れだという人間もいるけれど、今この
状況にあつてそれを言えばどうなるかくらい、馬鹿な俺にだって理
解はできる。

「今はアルバイトと、僕の家とか、ここのオーナーの家とか、そう
いうところからの送金とかで暮らしてるそうだよ。成績はかなりいい
らしいから、奨学金とかも使って学校にも通えてるみたい」

「……はは、俺と血が繋がってるとは思えませんか」

「そうなんだ」と平田さんは笑ってくれた。

冗談を言う余裕はまだある。

だが、母もなくこうして父も亡くなったとなれば、笑や俺の目の前に現れる日も来るだろう。そのとき平静を保ち、笑を守り、そしてしっかりと静香も守ってやれるだけの強さを——そうさ、俺は持たなきゃならない。

「優しい子だよ、静香ちゃんは」

「……何度かしか会ったことなかったですけど、それくらいは覚えてます」

「うん。君のこと何度も聞いてた。何度かしか会ったことないのにね」

そうか……静香が、俺のことを。

「さ、今は仕事だ。あんまり雑談ばかりしてると——」

「ちよつとあんたたち、何サボってんの」

「——こうなるよ、と」

「……はは、忘れてました」

そうして三人になってしばらく、突然子々が口を開いた。

「……暇」

仰るとおりです。

さもありなん、平田さんの説明を受けてるときも然り、あれから数組しか客が来ていない。この時間なら帰宅するサラリーマンとかが寄りそうなものだけど、意外とそうでもないらしい。さつさと帰ってくつろぎたい、くらいのものだろうか。

駅前にだってコンビニはあるし、わざわざ住宅街付近のを利用する理由もない。まったくままならないが、それでも経営が成り立っているということは、普段は客も来るんだろうとは思っただ。

「今日に限って客来ないって、あんたのせいじゃないの？」

俺に視線を向けての言葉だ。

「俺、そんなにブサイクか。泣くぞ」

「一君がブサイクだったら僕もだね、泣こうか」

「……あんたらね」

呆れた顔で嘆息する子々を二人で笑い、今度は全員でため息だ。客が来なくて空しいのは何も子々だけじゃない。

「早くものになってもらわないと困るのよ、お姉さまが」

「笑が困る、ねえ」

一瞬でも子々の気遣いに感動してしまった俺が悔しい。

さりとて子々の言う「お姉さま」がどういう意味か、いまだ測りかねるのが気がかりだ。なんとなく慕っている、ということは言葉の端々から理解はできたが、果たしてそれがどういうベクトルへ向いているのか……百合っぽい展開になったらどうしよう、という懸念は少しある。漫画とかで笑いの種にするくらいならまだしも、バイト仲間が本気でそれに悩んでいて、しかもその相手が従妹となればただの頭痛の種でしかない。種は違えど同じ百合、まったく笑えない冗談もあつたもんだ。

そうでないことを祈りつつ、子々が語る笑のすばらしさに耳を傾けてみる。

「物憂げな表情が恐ろしいほど似合うわよね。本人は不本意だろうけど」

「まあ、確かに」

「物語のお姫様がそのまま出てきたのかと思ったわ、初めて見たときは」

「ないないない」

初めて会ったとき、というのは、子々はどうやら学園時代の笑の後輩らしい。

後輩ということはつまり、中学生だということ——まったく、学園長親バカ説は正しかったと見る他ない。中学生の自分から社会勉強としてバイト、だなんて、金持ちの考えることはわかんないものだ。これで我儕が直るとでも思っただろうか。

「……なんか嫌なものを感じたわ」

……感性は磨かれているようです。

「それよりあの髪よね。あの長さであの艶、どんなケアしてるんだろっ」

「お前、あいつの風呂の長さをなめるなよ」

「……へえ。どのくらい入ってるの？」

「そうだなあ、一時間半近く入ってるかも」

「ふわあ……そりゃ、髪だけじゃなくて肌もすべすべだものねえ……」

あいつの肌はうん、確かにそこらの女子とは比べ物にならない。

他人に見られるのが嫌いなのに、そうして他人から見られる自分を磨いている……どこか矛盾を感じるが、果たしてそれこそが笑の弱さだと俺は思う。「肌きれいだね」と言われれば、それを磨くことでしか自分が他者に認められることなどないんだという自身への絶対的な不信感——そういうものが彼女の奥のほうに根付いている。

ただ髪は別だ。あれに関してはただ不器用なだけの、笑なりの愛情表現だ。もういない、母親に対しての。

「髪のこととは、言うなよ」

「……わかってるわよ。そこだけは、はっきり言ってくれたもの」

そう言う子々の顔からは悔しさがにじみ出ている。

そこだけは、ということとはつまり、そこ以外はたぶんいつもの調子だったんだろう。ほとんど喋らず、ただ黙々と他人の言うことに従っているだけの笑……それは恐ろしいほど冷たい人間として他人の目に映るだろうと思う。

「となると、よくめないよなあ。四六時中あんな調子だと、俺でも参っちゃいそうだ」

「……ということは、家では違うの？」

「普通に喋るぞ。というかかなりあまえんばなやつだ。信頼の差だな」

無言の怒りに震える子々におびえつつ、自分の発言の至らなさに失望してみる。まったく火に油、子々が本気だってことくらいわか

ってただろうに。

子々が文句を言おうと俺に向き直ったところで来店を報せるベルの音。「いらっしやいませー」が一番早かったのは案の定蚊帳の外にいた平田さんだった。

それに続こうと入り口の方へ目を向けた俺は、

「笑かよっ」とツツコミを入れてしまった。

いやだって、まだバイト始めて一時間ちょっとしか経ってないもの。

家で大人しく待つてればいいものを、もう九時だというのにか弱い女の子が夜道を歩くのはお兄ちゃん感心しないぞ。と言いたいのをぐっと堪え、レジ前に来た笑に優しい笑顔を向けてみる。

「気持ち悪い笑顔ねえ」

大丈夫だ。俺は強い子だからめげたりしない。

「で、笑は何をしに来たんだ」

買い物ではないと確信している。なにしろ今まで生活してきて笑がコンビニへ行ったことなど皆無で、おやつですらほとんどが自作という徹底ぶりだったのだ。どうもポテトチップスとか既製品のケーキとかは舌に合わないらしく、彼女が言うところの料理の秘訣とやらで、自作しているらしい。

というわけで買い物線のないと確信しながらも、笑の言葉もまたどんな内容か確信していた。言いたいことわかるんだよなあ、こいつってわかりやすいから。

「……ジューズを、買いに」

案の定だ。

それに何か忠告でもと思ったところで、俺と笑の間に割って入る小さな人影。

「何買います？ あたし持ってきますよ！」

さっきまでの仏頂面が嘘のよう、はりきった笑顔の子々に少し面食らってしまう。と、同時にやりきれないものを感じるのもまた事実だった。

どう言い繕ってもその感情は一方通行だ。愛情の押し売りは迷惑だとよく言うが、それが受け手だけの迷惑だと思ったら大間違いだ。そりゃあ相手の気持ちを考えなければただの独善だが、押し売りでもしなきゃあ自分のことを見てくれさえしない場合どうしたらいい……？　そうするしかないからそうしているのに、絶対だと信じているその感情を、相手からは更に一方的に拒絶されてしまっている。やりきれない。

子々がどれだけ笑を慕っているかはこの表情を見ていればわかる。笑が「子々ちゃん」と呼ぶたびにその表情に喜色が広がっていくんだ。

けれど笑の顔は一向に変わらない。見ていられないほどだった。

フリーザーの方へ歩いていった二人を見送ったところで、ようやく平田さんが口を開いた。

「確かによく似てる」

「……ええ、そりゃあもう、子供の頃からそんな気はしてましたよ」

「あの子は母親似だろうに、皮肉なものだね」

「まったくです」

その会話が笑に届くことはない。いつかそれを知った日、彼女はどんな答えを出すんだろう……今は、胸の奥へしまつて鍵をかけた。漏れてしまったら、笑が壊れてしまう気がした。

にぎやかな笑い声を響かせて戻ってきた二人。もちろんそれが子々が出すものだけだったけれど、笑がそれを嫌がっている様子は見られなかった。それがわかっていいるからなのだろう、いまだにそうして押し売りという手段にしか出ていられる子々が笑っていられるのは。そんな子々の手からペットボトルを抜き取り、平田さんは俺の方へ差し出した。

「さ、レジうつてみようか」

「ふぬ……やってみます」

まあ教えてもらったところそんな難しいもんじゃないのはわかっている。

なにやらわくわくした様子の笑の視線だけだ、俺のプレッシャーの元は。お兄ちゃん妹の期待に応えなければならぬそれこそ兄が兄たる所以、アイデンティティなのだ――！

一桁間違えて打ち直したのは、まあ愛嬌だと思っている。

笑が帰って少しした頃に、子々と入れ替わりでもう一人バイトが来た。高田信浩という名前で、スポーツ刈りといういまどき珍しい髪型をした、快活そうな印象を受けるテンプレートの「いいやつ」だった。意外だったのはその物腰の柔らかさと、クラスメイトだったという事実。

……クラスメイトの顔くらい覚えとこうよ、ねえ。

「あはは、僕ってば存在感ないからねえ。一君みたいにはいかないうよ」

それをこうして許してくれるくらいいいやつなのだ。泣けてくる。しかしどうも時間も優遇されているらしい。通常夜のシフトは九時から一時までなのに、一時間早く入れてもらっている。まったく頭が上がらないが、そうして少しでも貯金を増やしていかないと不安があるのも事実だ。……でも高校生をこんな時間まで働かせていいのかなあという疑問はあった。が、気にしない。

「でももう仕事だいぶ覚えちゃったみたいだし、その方が準備作業楽でいいよ」

「準備作業ねえ……夜シフトって、準備自体はそんなでもないだろうに」

実情は知らないが、聞いた限りだと大した仕事量じゃない。

とはいえ、シフトに関しては疑問があった。

週三日、火曜のこの時間に加えて土日の午後五時から九時。というのは納得したが、夜シフトが通常九時からだというのは、既に店にいてレジをやっていた平田さんはどれだけ働いてるんだと。

「五時からだよ。シフト二つ分」

「よくやりますねえ……」

「フリーターだからさ、暇が多いんだよ」

そう言って笑う平田さんの顔に、現状を憂う様子はなく、悲観しているようにも見えない。本人が納得してるなら俺に言えることなんてあるわけもない。

「シフト表渡すから、ちゃんとマークでもしといてね」

「了解です」

といったところで一時だ。

正直なところコンビニの仕事は意外にきつかった。特に何がというわけでもないが、とにかく客層の多様さには驚かされたというところだろうか。主婦がちよつとしたつまみを買いにきたり、不良っぽいのが飲み物買いにきたり、女の子が私服でちよつとした菓子を買いにきたりと、住宅街付近だからこそというものを感じることも多々あった。

「慣れる、かあ？」

「大丈夫だよ、問題ないように見えたし」

と励ましを入れてくれるのは浩^{ひろ}だ。「皆には浩^{ひろ}って呼ばれてるよ」って言葉からそう呼ぶようになって、思いの他気が合ってしまった。その言葉にもかなり調子に乗ってしまう。こいつが嘘をつくような人間には見えないというのも一因だろうか。

コンビニを出てしばらく雑談を交わしながら歩くと、すぐ別れる道へかかった。「じゃあなー」「じゃあね」と一言交わしてすぐ別れ、俺はすぐに脚を早めた。

もう寝てるだろうけど、恋しくなったんだ。笑が……というか、家がさ。

玄関を開けてみると、廊下の明かりが点いていた。はてと思って奥へ視線をやれば、どうやらリビングの明かりもそのままのようだ。消し忘れたか、それなら明日注意しないとなあなど思いながらリ

ビングへ入ってみれば、ソファに座って小説——「心人」を読む笑の姿があった。

「ただいま」

「あ……おかえり、なさい、兄さん」

すぐに本を閉じてソファ前のテーブルに置くと、慌てて立ち上がって迎えてくれた。向き直って駆けてくるその顔には、これとわかる感情が広がっている。

……やっぱりまだ少し早いかな。そう思うと苦笑いが漏れる。

「まだ起きてたのか。先に寝てろって言ったのに」
だからこそその声にも陰があったと思う。

こうして帰りを迎えてくれるのはうれしいし、本当に胸が熱くなるほどだったんだ。夜道が暗くて、静かで、笑の顔を見ると帰ってきたんだと実感できる。けどそれより心配になるだろう、笑の性格と体調を鑑みればさ。

「……うん」

怒られたら俯いてしまう子供のような笑。けれど身勝手というわけでもないし、ただのわがままというわけでもない。だからこそ愛しいんだと思う。

「俺、風呂入ってくるから」

「うん」

「先、寝てるか？」

「……待ってて、いい？」

俯き加減のまま、うかがうような上目遣い。不安なんだろう、まだ怖いんだろう。

なら答えは決まってる。

「部屋で待っててもいいぞ。様子見に行くから」

「ん……ありがと」

そのまま、笑は俺が部屋を出るのを待っていた。
脱衣所で服を脱いで浴室に入っても、その顔が頭に浮かんで消えない。きれいだけどこわいくて、思い出すほどに胸が温まってい

その姿。その声を頭の中で繰り返し繰り返し思い出してみて、頬に集まった熱をお湯で冷まそうとしてみる。

——何考えてるんだ、妹に。守ってやらなきゃいけない、俺の家族に。

「はあ……まったく、ダメな兄貴だな」

笑がどれだけ不安を抱えてるか、察してやらなきゃいけないのは俺なのに。

バイトに行くということは、一人家に笑を残していくということだ。一人家で待つのがどれだけ苦痛か、わからないわけじゃあないだろう。

現実はその甘くないが、両親の貯えは十分だ。——でもどうしろっていうんだ。また「万が一」があれば、「十分」ぽっちじゃ足りないかもしれない。稼がなきゃいけない、貯えなきゃいけない、けれど笑には寂しい思いをさせる。

まったくダメな兄貴だった。それこそ、大丈夫だと言う笑を信じてやれない不甲斐なさまで、筋金入りだ。

第二章―感情と発露―4

夏空の下 ―第二章 感情と発露―

↓3rd episode↓

朝はいつも笑のほう早い。元々朝に強いのかどうかは知らないけど、眠そうな顔一つ見せない辺り俺とは違う生活してたんだなあとと思う。いや、そりゃあ寝起きだろうと活動中だろうと、いつも笑は眠そうな顔してるんだけどさ。

バイトで深夜まで起きていた翌日の今日も例外でなく、リビングのカーテンは開け放たれ、エアコンもちょうどいい温度まで効いているようだ。エアコンが効き始めるまでどんくらかかるんだっけか、なんてことを考えてみたが、結局思い出せずに終わる辺りが切ないくらいに俺らしい。キッチンにはいつものとおり動き回る笑の後姿があつて、俺の入室に気がつくと振り返るのだ。

「おはよ、兄さん」

「おはようさん、笑公」

「……えみこっ？」

小首を傾げながら料理に戻った笑を笑いつつ、喉が渴いたと俺も

キッチンに入る。二人程度じゃ狭いってほどでもないが、少し動きにくそうにする笑に「悪い」とだけ言つて、戸棚からグラスを取り出す。なんかいいなあ、こうしてキッチンで道を譲りながら動き回るって、あれだ、新婚さんみたいじゃないか。

なみなみとグラス一杯に注いだオレンジジュースを一気にあおり、ぶはーっと盛大に息をついてみる。

「おじさん、みたい」

実に心外だ。

「おかしいか、飲み物飲んだあとにため息って」

「……おかしく、ないけど」

釈然としないか。まあいいけども。

そういえば真横で笑の料理の手際を見ていたことってなかったなあとか眺めてみれば、さすがといった感じで、大根の千切りをするその手が少しぶれて見えるくらいだ。冗談ですすいませんと言わざるを得ないけども、それくらいに速いつてわけだ。

「見事なもんだなあ」

「そう？　普通、だよ」

普通ではないと思うけども、あんまり褒めすぎても笑が困る。褒められると照れる笑だが、それを少し繰り返すとそれはもう、張り切っちゃうのが笑って子なんだよなあ。あのカレーの量を思い出すだけで胃が重くなる。

リビングに戻ってソファに腰を落ち着け、リモコンでテレビのスイッチを入れると、映し出されたアナウンサー。春見たときは新人だった彼も今じゃあ立派に原稿を読み上げ、なんというかこう、初々しさみたいなものがなくなっているなあと思う。時の流れの早いこと、そのニュースの内容も昨日からもう進展を見せている。いわゆる逃亡中の窃盗犯を捕まえたとかなんとか、今日も世間は回っているのだ。

「にしても……」

そういえばと思う。

「笑、顔色悪いぞ」

「え？ 別に、なんとも、ないけど」

俺の声に振り返った笑は、確かにいつもどおりの表情をしている。よくは見えないが、顔色も特に悪いわけでもないかもしれない。気のせいだったかな……小首を傾げてテレビに向き直るが、やっぱりどこか腑に落ちない。

笑は子供の頃からそういうやつだった。とにかく何があっても隠そうとする、こういつちゃあなんだが、少しばかり姑息なやつだったんだ。後から怒られて、そして泣きながら必死に謝るようなやつだった。だからこそ心配になる。彼女が何かを言っとしたら、何かが起こった後――背筋に氷を突っ込まれた心地だった。

だけれど確認といって何ができるだろう。顔色が悪いことを確認して病院へ行こう……そういう選択肢もあるだろうか。笑がそういう人間である以上、俺がどうにかしてそれを見つけてやらなくちゃいけない。

「そうだな……行ってみるか」

何かあってからじゃあ遅すぎる。今日放課後になっても顔色が悪いようだったら、すぐにでも病院へ連れて行く。彼女が拒んでも知るもんか、ということだけ決めて、腰をずらして浅く座りなおすのだった。

朝食と登校準備が終わると大体二人ソファに並んでくつろぐ習慣がついた。特に決めたわけでもなく、俺がそうしていると笑が続いて、それが当たり前になったというだけだった。無言であっても会話があっても、とにかく静かな時間だ。

「しっかし、まだまだ暑いよなあ、もう九月なのに」

「ん、そだね」

「温暖化？」

「あれ、嘘だって、いう、説もある、って」

「へえ……まあ、よくわからんけど、こう暑いと信じたくもなるよなあ」

「ん」

小さな声はほんの一、二匹ばかりの蝉の声にかき消されそうなほど。それでも不思議と耳にはよく響くからわからないものだ。とにかく透き通ったきれいな声だった。

じーっと動かない。だらつと姿勢を崩す俺とは違って、笑は深く座って軽く背もたれに身体を預け、どこか筋の通ったいい姿勢をしている。育ちの差かなと思うけど、そんなに厳しい両親を持つてゐるわけでもないんだよな。不思議なもんだ。

「勉強、そういえば学園と違ってないか？」

「ん、そんなには。まだ、一年の、二学期、初めだし」

「そっぴやそうだな。一学期に何やってたか、くらいしか変わらないのかな」

「かな。それに、こっちの、授業、すごい、丁寧、だもん」

「そりゃあお前あれだ、学園の生徒に必要な説明までしなきゃ、ミソガクの生徒はわからんってことだろう」

そりゃあエスカレーターがほとんどの学園ではあるが、ちゃんと受験してちゃんと受かろうと思うと相当な成績が必要になるのもまた学園だ。学力と伝統、風紀なんかを求めて隣県から寮や一人暮らしで通つてゐる生徒もいるという。まさしく住む世界が違う、ってやつだ。

中学受験はそう難しくなかったんだよなあ。学力というよりは、頭ひねって考えるなぞなぞみたいなのが多かった。全部あだったらしいのに。

ミソガクの現状か、あるいは俺の思考を見透かしたようにため息をこぼす笑の横顔を見つめてみる。まだ日も高くないから陽光は深く差し込んで、その頬をやんわりと染め上げている。産毛がふわふわとしたみたいで、白く滑らかな肌。肩にかかった髪はそれらのすべてを反射するほど艶のある黒で、ここまで来ると育ちも生まれも

違うんだと思ってしまうほどだ。

「血が繋がってるとは思えん」

「ん……ん？」

「いや、なんでもないけど」

似てるっちゃあ似てるんだけど、何だろっこの敗北感は。

「なに、見てるの？」

「笑」

「あんまり、見ないで、ね」

「ぐへへへ、よいではないか、よいではないか」

調子に乗りすぎたと思えば時すでに遅し、笑の手が俺の視線を遮る。俺よりも少しばかり体温が低いのか、ちよつと冷たいのが気持ちいい。

これはこれでありだな、なんて思ったのがばれたか、笑の手はすぐに離れてしまった。拓けた視界には憮然と俺をにらむ笑の顔。

「怒っちゃったか」

「……別に」

「ほらあれだよ、視線に慣れるって意味でさ。俺が見てるくらいなら、少なくともいやってほどじゃないんだろ？」

「いやじゃ、ないけど。その、……恥ずかしい、から」

やだなにこの子かわいい。

戯れに言った冗談にも真面目に対応してくれて、まったくもっていい子だ。あれかなあ、異性に好かれる人間は同性に嫌われる——なんて、よく言うもんだけど。男が寄ってきたところで笑は怖がるのが精々だし、末は見えてる。

笑が人気者になるというのなら、ただ普通に返事をするだけでなれるはずなんだ。人は何だかんだ言った格好つけたところで、外見の美しいものに惹かれるものだから。あれだな、人間中身が大事、ただしイケメンに限るってやつだ。

「もったいないよなあ」

「……だって」

だってなんだもんとは言わせない！

なんて言葉が続くはずもなく、むくれてしまう笑の頭に軽く手を乗せてみると、彼女はすぐに表情を緩めてくれる。兄妹ってこういうもんかなあと思うと気分がよくなる。

「まあ、少しずつでいいよ。行こうぜ、学校」

「……うん」

前日と同じく昇降口で弁当を受け取り、そこで別れて教室へ向かう。

それにしても学校という場所は驚くべきほどに変わり映えしなくて、夏休みという長い空隙を挟んでも、本当に何も変わっていないのだともう実感してしまふ。すれ違う人も物も、少し色あせた感じが物悲しいほどだ。

それでもどこか違うと思ってしまふのは俺自身が変わったからなのだろうか。自分の意識で物事が変わる、なんてことをささやかながらこの短い人生の中で何度か経験してきたけれど、こうまで実感として目に映るのは初めてのことだった。恐らくこれ以上の変化はこの先もそうはないんだろうと思う……俺は人生で初めて両親を亡くしたのだから。

それでもやっぱり学校は変わらないのだ。すれ違う人は変わらない生徒たち、壁に少しだけ入ったひびだって以前のままだ。俺がここに長くいたのだと実感できるほどには。

教室のドアを見る。半年の付き合いの教室だけれど、教室なんてものはどこも本当に変わらない——なぜ、と思う。

教室の中もそう、これが一番変わらないと思う。集団がもうほとんどできあがっていて、その中で一人黙々と雑務をこなす律。変わらないと思う。

「よ、おはよ」

「おはよー」

シャーペンを放さないもののちゃんと顔を向ける律儀なところか。

「何してんの？」

「文化祭のね、色々あるんだよ、生徒会だから」

「はー……忘れてたわー……」

文化祭、なんて言葉は最近思い出したこともなかった。楽しみにしてたわけでもないし、こんなもんだろーなあと思っていたら、呆れたような顔の律だ。

「だろーね、一君なら」

「む……忘れるだろー、普通」

「普通じゃないよ、文化祭ってたら結構大きい行事なんだし」

「そうか……律が言うんなら、普通は忘れないんだな……」

「……もう」

怒る気力もないといった表情でため息をついて、そのまま机に向き直った。その上にはプリントが数枚散るように並べられていて、いくらかの文字が羅列されている。律らしい丁寧で几帳面で、それでいてどこか丸みを帯びた女の子らしい字だ。

クラスごとの出し物をまとめているらしい。すでに案を出しているところとそれ以外との折衝とか色々あるんだろー。うちのクラスはそんな律がまとめながらも案はまだ出ておらず、そもそもそれが出ていたところで俺が把握しているはずもない。というかまだ二期始まって早々、決まっているクラスのほうに圧倒的に少ないだろーに、どうしてこうも気が早いのかと思う。

並んだプリントの一枚を思い出したように取り出して、律は俺の前に突き出した。

「そついえばうち、留学生入れるらしいよ」

「ほう。今学期？」

「来学期。たぶん今日のホームルームでホームステイ先募集のプリント配られると思う」

「ふーん……意外と色々考えてるんだなあ、ミソガクも」

「失礼だなあ。ミソガクって別に成績悪くないんだよ。信君だつて一君だつて、受験勉強くらいはちゃんとしたんでしょ？」

「……そういえば……」

したような、そうでもないような。煮え切らない返答の俺に、やはり呆れ顔を見せる律である。

しかしミソガクの成績が悪くない、とは初耳だつた。俺や信が通つてるといつ時点で既に底辺だと思つていたんだが、考えてみれば律の言うとおり、受験勉強はちゃんとしていたという記憶がかすかにある。本物の底辺はそれすらやらないだろうし……それに俺だつて赤点をとつてるわけでもないし、こうして二年の教室にいること自体が勉強についていけている何よりの証拠だ。

ふむ、と考えて目の前の少女の存在に気づくのだ。面倒見のいい優等生の存在が、俺のような劣等生にとつてどれだけ救いになっているのか——まあ言葉にはしないが、胸中で感謝はしておこう。

「どんな人が来るのかなあ。英語とか話せるとなると、この学校じゃあ相当限られてくると思うけど」

「笑、確か少し話せたと思う」

「へー。すごいなあ、じゃあ一君、ホームステイ先に応募してみたらず？」

「うーむ……正直疎外感に殺されそうな上、笑のコミュニケーション不全でホームステイは跳び足すぎるだろう」

「あー……確かに。でもま、考えてみたらどうか」

ホームステイ、ねえ。

海の方こうの世界なんてのは、本当にどこか遠い世界のことには過ぎないのだった。あるいは画面の方こうと言ってもいい。俺にとつて海外なんてのは目と耳でつかい事件だけを把握するだけの、そう、ただの芸能界と変わりはないのだ。だとしたらホームステイに来た外国人は芸能人だろうか——馴染めるわけがない。

そんな内心の喻えに満足しつつ、律には「そうだな」と返しておく。正直なところ、少しだけ興味はあるのだ。芸能人に会える、っ

ていうなら、誰だって会ってみたいとは思っものだろう。

「それで、留学生ってどこの国から？」

「ほら、ここ、ここ」

律の指が指すのはプリントの中央辺り。「オーストラリア」、とある。

「あー……こういうときってあれだよな、こういう予感って当たるよな」

「へ？ なにが？」

「近いうち来るだろうなあ……電話とか」

「へ？ え？」

オーストラリア、っていったら心当たりはある。そりゃあ向こうにだって学校はいくらでもあるんだろうけど、なんというか、嫌な予感ってというのは漠然とあるもんだ。そんな予感ばかり当たるのが人生ってやつで……ままならないが、そんなものだと思う。

ただ、嫌な予感とばかりは言い切れないのは確かだった。いつまでも逃げてばかりはいられないという使命感か、あるいはもう一度会いたいという願いでもあるか——とにかく、もし本当に彼女が来るといふのなら喜んでやりたいのも確かだ。

プリントに表記された学校にも覚えがある。確かにここは——静香の通っている学校だったはずだ。けれども、

「いや、なんでもない」

「ふーん……？ まあ、言いたくないならいいんだけど。というか言いたいけど言えないって感じ？」

まさにそれだ。言いたくない、というわけでもないんだけど、わざわざ言うようなことでもない。家庭の問題だ、といえばそれまでのことだった。

律も弁えたもんで、やっぱりそれ以上踏み込んでこようとはしなかった。

「それより文化祭、一君は委員長権限で一つは案を出すことを命ぜよ」

「……職権の濫用は反乱を招くぞ」

「反乱なんてしたって……一君じゃあなあ……」

面倒見がいいのは真面目なことのみ、それに反することに関してはどこまでも辛らつなやつだった。泣くぞこのアマ。もしくは泣かせるぞ。……鳴かせるとかどうだろう。

ないな。

「まあ、喫茶店とでも言っておこう」

「うわあ……やる気の欠片も見当たらないね……」

「ないものを見ることはできないだろうが！」

「開き直らないでよ！」

ともあれそういった具合に文化祭におけるクラスの出し物に「喫茶店」を提案し、事なきを得た俺であるが……なんだろうこの敗北感は。発案した瞬間の信の「あつたまわるー」というツツコミが原因だろうか。お前に言われたくないんじや。

結局文化祭の出し物については保留とされ律の心労はいまだ行雲流水、彼女の心情など知ったことかと言わんばかりだ。それに加えホームステイの問題、体育祭の準備もあり、彼女も結構に疲れているようだった。それもそうだろう、いかに副会長とて体力があるわけでもなし、むしろ疲れないほうがおかしいくらいだ。

というわけで信と俺は放課後、示し合わせるように律に寄っていつて遊びに誘った。生徒会今日は休みらしいからちようどいい、笑も誘おうという流れで同意を得られた。

一年の教室は久しぶりだなあと話に華を咲かせつつ笑の教室に着くと、適当な女子生徒をつかまえて笑を呼ぶように頼んでおいた。

「つまんねえなあ」

それに対しての信のリアクションがこれだ。殴る。

「ほんと。こういうときはさあ、ちゃんと一君が突入しないと」

「だよなー。空気読めよ、一君さあ」

決めた殴る。もう誰にも俺を止める権利はない——！

「兄さん？」

「おお、笑、ちょっと待ってる俺はこいつを殴るんだ」

そうとも敵は目の前だから見逃してやる道理などないのだ！

とはいってもなぜだろう、笑の前だとどうもそういったノリというか、「はっちゃける」とでもいうんだろうか、羽目を外そうと思えなくなる。いいことなのかそうでもないのか、信に向けて割と本気で振り上げた拳を下ろした。振り下ろしてもよかつたんだがまあ、今日のところはこの辺で勘弁してやる。

三流悪役のセリフを寸でのところで飲み込み、改めて笑に向き直ると、きょとんとした表情のまま立ち尽くす彼女に提案を試みる。笑のことだ、きっと誘いを断るようなことはないだろうと思う。

いや、断れないといったほうが正しいだろうか。きっとこれもストレスの原因にはなるんだろうけど、律のことも放つてはおけないし、かといって遊びに出て夜遅くなればその間笑は独りだ。連れて行くしかない、きっと正しくはないんだろうけれど。

けれど笑は曖昧に頷くのみで、「一緒に行こう」とも言ってくれなかった。それに焦れるかのような信の大仰な声に少し救われる。空気を読まないやつだけど、こういう明るさには時々救われるんだ。「よっし、じゃあ今日ばかりは律の希望も聞いてやろう。寛大な俺に感謝するがいい」

「信君ありがとう！ あたしとってもうれしいよ！」

「……いや忘れてくれ」

「まあ、でもありがとね。確かにちよつと疲れてたかも」

「なんだ、殊勝な律を見ると寒気が走るんだが」

「……信君に期待したあたしがバカだったよ」

ともあれ律の疲れも本物だ。

本当に切羽詰ったときに弱音を吐けない人間は、弱い人間だと思う。人が背負える荷物なんてのは、本当にごく限られたものでしかないからだ。俺はまだ笑からほとんど弱音を聞いたことがない——

彼女は弱い人間だと思う。

そういえば顔色はどうだろうかと思い出して見たが、やはり彼女はそこでも「弱音をはかない」。それをどう見るか……俺には皆目検討がつかなかった。

律の笑顔を見て思うのだ。人との関わりを積極的に求めて、それに癒しを覚えられる人間になればと。

「笑、いいか？」

「……ん、いいよ」

「笑はどうする？」

「……先に、帰ってる、ね」

「そっか」

無理強いしても連れて行くべきか、なんて思ったけれど、やっぱり無理はさせなくなかった。独りになるのがいやだとはいえ、同じように他人と関わるのが苦痛なら、せめて授業とか俺とか、そういう最低限のコミュニケーションに慣れてからでないと——そんな判断をしたからだった。

「……遅く、ならない、ように、ね」

「わかってるよ。ご飯までには絶対帰るから」

「待ってる」

俺は求められている——その言葉に、心底安心してしまったからだった。

第二章―感情と発露―5

夏空の下 ―第二章 感情と発露―

↓ 4 t h e p i s o d e ↓

「ありがとうございましたー」

開いた自動ドアから出て行く客に向けて一言、頭を下げて送り出す。こう言っちゃあなんだけど、その言葉はどちらかというと客に向けたものでなくて、なんというかこう、達成感から出てくるものだ。

元々金に執着があるわけでもないし、店に愛着をもっているわけでもない。そりゃあ金欲しさにバイトしてるのは確かだけれどそれは生きる手段であって、決して目的にはなりえないものだ。

とはいえ今日も元気に働いている。少なからずこうして達成感を感じている以上、少なくとも苦痛というわけではないはずだ。

――ストレス、という言葉に少し敏感になった。溜めてはいけないものだ、改めて実感している。

客足がひと段落したのは午後八時半。九時からの平田さんが来るまでの大学生にレジを任せて、俺と子々は事務室に休憩に入った。

子々とは土日、それから火曜日に一時間だけシフトが重なっている。そのおかげか、幸か不幸かこの一週間でそれなりに話せるようにはなっていた。やっぱり第一印象だけで物事を決めるのはよくないらしい、そりゃあちよつと図々しいところはあるけど、基本的にどこか気遣いのできる子であることもわかったのだ。

小さな白いテーブルをはさんだパイプ椅子をぎしっと鳴らして、目の前の子々がため息をこぼした。

「……はあ、疲れた」

「……疲れてるようには見えないぞ」

「疲れてないもの。休憩入ったら疲れたーって言うのが常識よ、常識」

「そんなもん聞いたことないわ」

「あたしも初めて言ったー」

とまあ、これくらいのカ目つ気があることも追記しておこう。

「一もだいが慣れたわねー。三日目くらいまでなんて、仕事してるのか慌ててるのかわかんなかったのに」

「バイト自体初めてだったしなあ……まあ、子々も褒めるんだということがわかって安心した」

「……バカにしてる？」

とんでもないと手を振るが、子々はしばらく俺をにらんだままだ。手元のデニッシュパンをほおばって、それを口元に置いたままむぐむぐと咀嚼する。相変わらずというか、そもそもコンビ二の菓子パンに高級感なんざ求めちゃいけないけど、安っぽい味だなあとしか思えない。まずいとは決して言わないけどさ。

子々もまた諦めたようにメロンパンをかじっている。とはいえ何故だろう、子々は休憩時はいつもメロンパンだ。

「……好きなのよ、メロンパン。悪い？」

「いや、別に」

「ちっ」

舌打ちしやがったよこの厨房が。

「あーあ、あんたとお姉様の血が繋がってるのがいまだに信じられないわ」

「俺だつて信じられんわ」

「……あ、そう」

「そうとも。何が違つて頭の出来が違いすぎる」

「あんたは……そうね、頭良さそうには見えないわ」

「言われなくてもわかつてることを改めて言われるその怒りを、この小さな女の子に身をもつて教えてやりたい。だが小さな女の子の手前、ここは怒りを飲み込む大人になつてやるうじゃないか。」

「怒らない辺り意気地もなし、と」

「……張り倒すぞ」

「張り倒してみなさーい、とか言つたらほんとに張り倒しされそうだから謝つとく。ごめんネ」

「謝られてる気がしないのはなんでだろうなあ」

「謝る気がないものね」

ああ、こんなにも女の子を殴りたいと思つたのは初めてです。

ともあれ本当に手をあげるべきときは他にある、とよくわからない自制をし、缶コーヒーをあおつた。缶コーヒーってなんでだろうなあ、こんなやたらと甘いのは。子々も同じメーカーの同じカフェオレ、というより、俺が子々に合わせてみたわけだが……駄目だ、割に甘党を自覚してる俺でもきついといえるレベルに達してる。

そんな俺を見て、缶を揺らしながら子々が笑つた。

「女の子は甘いものが好きなんですって」

「へえ」

「女は糖分、男はカロリーを取らなきゃってことなのかしらね。正直さっぱりわかんないし根拠もないけど、原始的な本能って結構残つてるって思うと、ちよつと面白いわよね」

「女がちよつとの怪我でギヤーギヤー言うのは、怪我とか病気に早く気づくためとか。内的な痛みには強いって聞くんだけだなあ、あれはどうも不思議だと思う」

「そうそうそういうの。男が家を省みないのは文字通り女に丸投げ、狩りに集中するため、とかね」

実際そんなのが学術的に証明されてるかどうかなんて知らないけど、そういわれると「へえ」と思えるくらいの説得力はある。不思議なもんだ、それが確かにちよつと面白いと思う。

子々は少し他人と感覚が違うんだろう。人とずれた感性をしてるからこそ、笑というずれた感性に惹かれたりもするんだ。

それを「変だ」と言える感性を、俺はしていない。

「お姉さまのことはちゃんと見てなさいよ」

「……ん？」

「女が弱いのはね、あくまで家を守るためのよ。家が崩れることを知っていれば、女はどこまでも強くなれるの」

「……何かあったのか？」

「いじめにあつてたのよ、中学時代ね」

だからこそ、その言葉には閉口した。

憤る余裕もないくらいに頭の中に疑問符が溢れかえって、やがてそれを飲み込むように、あるいはようやくといわんばかりに怒りが湧いてくる。

愚痴つても仕方ない、憤つても仕方ない、思つても言葉が漏れ出てくる。

「なんであいつがいじめなんかあわなきゃいけないんだよ。何も悪いことやるようなやつじゃないだろ」

「あたしに言つても仕方ないじゃない。もう終わったことなんだから」

「だからって……！」

声を荒げそうになって、子々の視線で踏みとどまることができたけれど舌打ちだけは止まってはくれず、彼女の視線がより一層鋭くとがる。年下とはいえやつぱりそれなりの「社会経験」をしてるんだと思わせるほど、彼女のそれは重い。

だからこそ、という少し変な気はするけど、ほとんど事を荒立

てることなく冷静さを取り戻すことができた。「悪い」と謝れば、子々は「あたしだって怒るもの」と気にした様子もない。

「というか、怒らなかつたら怒ってたわ」

「……なんだかな」

「言つとおりよ。お姉さまは何一つ悪いことなんてしてない。ただ愛想がないだけで、どうしてあれだけ人を傷つけられるのかしらね」

まったく、と心から同意できなかったのはなぜだろうか。

——俺もあるいは、という負い目。いかな理由があるにしろ、喧嘩することにはためらいのない人間だったから。

「……いい、一。原因がいくらお姉さまにあつても、それがいじめでもいい理由にはならないのよ」

「……ああ」

「お前むかつくから殺す。実行したら刑務所送り。それと同じ」

「だな」

「学校つていうある種の『治外法権』的な場所と、教室——クラスつていう閉鎖的な環境、加えて被保護者という立場から逃れられない状況が、それをどこまでも軽薄にしちゃう」

治外法権——言い得て妙、と思う。

未成年が煙草・酒をやつても停学・退学程度。場所によつちやそれすらなくて、親に連絡が行くことすらないのかもしれない。校内暴力だつて似たようなもんだ。

笑という身内が被害者だからだろうか、余計にその問題を身近に感じて、ようやくその重要性、異常性に気づくことができる。それくらいに「いじめ」というものは深刻だ、と思う。

なぜか——今の笑を見ていれば誰だつて理解できる。

「『いじめ』つていう言葉自体がそもそもおかしいわ。そりやある程度まではいたずらとかの域を出ないものではあるし、被害者の裁量次第でその傷の深さなんていくらでも変わるからつて……暴力振るつて怪我したら、それつて立派な犯罪じゃないの」

「怪我……したのか？」

「軽くあざができた程度で、それもちょっとしたら消えちゃったけどね。でもやっぱりあたしは犯罪だと思うわ。だってお姉さまはまったく抵抗もしなければ争う意思もない、『下』の立場にいたんだもの。喧嘩じゃないわ、いじめ——犯罪よ」

言葉を変えただけ。ただそれだけで途端に背筋に冷たくのしかかってくる。

それをまた言葉を変えるだけ、加害者は何の意識もなくそれを犯してしまう。

笑に向けて。

「むかつくのが耐えられないから暴力に走る、なんて、理性をもたないケダモノじゃない。大半の『喧嘩』だってそうよ、わざわざ自分の品性を貶めてるのよ」

「……年下とは思えんな」

「腹に一物、っていう人間は人より多く見てるつもり。だからかな、多少の嘘とか負い目には、結構敏感になったわ」

誇るでもなし、俺の悪寒を気に留めるでもなく、平素な顔でそれを言っただけのあたりが器の違いを感じさせる。

お嬢様、という漫画の中の言葉は、こいつのためにあるのかもしれない。

「……というか、終わったって」

「ああ……あたしのお父様、親バカなのよ。……わかるでしょ？」

「こええなあ……」

曲がりなりにも一経営者、そうも無茶をするとは思えないけども「親バカ」と聞くとどうも納得できてしまうあたりが尚のこと恐ろしい。それでなくとも中学生だ、「学園長の娘」というだけで及び腰になってもおかしくないはずだ。何しろ伝統ある進学校で、その上「結城学園」だ。これ以上の指標もない。

そついうところにまでしっかりと頭が回るくせ、笑が高校へ上がってもまだ中学生。未恐ろしいものだため息がこぼれた。

「……ま、だから気をつけておいてね、とだけ言いたかったの。あんたがお姉さまにベタベタくっつのは死ぬほど嫌だけど、背に腹は代えられないもの」

「死ぬほどって……どこまで本気なのやら」

「どこまでも本気よ。お姉さま、素敵なもの」

「……素敵、ねえ」

どうも見誤ってる気もするが、人を慕う気持ちなんてそんなもんだろうと、コーヒーと共に言葉を飲み下す。

「誤解がありそうだから言っとくけど、実際学園内で何かをどうこうできるほど影響力はないわよ。ただ生徒側が過剰に及び腰になってるだけで」

「……それを影響力っていうんだよ」

「ふふ、それに気づかないのも中学生だからかしら。かわいいものよね。お姉さまいじめてたのは憎たらしいんだけど」

「中学生が同年代を『かわいい』とか言えるあたり、お前も笑以上になずれてるよなあ」

そしてそれがあながち間違ってもいないあたりが更に。

所詮は子ども——よく聞く言葉だけれど、俺たちの前には両親とか大人たちが立っていたから、その奥にある現実が見つらいだけなんだよな。たぶん。だからして、ある程度現実を知ってしまえば、後は「人を見る目」とか、そういった感覚（才能と言っている）如何で大人も子どももほとんど区別はないと思う。

現実……だからこそ、嫌な言葉だと思う。

「……休憩終わり。さ、はりきって行きますかー」

「子々ももうちよつと客相手にへりくだったりできればなあ」

「それはあたしじゃないわ」

「……開き直るなよ」

翌日、学校でそのことについて信に話してみた。昼休みののか

な屋上でのその問題に対しての反応、第一声が、

「なるほどなあ」といったものだった。

何かを考えているようでもあるが、いつもの軽薄な態度が手伝つてどうも間抜けに見える。だが落ち着け俺、相談してるのはこっちだ、笑つてはいけない。

なにしろ波乱万丈な人生を送っている信のことだ、いじめとかいう問題にも少しは詳しいんじゃないかとの見立てだった。実際その表情にも決して楽観はなくて、少なくとも俺の心配に対して真剣に向き合ってくれるということだけはわかった。

とにかく一度作った輪を崩すことは絶対にしない。信はそういうやつだ。

「あの子も確かななあ、冷たいもんなあ。その上勉強もできて美人となりや、そりやあ逆恨みだの妬みだの、あってもおかしくはないな」

「そりや……まあ、身内びいき、なのかなあ」

「お前は間違いなく身内びいきだな。それはそれとしてだ……要するに、中学生だの高校生だのつてさ、“基準”がわかってないんだよ。まだ全然自分の周りの荒さに気づいてないからさ、そこにある自分の荒さにも気づいてないんだ。そこで擦れて傷つくやつにも、全然気づかない、気づこうとしない」

何しろ守られてるから。信はそう続ける。

——「俺は守られてないからよくわかる」。

言外にそう加えていることはよくわかった。それもきつと事情を知る俺だからこそその思い込みも多分に含まれているだろうとは思っ……けれど。

信はいわゆるDVに遭っていた人間だ。家庭内暴力。今では身体が成長したからそれはない。おおよそ多くの被害者はその家庭環境で身体を鍛えることもできず、精神的な負荷から「傷められる自分」に違和感を覚えなくなったり、既にそのときには親が絶対的な存在になりあがっているというが——信は例外だった。勝てる、と思っ

たときに即座に反撃に移した。痛めつけられ、痛めつけ、そういうことに慣れている人間だ。

だからこそこの“コネ”なんかもあると聞いたことはあるが、そこは今は問題じゃない。

問題は笑のこれから。過去を置き去りに、今をどう対処していくかだ。

「……簡単に言えば二つ、だな。加害者を徹底的に叩くか、笑ちゃん自身が変わるかだ」

「……どっちも難しそうだなあ」

「からめ手もなくはない。強い協力者を得ること、だ」

「俺ら別に強くはないよなあ」

「ふはははは！ 甘い！ 初孫のように甘いぞ！」

初孫は別に甘くはない。甘いのはそれを前にした祖父母だ。……

という突っ込みはあえて喉の奥に閉じ込めておこう。シリアスな空気からの唐突な転換についていけなくなっただけ、とも言っ

して、

「何がだ？」

「生徒会副会長。決して天才タイプでもないのに学年五十人のうちには入る成績上位者。スポーツも苦手じゃなくて、人となりのよさから多くの友人に恵まれた——それは誰だ！」

「……誰だその完璧超人」

っていうか「生徒会副会長」という肩書きを持つのは一人しかない。

「……律か」

「盲点だよな。自分で言っただけ」

「まったくだな。あいつ、肩書きだけを見るとそんなすごいんだな」
「びつくりだ」

「ああ、びつくりだな」

失礼なことを言っている、とは思っていない。……嘘だが。

ともあれこの場にいない律の悪口もそこまで、とりあえずのこ

るサポートやら何やらを頼んでみてはということになった。副会長ともなれば全学年それなりに顔は利くはずだ——という信なりの見立てだ。

が、それとなればいわゆるコネと言えそうなものはそのクラスの「学級委員長」といったものにあたるんだろう——もしもそれが“グル”だったらという懸念はあった。

いや、そもそもいじめが始まってるわけじゃない。何もかも不確定、何も無い（かもしれない）今だからこそ、全力でサポートしてやらなくちゃいけない。笑を傷つけるものを、今だけは許すことはできない。

「よし、んじゃあそういうことで放課後、俺から話しくわ」

「ああ？ そんなくらい自分で話すよ、俺から頼むんだから」

「そういうことじゃないだろうが。筋通すのも勝手だけど、そんな理由で笑ちゃんほったらかして、筋を通すなんて言わないだろうが」

「……お前」

「見直したか？ はっは、これからは俺のことをちゃんと崇めるよ」

「……意外と考えて生きてるんだな」

「失礼だなてめえ」

放課後、信は有言実行とばかりに律を連れ出した。あまり他に聞かせたい話でもないから、人気のないところか、あるいは静かな喫茶店にでも連れて行くつもりだろう。

信が行動するのなら俺も、と教室を出て、向かうは笑のいる教室だ。きっと誰かと仲良く話し込んでるなんてことはないだろうけれど、せめて独りであって欲しくはないと思う。

……期待が期待で終わることもある程度わかっていたのかもしれない、笑は誰からも誘われることなく、誰も誘うこともなく、無言で教室から出てくるところだった。せめて入れ違いにならないだけマシだった、ということが無理やり納得だけをして、その背に声を

かけた。

「……兄さん？」

「おう。一緒に帰ろうな」

「うん。でも、いいの？」

小首を傾げる例の仕草。慣れたとはいえ、やっぱり随分かわいらしい。

「いいんだよ、あいつらは勝手に遊んでるから。笑ちゃんといると癒されるし」

「……かえろ、か」

スルーにもうん、慣れたとはいえ、やっぱり随分堪えるんだよ。ともあれこうして「普通」に話してる笑が意外なのか、通り過ぎていくクラスメイトが少しだけ訝しげにしていく。あるいは素直に感心している様子の子もいれば、「なんでこいつには」と妙な視線を向ける子もいる。

笑の立ち位置の微妙さが見て取れる。元々が元々だから、「惜しい」と思ってる人も多いんだろう。あるいはだからこそ、という人もいる。その上この子——俺たちに起こったことについて、知らない人のほうが少ないはずだ。それにあわせた転校だということも、たとえば言わないにしても容易に察しがつく。

本当に微妙だ。人間関係に慣れてたって、どう振舞っていいかわからないくらいに。

無表情の笑を伴って歩く廊下は放課後の喧騒で包まれている。当たり前前のことだけど誰も笑に気を留めない、精々が「兄妹一緒」が珍しいといった興味くらいだ。

「……笑、今日飯なに？」

居たたまれなくなった、というとな話だけど、とにかく沈黙に耐えかねて選んだ話題がそれだった。無難すぎて泣けてくる。

けれど笑は律儀にもしっかりと考え、しっかりと答えてくれる。

「ゴーヤ……と、もやし、豚肉の、しょうが、焼き。それから、冷奴、冷製コンソメ、スープに、ピラフ……かな」

「相変わらず凝ったもん作るなあ」

「そんな、たいそうなもの、じゃ、ないよ」

俺からすると、そもそも冷製スープという時点でよくわからない。冷たいスープという発想自体ただの知識でしかなくて、どうして作ったらいのか想像も付かない。ただ冷やせばいい、というわけでもなさそうだ。

ともあれ通学路もだいぶ歩いて二人きりになると、笑の肩から緊張が抜けていくのが見て取れる。彼女のクラスメイトのうち、一体何人がその強張った肩に気づいているのだろうか——それを期待することが、きつと間違ってるんだろうけど、でも。

そうして他愛もない話をしながら家に入ると、リビングで電話が鳴っていることに気づく。笑と話がしたかったが仕方ない、彼女には勝手にするよう伝えてリビングへ駆けた。

とった受話器から聞こえた第一声。素直に驚いた。

「もしもし、武内さんのお宅でしょうか？ 一君、いらっしやいますか？」

——知ってるだろうに、今この家に、俺と笑しかないことくらい。

「……身内、で合ってるよね、牧野静香ですけど。……もしもし？」

ああ、返事を忘れてた。しないと、ちゃんと、「俺だよ」って。けれど隣に笑の気配。何も言えない。

「あ、ははーん、隣にいるんだ、……はーくん？」

そして、静香にそれが伝わってしまった。

何より悟られてはいけなかったはずの、「笑がいるからお前とは話せない」なんて、まるで静香をないがしろにするような発想を。

だからあつてはならない。笑を傷つけるのは絶対に間違っているけど、静香に関してそれを貫くわけにはいかない。

「……悪かった。ああ、俺。久しぶり」

「……兄さん」

俺を呼ぶ笑を、軽い手振りで追い払う。素直に従ってくれはしたけれど、罪悪感が募る。

「あはは、久しぶりだねえ。その声、うん、全然変わってないや」

「ごめんな、今まで連絡できなくて」

「そっちも大変だったんでしょ？ 気にしてない…… っていうのはまあ、ありえないけど、うん、謝ってくれたからいいや」

「相変わらずだな、そういうところも」

笑はキッチンに入って料理に入ったようだ。俺の話を聴かないように、あるいは気にしないように、何気なく料理に向かっている、ように見える。

電話の向こうの息遣いは懐かしさに溢れたものだった。笑とよく似たソプラノも、静かなその吐息も、そのくせ元気のいい快活な様子もまた、まったく相変わらずだ。

「多分言っちゃったよね、平田さん。お母さん、死んじゃったんだ」

「……ああ」

「お父さんは知ってのとおり、というかはーくんのほうが詳しいよね」

「ごめんな」

「あやまんないで、今度はね。それでさ」

続く話もまた予想通り。

律にそのプリントを見せてもらったとき、なんとなくわかったんだ。

——ああ、来るんだ、って。

「へへ、留学資格、とっちゃったぜ。ホームステイ、ちゃんとしていってよ！」

そしてなんとなくわかってたんだ。

——迎える準備、それから覚悟。笑は無理だとしても、きっと俺はもう、できていたんだって。

さればこそ、俺は笑にとって「変わってしまった」んだろうと思う。静香からの電話の後から、笑への態度は目に見えて硬化、あるいは過剰なまでに軟化してしまったと、自分でも思っていた。突き放すようなことを言ってみれば、たまにうつとうしいくらいに構ってみたりと、われながら拳動不審もいいところだ。

余裕がなくなつたといえばまだ救われる。要するに氣遣えなくなつた、物事が見えなくなつた、「できたことができなくなつた」だけなんだ。静香のことは言い訳にもならないし、する気もない。

静香から何かしらの連絡が来ることはわかつていたはずだ。何しろ彼女は笑の唯一の「姉」――母親は違うけれど、確かに血の繋がった姉妹なのだから、父親が死んだとなればそもそもこちらから連絡するのが筋だった。その上母親まで……俺たち「兄妹三人」全員が両親を亡くしてしまった形になる。その上静香は過去故郷を離れて遠く海の向こうだ、そりゃあ友達なんかはいるだろうけれど、本当の意味で頼れる人間がどれほどいるだろうか。

だから、静香から伸ばされた手を、絶対に振り払うわけにはいかなかった。今となつては事情を知る数少ない人間だ。救うだなんて大それたことを言うつもりはないが、どんな事情があれ彼女の味方でありたい。

――それが笑に背を向けることになってしまったとしたら。

だからここ最近の俺は、本当に目に見えて拳動不審だったと思う。……子々からの忠告を忘れてしまつくらいに。

夏空の下 ―第二章 感情と発露―

↓ 6 t h e p i s o d e ↓

文化祭が近づいている。もう全てのクラスの展示物が出揃い、準備もたけなわといったところだ。その時点で校内は既にお祭り騒ぎ、下校時刻を過ぎても大半の教室ので灯りが落とされることがないような状況だ。

うちのクラスの展示は喫茶店。やる気のない俺がやる気のないままに提案して、他にめばしい提案もなく決まってしまった次第だった。……が、やる気のなさとは反比例してその展示の面倒さときたらなかった。検便はしなくちゃならないし、火の管理はかなり厳密にしなきゃいけないし、コーヒ―、紅茶の淹れ方やメニューの勉強などなど、やることは本当に山積みだ。

笑に構ってやる時間も、割と減ってしまったと思う。時折信や律が気遣ってくれるがそれにも限界はある、やはりクラスをないがしろにしているというわけじゃないから。笑がこのお祭り騒ぎの中どんな思いでいるのだろうと考えると、やっぱり居ても立ってもいられなくなるのが本音だけど、そんな逸る気持ちを抑えてクラスのこ

とに没頭した。

笑のクラスはバルーンアートをやるらしい。手先の器用な彼女は実際に作る役に回ると言うが……正直、押し付けられたとは思えないような状況を、何度か目にしてきた。「もつと早く作れ」とせつつかれたり、上手くできても誰からも見向きされなかったり、そういうところだ。

——これで気づかなかった俺が、本当にどうかしてたんだと思う。律に相談して「手を打った」と安心していたのかもしれない。その後一月何もなかったから、本当に何もなかったと信じていたのかもしれない。

気が緩んでいた。そうとしか言えないし、言い訳もできない。本当に気をかけてやるべき俺が、忙しさ、そして静香の気持ちをつい「言い訳」にして、笑から目を背けてしまっていたんだ。どれほど笑が傷ついているか、悲しんでいるか、苦しんでいるか、気づいてやれなかった。

文化祭の前日、ほとんどのクラスが準備を終えた黄昏時、発端は血相を変えて教室に走りこんできた浩の姿だった。……同じ学校だということに気づいたのは随分前だけれど、実際に話す機会はあまりなかったから、その訪問は意外だった。

その第一声。「笑ちゃんが危ない」。血の気が引いた。

教室を転がるように出て、背後から聞こえてくる声は内容が上手く聞き取れないままどこかへ消えていって、俺はそのまま言われた場所に飛び込んでいった。特別教室棟、理科準備室の隅に、笑は蒼白の顔でうずくまっていた。それが一番に目が入って、他には知らない男が二人と女が一人、そして信の姿があった。それだけで状況は飲み込めてしまつて、怒りと、自嘲と、悲しみと、不安と、それからほんの少しの安堵が胸に混めた。

まず俺を突き動かしたのは怒り。無言のまま男の二人に突き進もうとしたところを信に止められ、次に自嘲に舌打ちをして、蒼白の笑に不安と悲しみを覚えて、多少衣服が乱れてるくらいで他に傷も

ないところに安堵した。すぐに彼女に駆け寄った。

おそらく笑をいじめていた彼らに關しては心配いらぬはずだ。

信が言っていた手段の一つ、彼が自ら「徹底的に叩く」を実行する。だから背を丸める笑の肩を抱いて、その顔を覗き込んだ。脂汗が浮き出て、そのくせ身体がとても冷たい。その冷感が伝わったかのように、途端に俺の身体が冷えていくのを感じて、胸がすんとどこかへ墮ちていくような心地になった。

「大丈夫か、笑」

かすかに頷くのみ。返事はかすれてしまつて聞こえない。明らかに様子がおかしかった。

「立てるか？」

早くどこか安静にできる場所に――保健室か。あせつてしまつてよくわからない。

けれど笑は動かない。動けないようだった。

そのうちに額に汗を感じて、俺がどれだけ焦燥としていたか自覺できた。けれどそれをどれだけしつかり認識していたとて、どうにかすることだけはできなかった。不安が募つて、募つた不安の分だけ行動が鈍つてしまった。まるで背に巨大で鈍重な何かを負つてしまったように、その場から動くことができない。

言葉だけが無意味に募つていく。――大丈夫か、大丈夫だ、運んでやるからな、すぐ誰か呼んでやるから、――行動に移さなければ無意味にもほどがある。

そんな俺を励ましたのは事が済んだ信の声だった。

「落ち着けー！ お前が一番落ち着いて、笑ちゃんに声をかけてやらなきゃいけないだろうが！」

それだけで心に芯が通つたのを感じた。本当に、ただそれだけで身体がすつと軽くなつたのだ。ありがたいという言葉じゃすまないけれど今はそれどころじゃない。頷き、信の言葉に耳を傾けた。

「俺は保健室へ行って先生呼んでくる。そのまま救急車も呼んでおくから、いいかー、お前は落ち着いて、ここから動くな。笑ちゃん

に声をかけてやれ」

「……わかった」

落ち着け——落ち着け。自分にはそれだけ言い聞かせて、笑にはそれよりずっと優しい言葉を聞かせてやらなくちゃいけない。

走っていった信を見送り、笑の上半身をひとまず抱き寄せて俺に預け、少しでも楽になるよう願った。どういう状態なのかも、どうしていいかもわからない。ただそれだけしかできなかった。

「笑、笑。大丈夫だからな。俺が、ちゃんと助けてやるからな」

「……に、さん」

言葉が小さくてよく聞こえない。それがとてつもなく悲しい。

けれど不安は隠せ。悲しみもだ。ただ彼女に慈しんで、優しく撫でてやらなくちゃいけない。

「動いちゃだめだぞ。ゆっくり、安心してればいいんだ。悪い奴ももういないから」

「……ん」

表情の動きすらかすかなものだ。

……涙が出そうになる。でもいけない。抑えられるものだろうか。抑えなきゃいけない。色々な思いが胸を去来して、もう何がなんだかわからなかったけれど、ただ一つだけ、笑を安心させてやるという指標が俺を保っていた。

ふ、と息をつく。時間の感覚さえなくなって、気づけば保健の先生——校医という立場らしいけど——が駆け込んでくるところだった。生徒にも評判のいい美人の先生、その表情が笑の様子を見ただけで曇ったから、その異状に気づくことができた。

「……布団を持ってきたから、それをたたんで背もたれにして座らせて、そのまま動かさないで。いい、少し診るけど、極力動かさないほうがいいから」

「はい」

まず先生は衣服を緩めて……笑、そういえば制服をぴっちり着てたからな。苦しかったのかな。気づいてやればよかった。

よくはわからないが、表情と心音を見た先生は、いくつかの質問の後懷からビンを取り出し、そこに入っていた錠剤を笑の口に放り込み、半ば無理やりにあごを動かして嚙み砕かせた。持病やアレルギーはないか、胃腸に異常はなかったか、他に薬は飲んでいないか——妊娠などはしていないかなんかを聞かれたけど、何の薬だろう。その間に言われた通り布団をたたんだ。そこに笑が座らされ、先生は「ゆっくり、深く息をして」とささやく。

そして、もう終わったとでも言うように、あるいは俺がしたよう自分を落ち着かせるべくため息をこぼした。

「この場ではこれ以上できることがないから、ひとまず救急車を待ちます。焦ってどこかへ運ばうとしちゃだめ、安静にさせています」

「はい」

「大丈夫、怖いものじゃないから」

——嘘だ。怖いものだとその顔が言っている。でもそれを俺に伝えられないよう、上手く隠してくれていることはわかる。さすがだと思ふ。

だからこそ、俺もそれを笑に伝えないようにできることができたと思う。

「安心して、大丈夫だから」

そして笑にもちゃんと声をかけてくれた。思ふ。女性の声は、やはり優しい。胸を撫でるような温もりがある。

保健の先生ってどうしてか気安いから、少しばかり「医者」という肩書きが見えづらくなってしまうけど、今回この場で改めてそれが間違いだったとわかった。本当に頼りになる。いるだけで心が落ち着いていく。

ひとまずできることはしたんだという認識——それがどれほど救われるか。

やがて笑が一つだけ声をこぼした。

ごめんなさい、と。一つだけ。

救急車で搬送された笑はそのまま検査入院することになった。俺は家に戻るよう言われた。

夜空が暗い。星が見えない。重くて潰されそう。今になって視界がにじんできてる。怖い。思考が散り散りになっていく。悲しい。恐い。泣きたい。

ああ——独りでよかった。そんなことを思っではいけない。救われない。不安から逃げ出したい。けれどきつと笑はもつと大きな不安や苦痛と戦ってるんだ……逃げられないんだ。そう思うと、不思議と勇気が湧いた。俺は、俺だけは絶対に味方でなくてはいけなと改めて思った。

静香には何て言おうか。妹が倒れたと言って、どんな反応をするだろう。腹違いの妹、父親の愛情の全てを“奪っていった”女を、果たして心底から心配してやれるだろうか。

ひとまず電話を試みよう。彼女の声を聞いてみよう。そうしたらいくらかまた力をもらえるはずだから。救えない思考だと思う。そのふらつく足で帰った家の灯りは、当然ながら点いてはいなかった。暗い暗い玄関を抜けて廊下の電気を点けると、それだけで胸に溜まった何かがのどからこぼれ出てくる。恐ろしいほどに重苦しい吐息だった。

そうしてリビングに入り、ひとまず冷蔵庫に残ったご飯をレンジに突っ込んでから椅子に座った。お茶も入れたけど、これはほとんど無意識で覚えていなかった。それをのどに入れて、身体が奥から冷えていくのを感じ、外がどれほど暑かったかによやく気づく。われながら末期症状だ。苦笑がこぼれる。

そうするとまた不安が再来して、居ても立つてもいられずに受話器をとった。時差とか、国際電話料金なんかも考慮に入れる余裕すらなかった。

——すぐに出てくれた。温かい、快活な声に救われる。

「そつちから電話してくるなんて、うれしいな。あはは、声が聞きたかった?」

「……ああ。聞いたかった」

「……何かあったの?」

俺の声を聞いてすぐに察してくれた。

「時間、大丈夫だったか?」

「はーくん、そんなの気にしないでいいから、ね。ほら、話してみて?」

そして気遣ってくれる。

今度は耐え切れなかった。耐え切れないほどの不安や悲しみを感じていてもおかしくはない、今は何も知らない静香に聞かせていい声じゃない——そうわかっていても、涙が溢れた。みつともなく嗚咽する俺を、静香はただ穏やかに慰めてくれる。もう何年も会っていない、ただ血縁だけの従兄だったはずだ——それなのに、こんなにも。

俺にとって静香は妹でも姉でもない、本当にただの幼馴染だった。歳が同じだったことと、笑という妹がいたことが、静香を対等な立場にしていた。血の繋がりが多少なりあったこともそれを助長していただろうと思う。

……初めて異性を意識した女性でもある。恋じゃ、ないんだけど。——落ち着いた?」

気づけば嗚咽も収まって、静香の声も明瞭さを取り戻していた。

泣いている間、彼女が何を言っていたのかほとんど覚えてないのが少し惜しい。

「話せる?」

「……ああ、……笑がな、倒れた、んだよ」

言葉はなく、ただ息を飲む気配だけが伝わってきた。「ひっ」という音は聞こえたかもしれない。心の動きは、当たり前だけど、見えない。

「そんな、そんなことって」

「大丈夫。大事には至ってないって、先生も言ってた」

「……でも」

「峠は一度じゃないだろうけど、当面は越えたと思っていいって」

ああ、人と話すということはなんて温かいのだろうか。あれだけ心配だった、潰されそうなほどの不安が、それを話すだけで穏やかに溶けていくのを感じる。緩やかな熱が胸の内から溢れて、目の裏とのどの奥、少しずつ侵していくのを感じるんだ。

静香という人ならば尚更。きつと何かを共有できる人だから。

「……ひどいね、信じてないけど、今だけ、憎ませてほしいくらい。神様、ひどいね」

「ひどいな。人非人だ」

「……あは、人じゃないんだもん、当たり前だよ。あはは」

「まったくだ……はは。でも、こうしてまた静香と話せるようになって、よかった」

「安心した？ 癒し系？」

「程遠いよな。昔っからうるさいやつだったもん」

「こういうときくらい褒めなよ、素直じゃないのも相変わらず。でもよかった、相変わらずで」

本当に変わらずにいてくれてよかった。

昔、子どもだったあのときでさえ、静香は父親に滅多に会えないことを気にもせず、「妹に会ってみたい」なんてことを言ってくれていた。子ども心に、会えない父親に毎日会っている妹の存在が、どれだけねたましいかもしれないのに。

平田さんの言うとおり、優しい子だった。本当に変わらずにいてくれて、よかったと思う。

「うん、あとね。こういうとき、誰より先に私に連絡してくれたのが、すっごく、すっごくすっごく、うれしい」

「……ごめんな」

「すがっていいんだよ。すがって。私、はーくんにそうして欲しい

な」

「それは、まあ、さっきのだけで十分だよ。ありがとな」

「……そか。ね、寝るまで話してよう？ まだ眠れないでしょ？」

「そうだな。積もる話、会う前に済ませちゃうか」

「それがいいよ。笑ちゃん……だっけ。妹とさ、会ったら、きつとそれどこじゃないから」

その言葉の意味はあえて探らなかった。本当に、今はそれどころじゃなかったから。

だから、積もる話には楽しいものを選んだ。今までどう過ごしていたか、楽しかった思い出を中心に、文化の違いとかに驚いたり、突然英語で話す静香に狼狽して笑われたり、とにかく楽しい時間だった。

本当に静香は変わってない。いつも楽しい時間を俺に与えてくれる。

笑もまた、静香と会って笑えるだろうか。腹違いの姉の存在を、彼女は知らない。またそれがストレスになってしまわないだろうか。——けれど、会わないわけにはいかない。既に全員の両親がいなくなってしまった今、いつまでも隠し通しておくわけにはいかないのだ。

でも……それでもと思う。

せめてそのときには、笑は万全であって欲しいと思う。できるなら会う前から笑顔で、静香を迎えてやって欲しいと思う。きつと難しいだろうと思う、きつとこの事実を知らばうるたえて、またストレスを溜めてしまうんだろうと思う。それでも疎んで欲しくはない。俺にとって彼女らはどうあったところで姉妹なのだ。

「……それでね、母さんったらまだ父さんのことを愛してるとか言っつて、全然再婚しようとしないの。困ったものだよね、私が学校へ行ってる間、自分を看病してくれる人もいないのに」

ふと気づけば静香の話は「楽しい」とはかけ離れたものになっていた。けれど懐かしむようなその声に悲しみはない、ただ穏やかな

ままの静かな声だ。

「なんで父さんと母さんが出会って、子どもができて、離れ離れになっただか、はーくんは知ってる？」

「……いや。詳しいことは全然」

「……そっか。じゃあそれは日本に帰ってからのするよ。全部終わってからのしてあげるね」

「ああ、そうしてくれ。一応、知りたくはあった」

「別にね、悪いことと思ってないの。浮気、不倫なんだけどね。でも、私母さんのこと好きだったから。父さんのことも。だから……だからね」

「わかってる。わかってるから、いいんだ」

そか。と、静香はそれだけ言ってしばらく黙ってしまった。

今になって、愛した二人が死んでしまったことに実感が伴ったんだろうか。こうして他人に話して初めて気づくこともある。——そう思うとやりきれない。静香は今の今まで、その事実を腹を割って話せる人が近くにいなかったんだ。誰にも不安を悟らせないようがんばっていたんだ。勝手な想像に過ぎない、けれど受話器の向こうで聞こえる静かなすすり泣きを聞いていると、どこかその悲しみが伝わってくるような気がした。悲しみと、そして「やっと話せた」という、少し安堵に似た感情だ。

「ぐすっ……う、はーくん……」

「聞いているよ。大丈夫だって、勝手に切るほど薄情じゃない」

「う……知ってる……」

そして俺も少し安堵した。静香に力になってもらったから、同じよう力になれてよかった。これも勝手な思い込みだけど、静香もきつと泣きたかったんじゃないかと思う。実感がほしかったんだと思う。

「ごめんねえ、突然」

次第にすっかりしてくる声色で、静香はまず謝った。気にしてないと言ささやき返す。

「こつちこそごめんな、電話でしか聞いてやれなくて」

「……仕方ないよ。帰ったら、思い切りだしめてね」

「……約束するよ」

「えへへ、うれし」

そうしたらもう大丈夫みたいだった。その声を聞くだけで、幼い頃の静香の笑顔が浮かんでくる。

最後に会ったのはいつごろだったろうか。高校受験間際、笑と会わなくなったところにはもう会っていなかったはずだ。中学入ってすぐの頃はまだ長期休暇の折に遊びには行っていたから、そのときだろうか。高校は「もう会えない」と母親が海外を選び、父親がその援助をし、それっきりだ。

だから中学入ったばかりの、その幼さの抜けない顔しか知らない。その頃から随分笑に似ていたことに驚いた記憶がある。笑は母親似なのに、どうして静香までその顔になるんだろうか…… ってな具合だ。

成長した静香もきつと、そういう顔になっているんだと思った。

そう思うと静香の現在の顔も容易に浮かんだ。

「今も、髪、結んだままか？」

「え？ うん。なんで？」

「ちよつとな、成長した静香想像してた」

「なあに、それ？ 胸はDだよ」

「……それは知らない」

「あはは、でもね、だいぶおつきくなつたよ。はーくんも、きつとそうだろうね」

「図体だけは随分な。従妹が倒れて泣くくらい、情けないままだけど」

「……それは、仕方ないよ。重なったんだもん、不安になれないほうがおかしいよ」

……そう言ってくれることを期待していた、と自覚するくらい情けないんだよ。

でも飲み込んでおいた。期待していたことを言ってくれたことがうれしかった。

「私が倒れても泣いてくれるのかな？」

「縁起でもないこと言うなよ。泣くくらいじゃすまんかもしれんわ」
「……へへ、ごめんね」

どうしてかうれしそうに、静香はその後少しだけ沈黙をはさんだ。随分と長い間話してなかったのに、その空隙を感じさせないほど気安い空気だった。元々話しやすい、話の合う子だったけど、こういうところもきつと「変わってない」っていうんだろ。海外生活をして、そこで留学資格をとるくらいだからきつと頭の出来は笑のほうに似てるんだろうけど——どこか似たもの同士の空気を感じる。

静香は笑に似ていて、俺にも似ていて、父さんにも母さんにも似ている。姉のようでもあり、妹のようでもあり、親友のようでもある。なんとなく、全部を持っている。だから時折わからなくなるけど、そのくせ全てをもっているから、どれであっても「静香」であるとわかる。そういう人間だ。

長い黒髪を後ろで一つに結わえて、少しばかり勝気な瞳以外は笑にそっくり。細い身体もきつと変わらない。……でも胸だけは似てないみたいだな。うん、だいぶかたまった。

そう思っていると、あくびが聞こえた。

「悪い、眠かった？」

「そっちは十一時くらいかな？ 一時間くらい進んでるんだよ」

え、と時計を見ると、確かに、随分話し込んでしまったみたいだ。

「あー……じゃあもう寝ないとな。ごめんな」

「ううん、うれしかった。楽しかったよ」

「じゃあ、よかった。また話そうな」

「うん。おやすみ、ありがとうね」

「ん。こっちこそありがとな、おやすみ」

受話器を耳から離す直前に「ちゅ」と聞こえた。

……あの野郎、妙なこと覚えやがって。そんなふうには苦笑がこぼれて、受話器を置いた後にため息が漏れた。

随分気が楽になった。きっと笑のことを樂觀できるほどではない、まだ彼女のことを考えると不安はあるけれど、それでもつづかれそうな重圧は消えてくれた。

——家族っていいな。そう思えた。

支えてくれる。支えてやれる。そういう相互依存、共依存の関係が、すごく素敵なもののように思える関係だ。今不安と戦っている、俺よりもずっと重いものを背負っているであろう笑のその荷物を、少しでも負担してやれたらと思う。

今夜はゆっくり寝よう。また明日、笑には元気な姿を見せてやろう。少なくとも他に心配することは何もないから、自分のことを考えてもいい、わがママを言ってもいいんだぞ、とそう言ってやろう。電子レンジのご飯がすっかり冷めてしまった。そういうことに気づいて、笑みがこぼれた。

——大丈夫だ、うん、俺は信じてやらなくちゃいけない。

いいや、信じている。幸せになれるんだ。

なれるんだよ、いつだって想っていれば、家族にだって、なんだって。

a n i n t e r m i s s i o n — 心人 —

心のない世界があつた。

その世界に心はなく、人も、草花も、風も、動物達もまた、ただ与えられた役目に従いただ漫然と生きている。

そこに苦痛はなく、快樂もなく、笑顔も涙もなく、それであればあるいは生すらもない。

そんな世界の片隅——種を残すために造られた施設の中で、一つ産声上がる。

母親はマニュアルに従いその子を抱き上げ、無機質な瞳をじろりとそれに向け、少しだけ、ほんの少しだけ疑問に首を傾げてみるのだ。

赤ん坊が泣いている。涙をこぼしている。

——何もない、この世界で。

夏空の下 — a n i n t e r m i s s i o n —

↓ 心人 ↓

ぱたり、小さな音を立てて本が閉じられる。随分と夢中になって

いたらしい、その動作すらもある種無意識に行ったもので、読み終わったというのに余韻でしばらく動けそうになかった。

笑が倒れる少し前に律から借りた一冊の本『心人』がそれだ。漫画しか読まない俺が不思議と心惹かれ、手にとってしまった短編小説。心を失くした世界に生きる、心ある青年の物語だった。

ライトノベルとでもいうんだろうか、軽い文体で、学のない俺にも簡単に読み進められた。

優しくは決してない物語だったけれど、その「救いようのなさ」の中に、ほんの少しだけ、ごくごくわずかだけれど、笑顔になれるものを感じた。それについて少し考えてみて、ああ、そうか、そういうことなのかとすぐに納得してしまった。

——似てるんだ。きつと、少しだけ。

翌日の学校はやっぱ一人での登校だ。あれから笑の検査結果が出て、本格的に入院が決まった。一人で歩く通学路は静かで、ああ、笑がいても静かには違いないんだけど、本当にそこに音がなくなってしまったようで、どうしようもない寂寞に襲われる。秋に入ってしばらくが経って、涼やかではあるが爽やかな秋晴れ、いい陽気とはこのことだった。けれど心象はまさに対照的、一人であるという事実が何よりも俺を打ちのめした。

文化祭のことさえほとんど覚えていない。喫茶店は成功したのか、俺はウェイターとしてすっかり仕事をしていたのか、休憩時間には何をして過ごしていたっけ……静香と話して随分落ち着いたはずなのに、本当に情けない限りだった。ただ一つ覚えているのが、信や律、浩、他のクラスメイトが明るく話しかけてくれたことくらいだ。やはり友達はいいいもんだ。そう素直に思う。

そうして落ち着いてみて、放課後にはようやく律への用事を思い出した。教室から出ようとする彼女を呼び止め、かばんから取り出した文庫本をそつと丁寧に差し出す。

「読み終わったから。ありがとな」

「うん。……どうだった？」

軽く本の状態を確かめてからの質問だ。傷も汚れもないことを確認しかばんへしまい込むと、期待に満ちた瞳を向けてくる。

どうだった——と、言われても。特に感慨はなかった。

「救えないなあ、と思った」

「あー、うん、そうだけどさ、何かないの？ 他に」

「でも、ちよつとだけこう……な？」

「……わかんないよ」

といわれても言葉にするのは随分難しい。温もりのようでもあり、悲しみや切なさとも違う——そう、あえて言うなら「寂しさ」に似た感情を覚えた。けれどそれを伝えようとも思えない。今だからこそ、そういう弱みを見せなくなかった。今更、っていう感じではあるけれど。

「はあ……一君に期待するほうが間違いだっただかー」

「失礼な。面白かったのは確かだ、ちゃんと最後まで読んだし」

「はいはい。面白くてよかったね」

本当に失礼なやつだ。

けれどちゃんと最後まで読んだことについては信じてくれたらしい。

「また何かあったら言ってね。貸すから」

「ああ、ありがと」

用事は済んだ。律に別れを告げて自分の席へ戻ると、その変わり映えのしない木製の机になぜか苦笑がこぼれる。とはいえ、それが大理石だったら恐いくらいだけでも。

そんな取り留めのない思考にまた苦笑して、教室を出た。なぜだろう、頭がぼうつとする。今すぐにでもベッドにもぐりこみたいくらいに眠い。あのときお世話になった校医さんとは少しだけ馴染みになった。保健室で少しだけ眠らせてもらおう——進路を変更するのだった。

それが明晰夢だとすぐにわかった。それこそ矛盾するようだけれど、白昼夢のようなかすんだ風景があまりに幻想的で、ああ——自分分は満たされていないとわかったからだ。

霧に覆われた花畑。二、三十メートルもすると霧が溶けて闇に消えていく。光源は見えないのに薄らと明るくて、花々たちがほんのりと色づいている。風はない。水音がかすかに響いている。そういう場所だった。

光の真ん中にぼつりと立っているのが俺だ。ここに立っていてまづ思う——「動きたくない」。ここは心地いい。

けれど何もわからないままだったから、ひとまず歩くことにした。方向は適当に、そのまま向いていた方向へ。指針はなし、闇は遠ざかり、光はまるでスポットライトのように俺を追ってきた。先まで安堵を運んだその光に対して今度抱いた感想は——「逃げられない」。どこまでも追ってくる。

どれだけ歩いても、どこまで歩いても、景色は何も変わらない。色々々な、けれど一様に淡い花々、大きさも変わらない水音に、俺を追いつく白い光。いつそ闇に溶け込んでしまいたいと思うほど、それは変わり映えのない夢だった。

ぼつ、と目先に光が灯る。光源だろうか。指針と希望を一緒に得たような気がして、思わず足を速める。

離れていつている、ということに気づいたのは、俺が走り出したことを自覚してからだった。気づけば息が上がっていて、光はさっきよりも少しばかり小さくなっていった。はっ、はっ、はっ、という細かな吐息がやけに耳についた。

「待て、つてば」

ついに声に出してみた。耐え切れなくなった。

もちろんといっていいのか、それに答えはない。不安と寂寥が一緒に襲ってきて、俺の背に張り付いたのを感じた。途端に足が重く

なる。

一度だけ目を閉じて、すぐに開いて目の前の光を確認すると、今度は落ち着いて歩き始めた。花々を踏みしめ、歩くことにさえ罪悪感を覚えながら、光に向かつてただ一直線に、直向に。

……近づいてくれない。ただ目の前で明滅するだけ。こんなもん救いでもなんでもない、いつそ目を背けてしまおうか……そう思っていたら、光のほうから消えてしまった。

すとん、と心臓が落ちた。脳みそがどつか遠くへ飛んでいった。まっつて、思わずその場にへたり込んでしまった……というのを、どこか自分とは別のところで自覚した。自分じゃない自分が、自覚をする。そういう違和感に気持ちが悪くなって咳き込むけれど、やっぱり状況は何も変わっていないと、周りから聞こえる水音が教えてくれる。

ぴたん、ぴたん、ぴたん、ぴたん。等間隔で、小さくかすれた音が、断続的に響いている。水のはじける音だ。これだ、と思う。これが全てから希望を奪う、この動きのない世界の象徴なのだと思うた。

そういうことに気づくと、今度は勢いのある、ぶわあつと音が聞こえてきそうな大きな光が灯った。目の前が一気に明るくなって、心臓が浮き上がって動悸を刻み、飛んでいった脳みそが戻ってきて思考を許してくれる。「あれに向かつて走れ——！」もう思考の必要すらもないような答えだ。

それを手にする——そういう瞬間に、光は遠ざかった。

またか。まただ。

そうか、そうなんだ、これが「光」なんだ。これが「希望」なんだ。「心」なんだ。

手に入れないものなんだ——「希望なんてないんだ」。

やがて光はただの白い点となり、俺はその場に立ち尽くした。

——そういう夢だった。

目を覚ますと、まず目に入っただのはカーテンの波だった。保健室で眠っている間に、先生がカーテンをしてくれていたらしい。寝汗がひどくて気持ちが悪い。息も多少上がってる。動悸も少々。

近くのテーブルに置いてあった水を呷って、一息に全てを吐き出した。熱が戻ってくると少しだけ安心して、苦笑いが落ちてくる。

なんとなくだけど、わかった気がした。これが俺なりの理解なんだろうなあ、とそういうことだけ、それくらいのことばかり、笑のことがわかった気がしたのだ。そうすると自分が感じていた寂しさの意味も、その理解の中へ溶け込んでくる。溶け合って、一緒になつて、とたんに笑に会いたいという気持ちが膨れ上がった。さつき夢に見たあの光のように、ぶわあっ——って、思った。

ベッドサイドのかばんを取り、カーテンを開け、デスクで仕事をする先生に一言告げてから、そのふらつく足で病院に向かった。どうも夢見が悪かったらしい。

面会時間はあとわずか、という時間まで寝ていたらしい。先生にも悪いことしたかな、なんて思ったけど、今はただ必死に笑に会いたかった。

病室で眠る笑の姿を認めると、その横にパイプ椅子を広げて腰掛け、その寝顔を見つめる。撫でるような静かな吐息を耳に感じて、安堵して、胸に残った確かな「しこり」をじくりとかみ締めてみた。うん、……大丈夫だ。大丈夫みたいだ。

笑の頬に手をやり、髪に移し、ゆっくりと撫でてみる。つややかで指通りのいい、月並みだけれど、絹のような——いいや、絹よりもずっと質感に溢れたきれいなものだった。

「夢、見たんだ。はつきりこうだって言える夢じゃなかったけど……」

そこで言葉を切り、手を止める。

「……怖かったよな」

独り言はそこで終えて、今度は手だけを動かした。変わらぬ穏や

かな寝息を立てる笑に少しばかり安心して、それと重なるようにため息がこぼれた。

最後に頬を撫でてその感触、温もりを感じてから、起きるのを待たずに病室を後にした。

笑の寝顔は安らかで、……俺の動悸も汗も、もうなかった。

第一終章―微笑む花―1

笑は郊外の総合病院に入院することになった。個室をあてがわれ、そりゃあ保険が利くから払う額に上限はあるけど、費用はそれなりにはかさむらしい。正直なところ確かな痛手ではあるけれど、それを惜しむ理由など皆目見当たらなかった。

病名は心筋梗塞。虚血性心疾患の一つで、心臓に酸素を供給する冠動脈の血流量が下がり、心筋が虚血状態に陥り壊死してしまう病気のこと。……なんて説明をされても、さっぱり意味なんてわからない。ただ一つわかったことは、病院にたどり着けたことで確率が相当下がりはしたが――死亡率はまだ十パーセント弱ある、ということだけだった。

要するに「大事をとれ」ということだ。不安を拭うのは医者だけの仕事じゃない――そういうことくらいだった。

夏空の下 ―第一終章 微笑む花―

↓ 1 s t e p i s o d e ↓

あれから数日、学校もバイトも休んで笑の病室を訪ねる毎日だ。だってこんなのないだろう、いくら助かる可能性が高いからって、あんなにも不安と体調に血色を悪くする笑を見ていたら、そんな気力だってしぼんでしまうに決まってる。毎日毎日会いたくて、会えば不安が再燃する。

笑の前ではそれを上手く隠せている自信はある。そりゃあ面会に行く時間が時間だ、バイトも学校も、休んでしまっていることはバレてはいるんだろう。それでも俺が抱えた不安なんてものは笑のそれに比べてしまえば、ちつぽけで隠せない道理がない。

いいや、それもバレているのかもしれない。表には出さないが人の機微には敏感な子だ。何かをごまかすような笑顔しか作れない俺の、ちよつとした違和感に、帰った後で眉をひそめている様子が目に浮かんだ。

あるいはだからこそ、それが他のどこかへ伝わってしまうのも必然だったのだ。学校が終わってしばらく経った頃だろうか、午後六時にたずねてきたのは律と浩だった。二人とも心配そうな顔を隠そうともせず、ノックに対する俺の返事を聞いてすぐに病室へ入ってきた。

「笑ちゃん、調子どう？」

律の第一声は笑を気遣うものだ。さすが、と思う。

「だい、じょぶ、です」

「そつか。ごめんね、あたしたちいるとゆっくりできないかもしれないけど」

「……平気、です」

ごめんね、ともう一度。

律はやっぱり笑の「本当の部分」——本質というものをある程度見抜いているんだ。人が嫌いではない、誰より情に飢えていて、そのくせその感情を表現する術にあまりにつたない彼女の、本来の優しさというものをだ。そうとも、彼女は不器用すぎるだけで、いつ

だつて俺のことを氣遣つてくれていた。

律もまたそういう人間だ。ただ笑よりも大分器用だったというだけの話であつて、ほんの少し深く付き合つてみれば、ちゃんと見えってくるものだつてある。

きつとそれを赤の他人に求めることも間違つてはいるんだろう。それもわかつている。

「でも信君、意外と頭回るよね。ちゃんと校医さんを呼ぶなんて、普通氣づかないもん」

「ああ……保健の先生つて養護教諭つていうんだっけ」

「そうそう。でもほら、ミソガクつて新設校じゃない、だから実はすぐく制度は試験的なものが多いんだ。普通は常駐してる校医さんなんていないけど、重病者が入学したときのためとかなんとか、校医さんを専属的に雇つてるんだつてさ」

「……先生が言つてた『運がよかった』つて、そういうことか」

運びこまれたとき、俺の話を聞いた病院の先生が言つていた。「運がよかった」と、少しだけ安堵の息をついたのを覚えている。

校医というのは養護教諭と違って、ちゃんとした医師免許を持っている、要するに健康診断などのときにだけ来校する普通の医者らしい。対して養護教諭は学校所属の、持っている資格はその名の通り養護教諭などといったものになる……らしい。

「まあ信君がそこまで気を回したとも思えないけど……駆けつけたのが養護教諭じゃなくて校医さんだったのは、確かに信君のお手柄だね」

「というと？」

「ちゃんと笑ちゃんの症状を見てた、つてことだよ。それをしっかりと伝えたから、校医さんが行つてくれたんだと思うよ」

「また礼言つかないとな……」

本当、この先頭が上がらない……とは言わないけど、やはり感謝ばかりはしてもし切らない。きつとそれすらも信は笑い飛ばすだろうけど、今度遊びに誘つのもいいかもしれない。

「にしても律、詳しいな」

「そりゃあ、学校の生徒会なんて大したことできるわけじゃないけど、事情を把握するくらいなら結構融通がきくんだよ。予算の絡むことだと、特に」

「……へえ。意外とシビアだな」

「うーん……できることなんてほんとにイベント関係くらいだから、何もないときなんて書類整理とかくらいしかないんだよね、やること」

「……うん、だから、ある意味シビアじゃないか。現実的すぎて泣けてくる。」

と、気を取り直すようにベッドの上に視線を戻した。うつむく笑の表情は変わっていないけど、どこか硬さが抜けたような気はする。自分のために動いてくれた人がいる、というのがほんの少しでも実感できたんだろう。

見た目ほど悪いやつじゃあない、ということだけわかってくれれば十分だ。それに実感が伴えば尚更。さすがに信が誤解されたままじゃあ、俺だって信だって納得はできなかった。

納得が何だと言う人もいるかもしれない。けれど心のどこかで何かしらの折り合いをつけるということは、前に進むためにいつだって必要なものなんだと改めて思った。だから結局そういうことなんだ。——まだ、前に進めそうにないんだ。そういう発想が、笑と二人きりになると……いや、その後一人きりになると鎌首をもたげる。

浩はまだそこまで腹を割って話すには時間が足りなかったかな……律の存在の大きさを実感する。思えば高校に入ってすぐ、律は俺と信に話しかけてくれたんだった。飛び切りの劣等生っていうんで入学最初の実力テストでまず目にかけてくれた。どうしてそこまでしてくれるのか、と改めて聞いたことはない。けれど律は俺たちの成績が大した成長を見せなくても、あるいは気まぐれに好成績をとっても、変わらず付き合ってくれていた。

きっかけらしいきっかけはなかったと思う。ただ馬鹿らしい騒ぎ

に毎度律を巻き込んだことに関しては、思い返してみれば申し訳なかったなあと思う。

笑が快復したらどこかへ遊びに行こう。——そういう発想が、友達といると湧き上がってくる。信じていられる。

「笑、ちよつと外で話してくるな。また来るから」

「……ん」

言葉少なは変わらず。それでもいいかと笑って、律と浩を促して病室を後にした。

もちろんその後の話題は俺が学校を休んでいること。とがめられるかと思っていたら、そうでもないらしかった。

「うん、……わからなくはないんだよ。あたしだって、一君とか信君とか、友達が倒れたらお見舞い優先させちゃうかもしれないしね」

「……なんだかんだで学校行っちゃう気もするけどね。僕の場合は「行ったほうがいいってのはわかってるんだよな……留年なんて間違ってもできる立場じゃないし」

そうとも、こういう状況だからこそ現実をしかと見据える必要があることは、頭では理解している。そりゃあ俺だっていつまでも子どもとばかりは言ってられない、いくらかの理不尽も受け入れながら生きていかなくちゃならないってことくらいは、特にここ最近のことによくわかった。

けれどもどうも立て続けで、現実感なんてものが、ちゃんと立っていられるわけもないじゃんか。自分すら見失いそうになる。

「お見舞いされる側のことを考えてみたらどうか。牧野さんだったかな、あの子が、一君にどうしてほしいのかって」

「……悪い、それも大体わかってるんだ」

「行ってほしいんだろっね」

「それは間違いないな……自分より他人を優先するやつだ。そのくせ、見舞いに行くこと自体はやっぱり喜んでくれてる、と思う」

おそらくうぬばれではないはずだ。

何度も言うよう一番不安なのは笑ということに間違いない。独りになることを嫌ってる。それなら俺にどうしてほしいかなんて言われずともわかるというものだ。けれど笑だって立派な、俺よりよっぽど人を氣遣える「人間」なんだ。理性がそれを否定してしまう。

わがままでいいと言ったのは俺じゃないか。だったらそれに応えてやりたいと思う。けれど笑の言う「本当のわがまま」って何だろうか……堂々巡りになって、結局俺はその氣分の赴くままに笑の元へ来てしまう。悩むくらいなら行動しろ——そういう一般論も空しく響く。どちらを「行動」というのか。

「一度学校行ってみたらいいよ。それで自分の気持ちと笑ちゃんの反応を見て、しっかり決めてみないと」

「……だな」

結局、そういう律の結論に至る。まさしく妥当な判断で、まさしく適切な判断だ。

大体のところ、悩みというもののほとんどは、それを言葉にした時点で答えが出ているものと誰かが言っていた。それが完全に正しいとは思えないけれど、ある程度納得出来る部分があるのも事実だ。笑が倒れた日、静香に電話したときもそうだった——そういう言葉が欲しいから話したってこと、誰にでもあるはずだ。

また俺はそういうことをしてしまったのかもしれない。およそ男らしいとは決して言えない、どこか情けない行為を、笑を守るんだと言う俺がだ。まったく、どうしようもない。

「行くよ、明日から。悪いけどノート貸してくれないか？」

「ん、もちろん。今回はコピーだって許しちゃおう」

「さすがだ律、コンビ二行くぞ」

「うん。じゃあ浩君、どうする？」

「僕はこれからバイト。一君、土曜日、きつと来てね」

「ああ、行くよ。ごめんな、電話はしといたけど、店長にもちゃんと謝っとかないとなあ」

「それがいいね。平田さんに言えば、たぶんそれでいいとは思って」

となれば、これで学校もバイトも再開。ようやく生活が平常運行に戻るわけだ。そこに笑がないというだけ。あるいはだからこそ、「いつもどおり」をちゃんと作ってやらなくちゃいけない、ということを感じる。笑が戻ってきたとき、何の違和感も不安も抱かないよう、しっかりと自律しなきゃいけない。

頬を軽く叩いて立ち上がり、ひとまず浩と別れ、ロビーで待つてるという律を残して病室へ向かった。扉を叩いて返事も待たず、上半身を起こして座っている笑に笑顔に向けた。たぶん、うまく笑えていたはずだ。

「……お待たせ」

「おかえり、なさい」

「なんか、ちよつと違う気もするけどな」

今度漏れたのは苦笑。でも悪い気分じゃない。

なんとなく、笑の顔を普通に見られるようになった。ベッドの横のパイプ椅子に浅く腰掛けて、ぼんやりとする笑の髪を、いつものとりに梳いてみる。変わらない、と思う。

「明日から学校ちゃんと行くことにした。時間減るけど、ごめんな」

「いいよ、行って、きて。心配、ない、から」

「そっか。でも放課後は来るよ。迷惑じゃないか？」

「そんな、こと、ない。まってる」

そっか、と笑う。

その言葉がすごく嬉しかった。だってそうだろう、笑が素直な気持ち話を話してくれた。素直に「俺といたい」と言ってくれた。これほど嬉しいことが他にあるだろうか。

独りになっても、こんな風な喜びを忘れずにいたいと思う……たぶん、それが強さっていうことなんじゃないかと思う。

手を振る笑に倣って、病室を後にした。

家の門が見えるところまで来て、ふとその前に人影があることに気づいた。街灯の明かりも届かないところで、門灯も落ちているから、暗くてよくはわからない。警戒したほうがいいかな……なんて警戒の「け」の字もないままそこまでたどり着くと、ぼんやりとその姿が現れてくる。

俺に気づいて走り寄ってくる、笑よりも一回り小さなその人影の正体は、子々だった。焦燥とした様子で俺に詰め寄ってくる。

「一！ お姉さまが倒れたって……！」

「……ああ」

「ああじゃないわよ！ どういうこと！？」

「落ち着け！ とりあえず家に入ろう、な」

「だから……！」

もう一度声を荒げようとした子々だったが、すぐに状況を思い出したようだった。……逆に言えば俺を待っている間も、ここがここで、今がどういう時間なのか、把握しきれていなかったということだ。それくらい、彼女にとっての笑の存在は大きなもので、今回起こったことは重大なものだということ。

俺の後に続いて玄関をくぐった子々は、さっきの氣勢が嘘のように消沈してしまっていた。リビングの明かりを点けて、テーブルの席についた子々の前に温かいミルクを置いて、それを一口飲んだあとも同様だった。

「ごめん、ありがとう」

「いや、気にすんな。落ち着いたか？」

「うん。……それで、どういうこと？」

「……ストレスから来る病気らしい。いじめにな、あつてて」

椅子が転げた。それだけは見えた。その一瞬あとには子々の燃え上がった瞳が目の前にあって、状況がわからなくなったから。

「どういうことよ。気をつけてなさいって言ってたわよね、あたし」

「……悪かった」

「悪かったじゃないわよ！　それで済むと思ってるの！？」

「それでも、悪かった」

けれど一貫して変わらない。俺が子々に対してできることというのは、己の不出来を詫びるくらいのものでしかないんだ。いずれにしたって時間は巻き戻らない、その上子々に求める協力だって学校が違えば事情も変わる。だから俺にできることはただ子々に頭を下げるくらいでしかない。

「……なによ、あたしがバカみたいじゃない。今更だって、わかってるのに」

「次はない。もういじめなんて起きない。それは断言する」

「……絶対ね？　百パーセント、信じていいのね？」

「ああ。だから今は……病気のことだ」

「病気……？　何か、見つかったの？」

子々はこれを聞いて正気を保てるだろうかと思う。けれどもう「病気」だと話してしまった。子々をこの家に上げた時点で——つまり子々がここに来た時点で、既に後戻りなんてのはできなくなってしまったのだ。

だから話してやろう。正直に、端的に、笑の患う病気の名前を。

「……そんな、だって」

「子々はたぶん、俺よりずいぶん頭がいいだろうし、知ってるだろうけど……笑の年齢では確かに珍しいものらしい」

「ええ、ええ、そうよ、それなのに」

「ストレス性——って言ったら、たぶん、半分くらい納得できるだろう？」

「幼少児からの鬱積、両親の死、慣れない環境にいじめ……ストレスを受ける理由としては十分、でもそれが心臓になんて……」

やはり子々は心筋梗塞についてある程度の知識があるらしい。少なくとも非常識なレベルの知識しかない俺よりは上、常識的なレベルにはあると思っていはいはずだ。

だからこそだろう、常識のレベルでそれを知っているからこそ、

その事態の深刻さが理解できるとも言える。万が一よりずっと高い確率で、笑はこの世からいなくなってしまうのだ——そういうひどく寒気のある事実を、俺よりもずっと詳しく。

「しかし、中学生とは思えないよなあ」

「またそうやって茶化す。わかってんの？」

「だからそうとも、わかっていて場を茶化した。」

「俺が言っているいいことなのかわかんないけど……でもそうやって心配することじゃないと思うんだよ、俺らが笑にしてやれることって」

「……本当にそう思う？」

「いや、正しいかどうかはわからん。でも、そう決めた」

心配するというのは、こう言っちゃなんだが、それが対象にどう響くかは別としても誰にでもできることだ。そしてたぶん俺がそれをするのは、少なくとも笑にとっては特別であることは間違いないだろう。

けれどと思う。笑が俺にして欲しいことというのは、本当に「心配する」ことなんだろうか。律や浩の話を聞いて決めたことは「いつもどおり」であって、決して笑に憂慮することじゃない。そりゃあ心配だってする。大丈夫か、不安じゃないか、怖くはないか、そうやって訊くことだってあるだろう。

「だからこそだ。だからこそ、俺がそれを顔に出すのはよくない。」

「心配はするけどさ、心配そうにしていると、笑が俺を心配するんだよ」

「……うん。わかる、気がする」

「まあ、あいつのことはいまだによくわかんないところもあるしな。」

「……割と表情に出るタイプだけど」

「……へえ」

俺の言葉に、子々の顔が少し変わる。何か妙なことでも言ったかと思って首を傾げ、すぐに気がついた。……そういえば笑が言ってたっけ、「何考えてるかわからないって」というふうに、確かに起伏に富んだ表情をしているわけじゃあない。

でもなんとなくわかるんだ。笑の顔を見てると……いいや、身体全体を見ているとって言ったほうがいいのか、とにかくあいつのどこかしらにそれが現れる。元々感情表現が苦手ではあるけれど、苦手というだけであってできないわけじゃあない。そういうことに気がついたのはいつだったか、身体のどこかしらで何かを表現していた。例えば少しわからないことがあると小首を傾げたり――

「……でも、なんでかなあ、辛そうには見えなかったのになあ」

「……そうね」

いつもそうだ。自分に何か不都合があると隠そうとする。そういうことだけは妙に巧い。そういうことができるんだったら、明るい表情を偽ってみてもいいじゃないか。そういうことすら思ってしまうほどにだ。歯噛みする子々と同じような表情を、たぶん俺もしているんだと思った。

「なんで……気づいてあげられなかったの……ねえ。あたしよりずっと、お姉さまに近かったのに」

「……」

今度は謝ることさえできなかった。うつむく子々の下、テーブルの上に水滴が落ちてるのが見えたから。

「お姉さまには、たくさん、救われてきたの。あの人はそうは思っていないだろうけど。……なのにあたしが、あたしは何をしてたのかしら」

気丈だと思う。それでもそれが涙と悟られないように、声を震わせることさえ許さない。

それでも泣かずにはいられない。子々にとって笑という人間がどれほど大きなものであるから、ここにきてようやくわかった気がした。……あるいは「思っていたよりもずっと」ということかもしれない。

そうであるなら、俺が言えることなんて一つしかない。

「大丈夫だよ、笑は」

「……何を」根拠に、とは言わせなかった。

「大丈夫だ。絶対治るさ」

上目遣いの子々が俺の瞳を探っている。たぶん不安も心配も、恐怖だって看過されているはずだ。そこまで上手く隠せている自信はない。けれど同じよう、同じくらいに自信だってある。笑がまた俺の、俺たちの隣に帰ってきてくれる——そういう希望を、同じだけそこに宿している自信がある。

「……そうね。だいじょうぶよね」

「そうだとも。笑のいない生活なんて、今更想像もできないしな」

「そうね。そんなの、できっこないわね」

今度の声は震えていた。抑えることができなかったみたいだ。

カップを引きとって、もう一度ホットミルクをいれることにした。笑がいつの間にか買ってきていたはちみつを見つけたから、バナラエッセンスとそれをまぜてみる。……その少し特別なホットミルクの作り方は、これもまた笑に教わったものだ。いつだったかは覚えてないけれど、いつだったか覚えてない出来事があるくらいの時間を一緒に過ごしてきたんだと思うと少し感慨深い。

子々の前に出来上がったそれを置くと、彼女は小さな礼の後に飲み始めた。

「……おいしい。意外と」

「意外は余計だ。笑に教わったんだ、それ」

「……じゃあ、すごいおいしい」

「……じゃあってお前」

……そして笑ってくれた。

大丈夫だ、そう信じられるような顔で。

子々を家まで送ったあと、帰ってきた家の電気を一切点けずに、部屋のベッドに横になった。ひとりになると途端に鬱屈としたものが胸に立ち込める。それが暗い吐息になって口から漏れると、また新しい何かが胸に積もってくる。子々のでけえ家の感想を苦笑と共

にこぼしてみても変わらない。

「学園長つてのはそんなに儲かるもんなのかな」

…… 変わらない。

ああ、やっぱり独りはだめだな。隣に、いいやそれでなくても家の中にだ、誰かがいないと不安になる。「離れていても」と物語で言うけどさ、やっぱり「距離」って大事なものだと思うんだ。家の中に彼女がいるとわかっていて、ただそれだけで信じられないくらいに心強い。肩が触れ合う距離で彼女の温かさを感じているともう怖いものなんてないと思えるくらいだ。

…… だから帰ってきたばかりの冷たい枕が、ひどく凍えそうだな。胸に積もった「何か」が少しずつ冷えていくのを感じる。登ってくる。目の奥に溜まっていく。

ああ、やっぱりだめだ。これをこぼすわけにはいかない。子々の弱々しい涙を見ていた。だからそれをこぼすことの意味がよくわかってる。今、俺の隣に俺はいない。笑も、子々も、浩も律も信もだ。だから――

ごくり、と喉の鳴る音が部屋に響いた。

「…… 大丈夫。もう二人の家なんだ」

こぼれてはこなかった。たぶん、身体にたまってはいるけれど。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9346e/>

夏空の下

2011年11月11日21時24分発行